

複式学級指導の手引き

(平成 27 年度改訂版)

平成 28 年 3 月

島根県教育委員会

はじめに

島根県教育委員会では、島根県内の複式学級を有する小学校の現状を踏まえ、複式学級指導の充実を図るため、平成 26 年 3 月に「複式学級指導の手引き」を発刊しました。今回発刊する手引きは、前回の内容に、新たに複式学級を有する学校の学校経営・学級経営の際の留意点や、島根県でこれまで多く取り組まれてきた「同単元同内容同程度（A・B 年度方式）」による年間指導計画作成に係る留意点、また、前回取り上げていなかった道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動の年間指導計画作成に係る留意点を加え、改訂版として発刊するものです。

少子化、情報化、国際化、価値観の多様化等、子どもたちを取り巻く環境は近年大きく変化しています。急速に変化する社会を生き抜いていくために必要な力を子どもたちが身に付けられるよう、「アクティブ・ラーニングの視点」からの不断の授業改善が求められています。単式学級、複式学級に関わらず、児童が主体となり、友達との対話を通して自分の考えを広げたり深めたりできるような授業を展開していく必要があります。子どもたちが主体的・協働的に学ぶ場をどのように設定するかは、これからの複式学級指導の重点課題です。

県内の約 3 分の 1 の小学校が複式学級を有している島根県では、過去から現在に至るまで、多くの優れた複式学級の授業実践が行われてきました。昭和 27 年に始まり 64 年の歴史をもつ全国へき地教育研究会が、第 2 回大会（昭和 28 年）、第 32 回大会（昭和 58 年）、第 47 回大会（平成 10 年）と島根県で 3 回開催されるなど、島根県の複式教育の実践は、全国的にも先進的なものであり、他県の取組にも大きな影響を与えてきました。このような島根県の複式教育の伝統を基盤とし、複式学級で学ぶ児童がこれからの社会を生きていく力を身に付けられるよう、本手引きを活用し、複式学級指導の充実に努めていただきたいと思います。

最後になりましたが、本手引きの執筆にあたってご助言いただいた島根大学名誉教授有馬毅一郎先生に、心から感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月

島根県教育庁教育指導課長

山崎 敦史

目 次

ページ

第1章 複式学級とは

1 複式学級とは	1
2 複式学級の特性	1
(1) 複式学級のよさ	2
(2) 複式学級指導上の課題	2

第2章 複式学級指導の現状と課題

1 島根県のへき地指定校と複式学級を有する学校	3
(1) 本県におけるへき地指定の小学校及び中学校	3
(2) 本県における複式学級を有する小学校	4
(3) 全国の複式学級を有する小学校	5
2 複式学級の学習指導の現状と課題	6
(1) 「同単元同内容同程度（A・B年度方式）」と「異単元（学年別指導）」	6
(2) 児童数の減少と複式学級を有する学校数の減少	7

第3章 これからの学習指導と複式学級指導

1 学習指導要領の改訂より	9
2 アクティブ・ラーニングの視点からの授業の充実	9
3 学力調査の分析結果より	9
4 複式学級の特性を生かす	10

第4章 複式学級を有する小学校の教育課程

1 教育課程の編成	11
2 へき地・小規模学校における教育課程編成上の留意点	11
3 複式学級における教育課程編成上の留意点	11

第5章 複式学級の指導計画

1 指導の類型	13
2 島根県の類型別の実施状況	15
3 島根県の複式学級指導の変遷と同単元同内容同程度（A・B年度方式）	17
4 指導類型ごとの長所・短所と留意点	18
(1) 異教科（学年別指導）	18
① 異教科指導の長所と短所	
② 異教科指導を実施する際の留意点	
(2) 同教科異単元（学年別指導）	19
① 同教科異単元指導の長所と短所	
② 同教科異単元指導を実施する際の留意点	
(3) 同教科同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）	20
① 同教科同単元同内容同程度指導の長所と短所	
② 同教科同単元同内容同程度指導を実施する際の留意点	
(4) 同教科同単元同内容異程度（完全1本案、くりかえし案）	23

①同教科同単元同内容異程度指導の長所と短所	
②同教科同単元同内容異程度指導を実施する際の留意点	
(5) 同教科同単元異内容（1 本案、くりかえし案）	24
①同教科同単元異内容指導の長所と短所	
②同教科同単元異内容指導を実施する際の留意点	
(6) 折衷案	25
5 合同学習	26
6 集合学習	27
7 交流学习	28
第6章 授業時数の取扱い	
1 各教科等の年間授業時数と総授業時数	29
2 1日の生活時程や時間割作成における工夫	30
第7章 学年別指導における学習指導方法	
1 直接指導	31
2 間接指導	32
3 「わたり」と「ずらし」	34
(1)わたり	34
(2)ずらし	35
4 ガイド学習	39
(1)ガイドの役割	39
(2)ガイドの位置付け	40
①教師が中心になって授業が展開される場合	
②ガイドが中心となって授業が展開される場合（同時間接指導）	
(3)ガイド学習の留意点	40
第8章 複式学級の指導と評価	
1 「わたり」による指導における評価の留意点	42
2 同単元（題材）同内容同程度（A・B年度方式、2 本案）指導における評価の留意点	42
3 同単元（題材）同内容異程度（完全1 本案、くりかえし案）、 同単元（題材）異内容（1 本案、くりかえし案）指導における評価の留意点	43
第9章 複式学級における学習指導方法の工夫・改善	
1 教師の構え	44
2 ノートのとり方の指導の工夫	45
3 黒板やホワイトボードの使い方の工夫	45
4 多様な考えを引き出す工夫	46
5 効果的に学年別に学習する座席配置	46
第10章 複式学級を有する学校の学校経営・学級経営	
1 初めて複式学級を有する小学校に勤務する教職員の皆さんへ	48
2 管理職のリーダーシップのもと学校全体で取り組む	49
3 教科書無償給与に係る手続き	52
4 転出入児童に未学習が生じないために	53

第11章 各教科等における指導のポイント

1	複式学級における国語科指導のポイント	54
2	複式学級における社会科指導のポイント	54
3	複式学級における算数科指導のポイント	55
4	複式学級における理科指導のポイント	55
5	複式学級における生活科指導のポイント	56
6	複式学級における音楽科指導のポイント	56
7	複式学級における図画工作科指導のポイント	56
8	複式学級における家庭科指導のポイント	57
9	複式学級における体育科指導のポイント	57
10	複式学級における道徳（道徳の時間）指導のポイント	57
11	複式学級における外国語活動指導のポイント	58
12	複式学級における総合的な学習の時間指導のポイント	58
13	複式学級における特別活動指導のポイント	58

第12章 各教科の年間指導計画例

	はじめに	59
1	国語科（同単元異内容、異単元、折衷案：同単元異内容・異単元）	60
2	国語科（折衷案：同単元同内容同程度・異単元）	65
3	社会科（異単元）	70
4	社会科（同単元同内容同程度）	75
5	算数科（異単元）	80
6	理科（異単元）	85
7	理科（同単元同内容同程度）	89
8	生活科（折衷案：異単元・同単元同内容異程度・同単元同内容同程度）	94
9	音楽科（同題材同内容異程度、同題材同内容同程度）	98
10	図画工作科（同題材同内容異程度、同題材同内容同程度）	102
11	家庭科（折衷案：同題材異内容・同題材同内容異程度・同題材同内容同程度） （折衷案：同題材同内容同程度・同題材同内容異程度）	108
12	体育科（折衷案：同単元同内容異程度・異単元）	114
13	体育科（同単元同内容同程度）	117
14	道徳の時間（同主題同内容同程度）	120
15	外国語活動（折衷案：同単元同内容異程度・同単元同内容同程度）	126
16	総合的な学習の時間（折衷案：同単元異内容同程度・同単元同内容同程度）	132
17	特別活動（同内容同程度）	137

◇	参考文献・引用文献等	142
---	------------	-----

第 1 章 複式学級とは

1 複式学級とは

児童又は生徒の数が著しく少ない場合、複数学年の児童又は生徒が 1 学級に編制されます。このような学級を複式学級と言います。

複式学級の法的根拠としては、公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律(昭和 33 年 5 月 1 日法律第 116 号) 第 3 条 (学級編制の標準) の中に、

第三条 公立の義務教育諸学校の学級は、同学年の児童又は生徒で編制するものとする。ただし、当該義務教育諸学校の児童又は生徒の数が著しく少いかその他特別な事情がある場合においては、政令で定めるところにより、数学年の児童又は生徒を 1 学級に編制することができる。

と書かれています。

また、同法律第 3 条 2 項では、都道府県ごとの、公立小学校又は中学校の 1 学級の児童又は生徒数の基準は、次の表に揚げた数を基準として、都道府県の教育委員会が定めるとされています。

表 1 学級編制の区分と 1 学級の児童又は生徒数

学校の種類	学級編制の区分	1 学級の児童又は生徒の数
小学校	同学年の児童で編制する学級	40 人 (第 1 学年の児童で編制する学級にあつては、35 人)
	二の学年の児童で編制する学級	16 人 (第 1 学年の児童を含む学級にあつては、8 人)
中学校	同学年の生徒で編制する学級	40 人
	二の学年の生徒で編制する学級	8 人

島根県教育委員会では、この基準を受け独自に学級編制基準を定めています。このことにより、中学校においては、特別支援学級を除き、8 人以下であってもすべて「単式学級」として編制され、現在中学校においては、複式学級は存在していません。小学校における複式学級は、すべて 1・2 年、3・4 年、5・6 年の組み合わせで編制されています。一方、他都道府県では、小学校の 2・3 年、4・5 年の組み合わせ (変則複式) の複式学級が存在している場合があるというのが現状です。

2 複式学級の特性

複式学級の特性を知ることが、とても大切なことです。複式学級には次のような特性があります。

- 2 つの学年の児童によって編制されている学級である。
- 学年の枠を超えた社会を形成している学級である。
- 学年の組み合わせにより、学級の構成人数が毎年変わる学級である。
- 少人数学級である。
- へき地にあることが多い。
- 学年・性別の割合がアンバランスになりがちな学級である。

○兄弟姉妹や、親類関係の児童が含まれることが多い学級（学校）である。

(1) 複式学級のよさ

- ・異年齢同士の協力的な態度を養いやすい。
- ・一人一人の存在感や役割をもたせやすく、リーダー性を育てやすい。
- ・自分たちで学習を進めていく場面が多く、自主的、協力的な学習態度を育てやすい。
- ・一人一人の児童によく目が行き届き、丁寧に指導することができる。指導の記録も丁寧にしやすい。
- ・児童同士や、児童と教師の関わりが濃く、温かい雰囲気が醸成されやすい。

(2) 複式学級指導上の課題

- ・当該学年の発達段階にそぐわない内容を学習する場合がある。
- ・直接指導を行う時間が短い。
- ・下学年児童の依頼心が強くなりやすく、学級になじむまでは配慮を必要とする。
- ・等質的な行動や同調的な発言が多くなりがちで、多面的、発展的な考え方を育てにくい。
- ・実験や作業など、一人あたりの負担が大きくなりやすい。

この他にも、複式学級を有する小学校は、教職員集団も小規模となるため、学校においては、校長、教頭のリーダーシップが発揮しやすい、教員が個性を発揮しやすい、共通理解が図りやすい、といった長所があります。一方、会議や研修等の出張に出かけにくい、一人で多くの校務分掌を担当するため多忙になる、といった課題もあわせもっています。

このような複式学級の特性、複式学級を有する学校の特性を理解したうえで、複式学級で育つ児童のために、より豊かで充実した教育が積み上げられるよう工夫し、教育課程を編成する必要があります。

第2章 複式学級指導の現状と課題

1 島根県のへき地指定校と複式学級を有する学校

(1) 本県におけるへき地指定の小学校及び中学校

島根県内には、平成27年度4月1日現在、小学校57校、中学校30校、合計87校の国指定のへき地指定校があります。(図1)

近年は、少子化による児童数減により小学校の統廃合が進んだり、社会資本の整備が行われたりして地域の開発が進み、国指定のへき地校は減少傾向にあります。(表2)

図1 平成27年度 国指定へき地小・中学校一覧

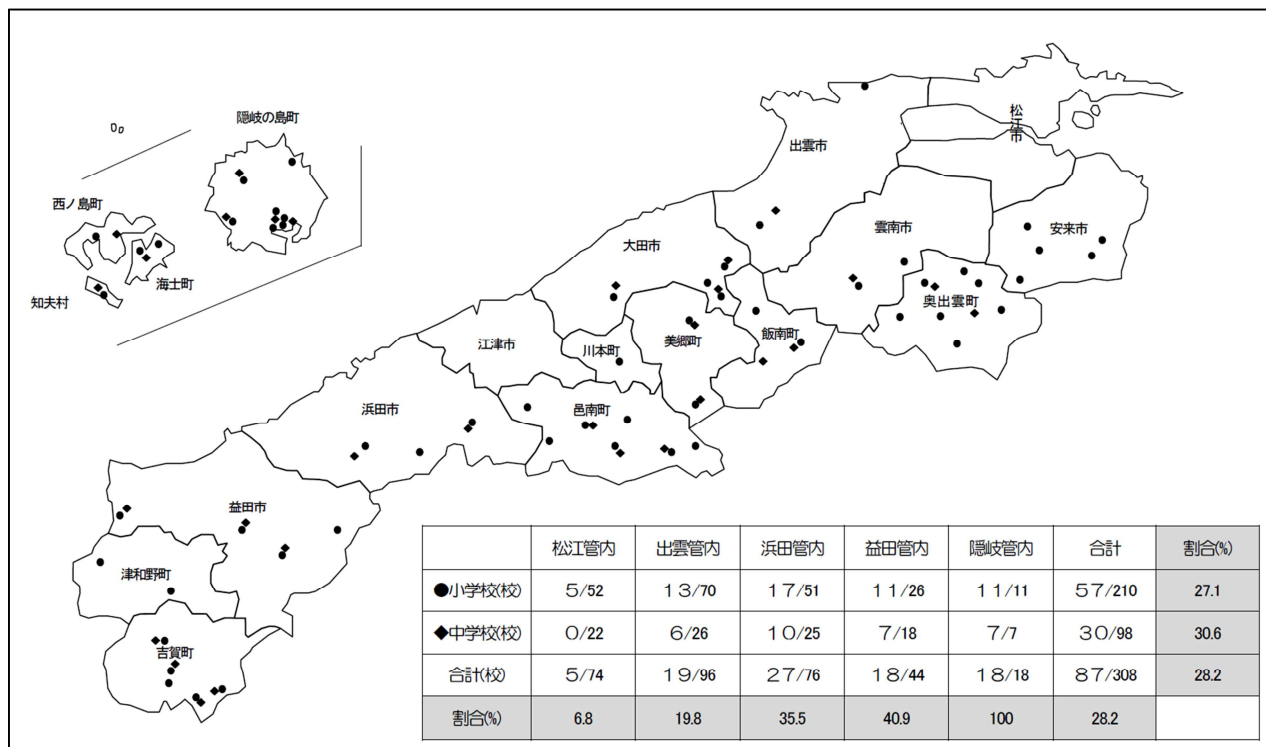


表2 教育事務所別・国指定へき地小・中学校数一覧(参照:島根の教育)

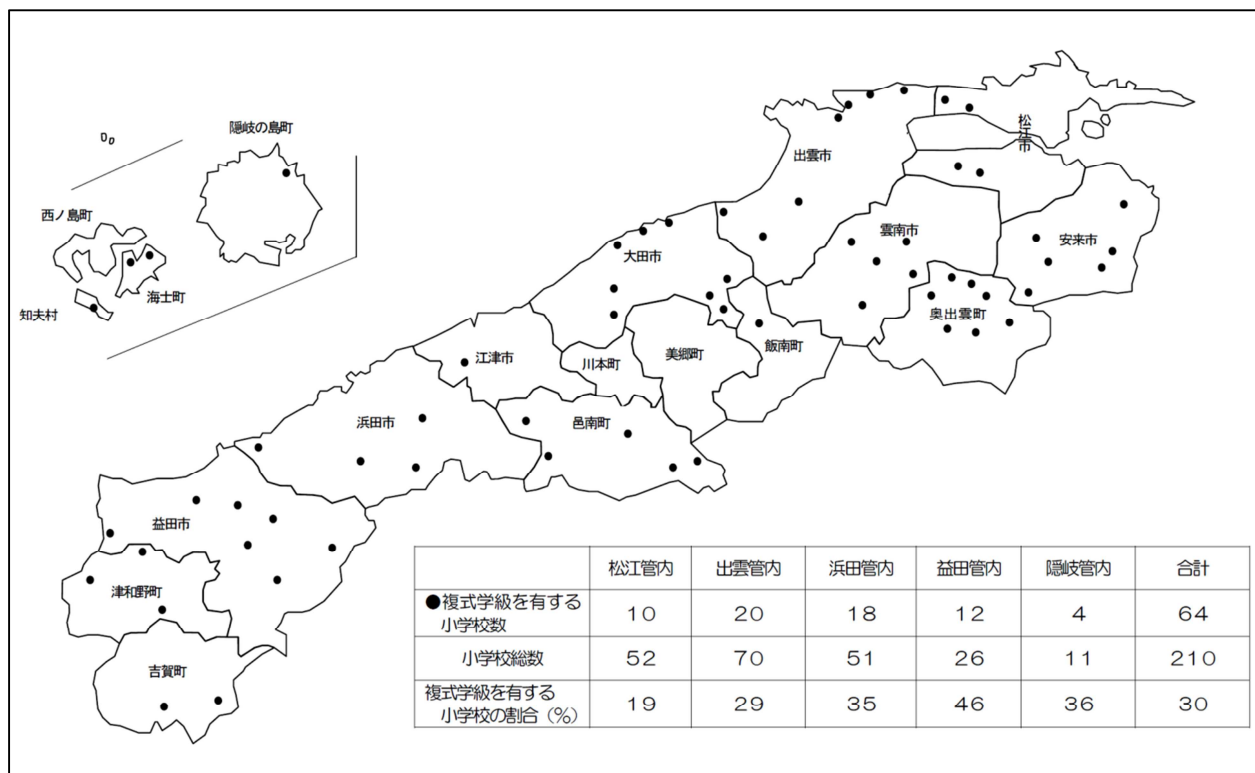
	平成10年度	平成15年度	平成20年度	平成25年度	平成27年度
松江管内	31	17	6	5	5
出雲管内	34	33	28	22	19
浜田管内	34	44	34	28	27
益田管内	30	26	23	19	18
隠岐管内	28	28	26	18	18
国指定へき地 小・中学校合計	157	148	117	92	87
市町村立 小・中学校総数	412	394	356	320	308

(2) 本県における複式学級を有する小学校

平成 27 年度、島根県内には、64 校の複式学級を有する小学校があります。(図 2) そのうち、国指定のへき地校が占める割合は約 6 割で、38 校となっています。国指定のへき地校であっても、統廃合により複式学級が解消され、単式学級となった学校もあります。

島根県の複式学級を有する小学校の多くは、図 2 に示すとおり、中山間地や海辺に位置し、県内各地に分散しています。

図 2 平成 27 年度複式学級を有する小学校一覧



所管する教育事務所別にみると、出雲教育事務所管内、浜田教育事務所管内が 20 校と多く、隠岐教育事務所管内が一番少なく 4 校となっています。また、益田教育事務所管内では小学校数 26 校中ほぼ半数の 12 校が複式学級を有しており、割合では一番高くなっています。

表 3 は、本県の複式学級を有する学校数と複式学級に通う児童数の推移をまとめたものです。昭和 40 年度から平成 15 年度の間は、90 校から 100 校の間で、複式学校が安定して存在していたのがわかります。一方、ここ 10 年間で、児童数の減少等により統廃合が進められ、30 校近く減少しています。

昭和 50 年度の複式学級数が特に多かったのは、昭和 49 年度に改正標準法が施行され、それまで複式学級の編制基準が「2 学年複式 22 人、3 学年複式 15 人」であったのが、「3 学年複式」が解消され、「2 学年複式を 21 人、第 1 学年の児童を含む学級は 17 人」と変更されたためだと考えられます。この後、昭和 50 年代から平成元年頃までは、「2 学年複式 20 人、第 1 学年の児童を含む学級は 12 人」の基準で複式学級が編成され、平成 8 年には現在の「2 学年複式 16 人、第 1 学年の児童を含む学級は 8 人」という基準となりました。中学校の特別支援学級を除く複式学級については、平成 13 年度から解消されています。

表3 島根県の複式学級を有する小学校数と複式学級に通う児童数の変遷（参照：文部科学省学校基本調査）

	市町村立小学校 学校数（含分校）	複式学級を有す る小学校数	市町村立小学校 児童数	複式学級児童数
平成 25 年度	2 2 0	6 8	3 6, 2 2 7	1, 1 9 5
平成 20 年度	2 5 2	7 9	3 9, 1 7 9	1, 4 2 5
平成 15 年度	2 8 5	1 0 1	4 2, 5 4 8	1, 8 1 1
平成 10 年度	2 9 7	9 9	4 8, 4 5 9	1, 8 4 8
平成 5 年度	3 0 3	9 1	5 5, 9 6 8	1, 9 0 8
平成元年度	3 0 6	9 5	6 1, 3 9 2	2, 2 8 2
昭和 60 年度	3 1 4	9 1	6 8, 9 7 5	2, 0 8 5
昭和 55 年度	3 1 8	1 0 0	6 8, 7 0 5	2, 1 5 2
昭和 50 年度	3 3 3	1 4 5	6 4, 7 1 3	2, 5 7 8
昭和 45 年度	3 6 9	1 1 5	7 3, 4 9 0	3, 0 8 4
昭和 40 年度	4 2 1	1 0 9	9 0, 0 1 9	3, 7 3 8

(3) 全国の複式学級を有する小学校

表4は、平成27年度文部科学省学校基本調査のデータをもとに、全国の都道府県の編制方式別複式学級をまとめたものです。まず、学級数が多い都道府県を見ると、北海道が目立って多く703学級あり、鹿児島県の518学級、福島県の209学級、岩手県の207学級と続きます。少ない都道府県は、神奈川県4学級、東京都と鳥取県の9学級、滋賀県と香川県の11学級となっています。中国5県では、鳥取県が9学級と少ないのですが、島根県を含めた他の4県には、約120～200学級の複式学級が存在しています。また全国を見ると、いくつかの県では、1つの学級で3～6個学年の児童が学ぶ複式学級もわずかですがあります。都道府県の地理的条件や歴史的条件等の違いにより、複式学級をとりまく環境がそれぞれ異なっていることがわかります。

表4 平成27年度全国都道府県編制方式別複式学級数（参照：文部科学省学校基本調査）

都道府県	複 式 学 級					
	計	2個学年	3個学年	4個学年	5個学年	6個学年
北海道	739	739	—	—	—	—
青 海 道	145	145	—	—	—	—
岩 手 県	211	211	—	—	—	—
宮 城 県	73	73	—	—	—	—
秋 田 県	44	44	—	—	—	—
山 形 県	106	106	—	—	—	—
福 島 県	215	215	—	—	—	—
茨 城 県	50	50	—	—	—	—
栃 木 県	82	82	—	—	—	—
群 馬 県	37	37	—	—	—	—
埼 玉 県	26	26	—	—	—	—
千 葉 県	32	32	—	—	—	—
東 京 都	8	8	—	—	—	—
神 奈 川 県	3	3	—	—	—	—
新 潟 県	135	135	—	—	—	—
富 山 県	25	25	—	—	—	—
石 川 県	76	76	—	—	—	—
福 井 県	75	75	—	—	—	—
山 梨 県	39	39	—	—	—	—
長 野 県	16	16	—	—	—	—
岐 阜 県	63	63	—	—	—	—
静 岡 県	91	91	—	—	—	—
愛 知 県	45	45	—	—	—	—
三 重 県	101	101	—	—	—	—

都道府県	複 式 学 級					
	計	2個学年	3個学年	4個学年	5個学年	6個学年
滋 賀 県	17	17	—	—	—	—
京 都 府	36	36	—	—	—	—
大 阪 府	27	27	—	—	—	—
兵 庫 県	79	79	—	—	—	—
奈 良 県	15	15	—	—	—	—
和 歌 山 県	135	135	—	—	—	—
鳥 取 県	15	15	—	—	—	—
島 根 県	133	133	—	—	—	—
岡 山 県	129	129	—	—	—	—
広 島 県	135	135	—	—	—	—
山 口 県	182	182	—	—	—	—
徳 島 県	58	58	—	—	—	—
香 川 県	13	13	—	—	—	—
愛 媛 県	131	131	—	—	—	—
高 知 県	123	123	—	—	—	—
福 岡 県	72	72	—	—	—	—
佐 賀 県	33	33	—	—	—	—
長 崎 県	203	203	—	—	—	—
熊 本 県	94	94	—	—	—	—
大 分 県	134	134	—	—	—	—
宮 崎 県	130	130	—	—	—	—
鹿 児 島 県	524	524	—	—	—	—
沖 縄 県	135	135	—	—	—	—

2 複式学級の学習指導の現状と課題

複式学級が抱える一般的な課題は、第1章で述べた複式学級の特性を受け、そのよさを生かし、対応を工夫しながら、どう効果的に児童に力をつけていくかということです。このことについては、これまで様々な場で話題として取り上げられてきましたし、今後も研究を進めていく必要があります。

本手引きでは、複式学級の学習指導を中心に記述します。

島根県教育委員会では、平成25年6月に、平成25年度に複式学級を有する小学校と、平成26年度、平成27年度に複式学級を有する予定の小学校を対象に、複式学級における指導上の課題について調査を行いました。その中で、2つの学年を同時にもつ場合の指導上の課題として、次のような意見が多くあげられました。

○下学年児童への指導が困難である。

○児童の発達の段階や学習内容の系統性を踏まえた指導が行いにくい。

○転校生がいた場合の対応が困難である。

○単式になったり、複式になったりする学校においては、教育課程の編成が複雑になる。

○算数科の授業における「わたり」の指導が難しい。

これらの多くは「同単元同内容同程度」、いわゆる「A・B年度方式」により教育課程を編成していることにより生じる課題です。

「A・B年度方式」というのは、低・中・高、それぞれ2学年分の内容を、2年間に配当し目標を達成する方法です。つまり、3年生が4年生の教科書の内容を、4年生が3年生の教科書の内容を学習することもあります。ここで確認しておきたいことは、教科書が学年別に作成されているため、各教科・学年ごとの指導内容が決まっているように見えますが、学習指導要領に学年ごとの内容が示されているのは、算数、理科、社会の高学年のみで、他教科等については、低学年、中学年、高学年のまとまりで目標と内容が示されているということです。

(1) 「同単元同内容同程度（A・B年度方式）」と「異単元（学年別指導）」

「A・B年度方式」についての課題が多くあがるのは、県内の複式学級を有する小学校において、最も多くこの方式が採用されていることが理由だと考えられます。現在、県内のほとんどの複式学級で、算数科以外の教科等は「A・B年度方式」により教育課程が編成されています。これは、県独自の加配措置により、早くから低・中・高の完全複式で学級が長期にわたり安定的に編成されてきたこと、また、島根大学教育学部附属小学校の複式学級において先進的に「A・B年度方式」について授業研究されていたことも大きく影響しています。しかしこの「A・B年度方式」は、2・3年、4・5年等の変則複式が存在する学校においては実施が困難な方式です。

一方、算数科の「異単元（学年別指導）」の「わたり」による授業に困難さを感じている学校も多くあります。学校によっては、算数の時間だけは複式を解消し、2人の教員が単式学級と同様に指導していると回答した学校もありました。「わたり」だと2つの学年を1人の教員で指導するので、単純に計算すれば、教師がついて指導する時間が単式学級の半分となるように感じられる点が課題の一つと言えるかもしれません。また、同時に2つの学年を指導することによる教師の負担増加や、これまで単式学級での指導の経験しかないという教師の複式学級指導に係る指導力も課題となっているようです。

島根県では算数科以外は「A・B年度方式」で指導している学校がほとんどですが、複式学級の指導には様々な指導形態があります。他県では、「同教科異単元」とどまらず、「異教科」の組み合わせで

時間割を作成しているという学校もあります。それぞれの長所と短所を教師が理解し、学校をとりまく地域環境や目の前にいる児童の実態と照らし合わせ、もっとも成果をあげることのできる教育課程を編成する必要があります。

本手引きでは、第5章で複式学級の指導計画の類型とそれぞれの長所と短所を、第7章で「わたり」や「ずらし」といった学習指導の留意点等をあげています。

(2) 児童数の減少と複式学級を有する学校数の減少

p. 5の表3からもわかる通り、ここ10年で、島根県の複式学級児童数や複式学級を有する小学校数は大きく減少しています。単式学級から複式学級になったり、複式学級の人数が減り欠学年を生じ単式学級になったりする学校も多く、これらの学校では、これまで島根県ではあまり研究されてこなかった「異単元（学年別指導）」等による指導が必要になることも考えられます。島根県の複式学級は、安定的に複式学級が存在していた時期にはなかった新たな課題に直面しています。

この課題を解決するための1つの手掛かりとなるよう、本手引きの第12章では、各教科の「異単元（学年別指導）」や「同単元異内容」等の年間指導計画作成の留意点や年間指導計画例を示しています。これらを参考に、各校の実態に合った年間指導計画を作成してください。

表5 平成27年度国指定へき地校・複式学級を有する学校一覧

教育事務所	教育委員会	国指定へき地学校	複式学級を有する学校		
松江	松江市		大野小	4	
			秋鹿小		
			大谷小		
			来待小大野原分校		
	安来市		宇賀荘小	6	
			比田小		
			山佐小		
			布部小		
			井尻小		
			井尻小		
		赤屋小			
出雲	出雲市		乙立小	7	
			鰐淵小		
			北浜小		
			塩津小		
			塩津小		
			佐香小		
			窪田小		
		田儀小			
		佐田中			
	雲南市		西日登小	5	
			飯石小		
			鍋山小		
			吉田小		
			吉田小		
		田井小			
		吉田中			
	奥出雲町		布勢小	7	
			高尾小		
			亀嵩小		
			亀嵩小		
		高田小			
		三沢小			
		三沢小			
		鳥上小			
		鳥上小			
		八川小			
飯南町		志々小	1		
		志々小			
		頼原中			
		赤来中			
浜田	浜田市		今福小	4	
			波佐小		
			波佐小		
			今市小		
			弥栄小		
			弥栄小		
	大田市		岡見小	8	
			五十猛小		
			静間小		
			鳥井小		
			北三瓶小		
			志学小		
			志学小		
	池田小		池田小	7	
			池田小		
			大森小		
			高山小		
			高山小		
	江津市		跡市小	1	
			川本小	0	
		美郷町			0
邑南町		口羽小	5		
		阿須那小			
		高原小			
		瑞穂小			
		市木小			
		市木小			
		矢上小			
		日貫小			
		日貫小			
益田	益田市		真砂小	7	
			豊川小		
			桂平小		
			桂平小		
			東仙道小		
			都茂小		
			匹見小		
		道川小			
	津和野町		木部小	2	
			青原小		
		青原小			
		左鍔小			
吉賀町		柿木小	9		
		七日市小			
		朝倉小			
		朝倉小			
		六日市小			
		蔵木小			
		蔵木小			
		柿木中			
		吉賀中			
隠岐	海士町		福井小	2	
			海士小		
			海士小		
	西ノ島町		西ノ島小	0	
			西ノ島中		
	知夫村		知夫小	1	
			知夫中		
	隠岐の島町		西郷小	11	
			中条小		
			有木小		
		磯小			
		磯小			
		北小			
		北小			
		北小			
		北小			
		北小			
合計	小学校	57	64		
	中学校	30	0		
	合計	87	64		

※複式学級を有する小学校の内、国指定へき地小学校38校。
26校は県へき研に所属しない学校。

第3章 これからの学習指導と複式学級指導

学級編制が複式であるか単式であるかに関わらず、子どもたちに付けさせたい力は同じです。

1 学習指導要領の改訂より

平成19年の学校教育法の改正及び平成20年に告示された学習指導要領により、学力の3要素が示されました。これからの学習指導においては、

- 基礎的・基本的な知識及び技能を習得させる。
- 課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力を育む。
- 主体的に学習に取り組む態度を養う。

ことが求められます。

また、教育内容に関する主な改善事項として、言語活動の充実、理数教育の充実、伝統や文化に関する教育の充実、道徳教育の充実、体験活動の充実、小学校段階における外国語活動の導入、社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項への取組の充実等があげられています。

2 アクティブ・ラーニングの視点からの授業の充実

平成26年11月に示された文部科学大臣から中央教育審議会への諮問文の冒頭では、生産年齢人口(15歳以上64歳未満)の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により大きく変化する社会で活躍するためには、子どもたちが厳しい挑戦の時代を乗り越え、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み未来を切り開いていく力が必要だと述べられています。そして、このような力をつけていくためには、教育の在り方も一層進化させる必要があり、特に学ぶことと社会のつながりを意識し、「何を教えるか」という知識の質・量の改善に加え、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であると続きます。

「どのように学ぶか」ということについては、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があり、こうした学習や指導方法は、知識・技能を定着させるうえでも、また子どもたちの学習意欲を高めるうえでも効果的であることが、これまでの実践の成果から指摘されています。つまり、教師が一方的に説明するだけの授業ではなく、児童が主体となって説明したり発表したりして議論する授業づくりをしていく必要があります。

3 学力調査の分析結果より

近年の全国学力・学習状況調査(以下「全国調査」という。)の分析結果によると、島根県の児童の学力の特徴としては、

- 全国に比べて正答率が低く、基礎問題、活用問題の双方に課題がある。
- 学力分布の上位層が少ない状況がある。

といった点があげられています。平成27年度全国調査の質問紙調査では、地域の人材や施設の活用について肯定的回答の数値が高いことや、前年度調査での課題であった授業における「目標(めあて・ねらい)の提示」や「振り返り」について改善がみられた一方、算数への関心等をたずねる項目で、「算数の勉強は好きだ」「算数の授業の内容はよく分かる」と回答した児童の割合が低いことが、特に課題として

挙げられました。

平成 25 年度の全国調査では、教科に関する調査と質問紙調査のクロス集計等により、学校の指導状況と学力の関係などを詳細に分析しています。その結果によると、以下の活動や指導を積極的に行った児童や学校ほど、平均正答率が高い傾向が見られることがわかっています。

- 授業の冒頭で目標（めあて・ねらい）を示す活動
- 授業の最後に学習したことを振り返る活動
- 学級やグループで話し合う活動
- 総合的な学習の時間における探究活動
（自分で課題を立てて、調べたことを発表するなどの活動）
- 考えを発表する機会を与える指導
- 調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書かせる指導
- 資料を使って発表する指導
- 国語の指導として書く習慣や読む習慣をつける指導
- 学習方法（テストの間違いを振り返って学習するなど）に関する指導
- 家庭学習に関する指導（調べたり文章を書いたりする宿題を出すなど）

これらの結果から、単式学級、複式学級にかかわらず、授業づくりや学習指導のあり方を、改めて再検討する必要に迫られていると言えます。

4 複式学級の特徴を生かす

複式学級においては、授業において学年別に授業することがあります。2つの授業を1人の教員が担当するわけですから、必然的に、単式学級以上に児童だけで学習を進めなければならない状況が生まれます。これは短所のようなのですが、児童の主体的な学びの場面として生かせば長所となります。

複式学級指導にあたって、教師は、児童が自分たちで学習が展開できるよう、事前に本時の目標を明確にし、直接指導しなくとも児童が学習できるような展開を考え、それを児童によく理解させたり、慣れさせたりするとともに、学習をリードするガイドを育成していくなどの方法上の工夫をしていく必要があります。このことにより、教師が一方的に教えるのではなく、児童自らが進行し、考えを発表し、話し合う、児童が主体的に学ぶ授業となります。また、間接指導の時間を通してどのようなことを児童が考えたのか捉えられるように、ノートに振り返りを書いてまとめる活動を行うことで、その振り返りをもとに次時を展開することができます。

このような複式学級の指導は、教育基本法や学校教育法、学習指導要領等が求めている主体的に学習に取り組む態度を養い、学力向上につながる可能性に満ちた指導であると言えます。複式学級のよさを生かすためにも、教師は、単式学級と同じ指導法を複式学級に持ち込むのではなく、指導観を見直し、児童の実態に適した複式学級にふさわしい指導を実践する必要があります。

第4章 複式学級を有する小学校の教育課程

1 教育課程の編成

教育課程を編成するとき、まず法令で定められている学校教育の目的や目標に基づき、児童や地域、学校の実態を踏まえて教育目標を設定します。次にそれらの目標を達成するために、各教科等について、授業時数との関連において総合的に組織した教育計画を作成します。

教育課程は、全教職員の協力のもと、校長の責任において編成します。(第10章参照) ※以下章のみ記載

2 へき地・小規模学校における教育課程編成上の留意点

複式学級は、へき地に位置することが多く、また小規模であるという特性をもっています。へき地・小規模学校における教育課程編成については、次の点に留意する必要があります。

○へき地・小規模校の特性を生かす教育課程の編成を工夫します。少人数のよさに目を向け、児童一人一人のよさや可能性を把握し、個に応じた指導を可能な限り実施します。また、恵まれた自然環境や伝統的行事・文化等、地域の資源を生かし、特色ある教育活動を展開します。さらに、地域における開かれた学校をめざし、地域連携の在り方を検討し、地域の教育力を生かします。

○1日の生活時程や週当たりの授業時間表を作成する場合には、児童の通学距離や交通条件あるいは季節等に十分配慮します。(第6章)

○現状より、多人数での活動がより効果的であると判断される場合には、合同での学習を工夫します。
【合同学習】(第5章)

○近隣の小学校や中学校との交流や地域との交流を積極的に行います。【集合学習】【交流学习】(第5章)

○コンピュータ等の情報機器の活用を工夫し、情報の活用、発信を通して児童の視野を広げるとともに他校との交流を図り、幅広い見方・考え方を身に付けさせ、多くの人々とのかかわりを通して自主性や積極性を育みます。

3 複式学級における教育課程編成上の留意点

複式学級では、2つの学年の児童で1つの学級が編制されている関係上、異なる学年が、同じ内容によって同時に学習するなど、単式学級とは異なった学習形態や指導方法で学習する場合があります。

そのため、学習指導要領に示されている各教科の学年別の目標、内容や学年別に編集された教科書の内容の順序によりがたいことが生じます。そこで、学習指導要領総則「内容の取扱いに関する共通的事項の5」において、

学校において2以上の学年の児童で編制する学級について特に必要がある場合には、各教科、道徳、外国語活動及び特別活動の目標の達成に支障のない範囲内で、各教科、道徳、外国語活動及び特別活動の目標及び内容について、学年別の順序によらないことができる。

と規定し、特例として認めています。

教科等によっては、学年別の順序によらない同単元同内容同程度（A・B年度方式）等の指導計画を

作成して指導する場合がありますが、その法的な根拠は、この学習指導要領総則「内容の取扱いに関する共通的事項の5」にあります。

ただし、学年別の順序によらないことが認められているのは、「2以上の学年の児童で編制する学級について特に必要がある場合」のみであり、単式学級においては、学年別の順序による必要があります。

複式学級の教育課程編成については、この特例の趣旨を踏まえ、次の点に留意する必要があります。

○複式学級においても、「特に必要のある場合には」、「目標の達成に支障のない範囲内で」という趣旨に留意する必要があります。学年ごとに目標や内容が示されているのは、順序性や系統性に配慮されているからです。例えば、理科の「電気の通り道」（3年）と「電気の働き」（4年）、「物の溶けかた」（5年）と「水溶液の性質」（6年）など、学習に順序性や系統性がある内容については、学習の順序が逆にならないようにしなければなりません。

○複式学級における教育課程の編成の特例の趣旨を踏まえ、各教科等の複式学級の年間指導計画を作成します。（第11章、第12章）

- ・学校教育法施行規則第51条の別表第1で示されているとおり、各学年において標準授業時間数が異なっていることに配慮すると同時に、第1学年と第2学年、第3学年と第4学年においては、学年の年間総授業時数が異なってくることに留意して年間指導計画を作成します。（第6章）

○教科の特性や児童の実態に応じて指導形態や指導方法を工夫します。（第5章）

- ・教科や児童の状況に応じ、弾力的に考えます。
- ・間接指導の時間に十分学習効果をあげるために、児童が主体的に学習する力を高めます。

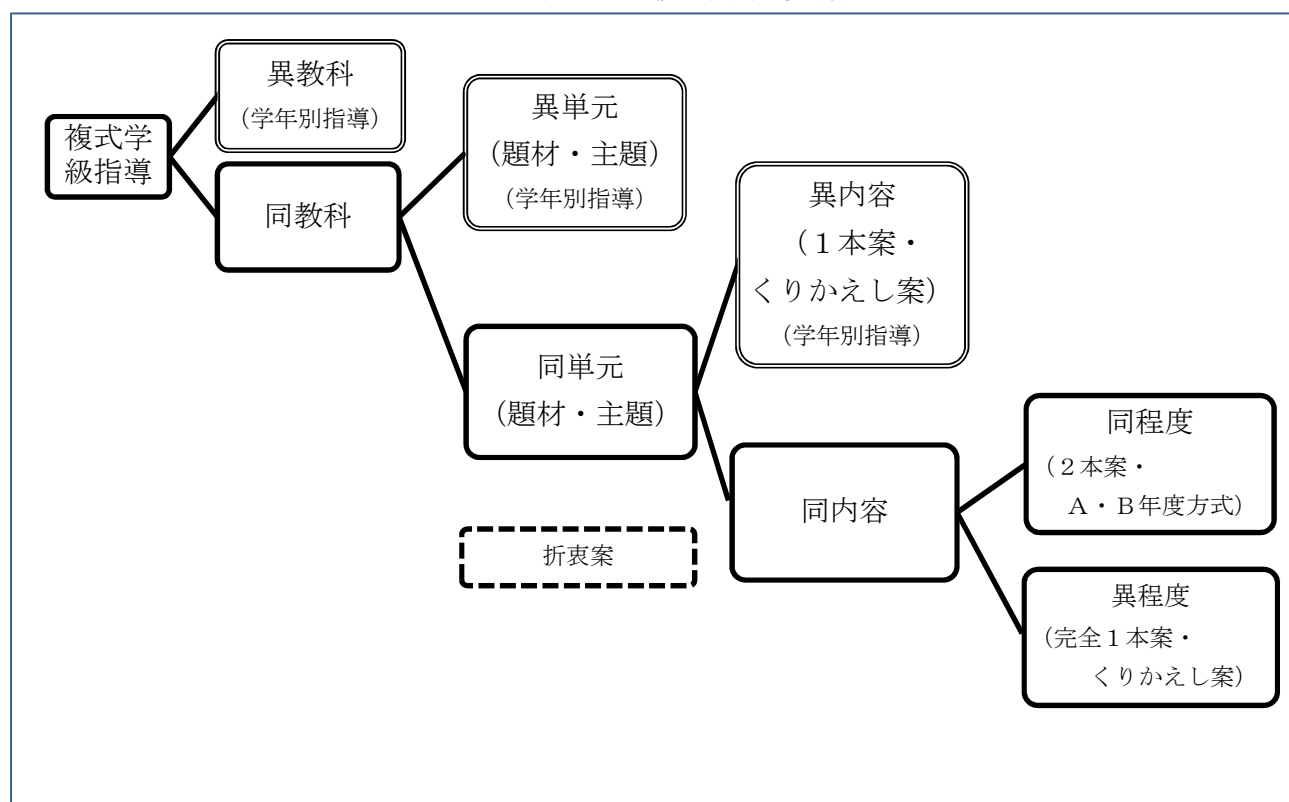
第5章 複式学級の指導計画

1 指導の類型

本手引きでは、複式学級の指導の類型を、「教科」、「単元（題材）」、「内容」、「程度」の4つの観点から、大きく6つに分けて説明します（図3）。単元（題材）、内容、程度、教材などの言葉の使い方については都道府県ごとに、微妙な差異があるように思われます。また、教科によっても異なります。国語や算数等という「単元」と、音楽や図工、家庭科という「題材」には微妙な差異があります。さらに、同じ「単元」という言葉の表すものも、国語と算数では異なります。「内容」については、学習指導要領解説に教科等の内容を整理するために示されている「内容」と、本手引きで指導類型の名称として使用する場合の「内容」では、意味が異なります。指導類型の名称にある「内容」については、上学年と下学年が取り組む活動内容という意味での「内容」とし、単式学級と同様に上学年と下学年が全く同じ教材で同じ活動をする場合を「同内容」、上学年と下学年が異なる教材で、または同じ教材でも異なる活動をする場合を「異内容」として整理するものです。「単元」や「題材」、「主題」という言葉がそれぞれその教科で何を指し示すのかについては、第11章の各教科の具体例を参考にしてください。

まず、2つの学年それぞれが「異教科」で学ぶのか「同教科」で学ぶのかに分けられます。「異教科」は学年別指導を示すことになります。「同教科」指導は、さらに「異単元（題材）」と「同単元（題材）」に分けられ、「同教科異単元（題材）」の場合も「異教科」と同様に学年別指導を指します。また、「同単元（題材）」指導は、さらに「異内容」と「同内容」の2つに分けられます。そして、「同内容」はさらに「同程度」と「異程度」に分けられます。

図3 本手引きの複式学級指導の類型



「同単元（題材）」指導は、2つの学年を上下学年一緒に同じ単元で指導します。

「同単元（題材）」指導は、さらに「異内容」と「同内容」に分けられますが、「異内容」は、可能な

限り共通指導場面を設定し指導する類型で、「1 本案」と言われることがあります。

「同単元（題材）同内容同程度」指導は、形態だけから見ると、単式学級の授業と同じです。2 学年の内容を A 年度と B 年度の 2 年間に平均的に配分し、いずれの年度においても両学年に同時に同じ内容を同じ目標のもとに同程度に指導することから、A・B 年度方式と言われます。また、2 年分の年間指導計画を A 年度案、B 年度案とし、2 案あることから、2 本案と言われることもあります。

「同単元（題材）同内容異程度」指導は、2 学年分の学習指導要領に示された内容を圧縮して 1 年間で学習できるよう単元を構成し、異程度で 2 年間くりかえして指導することから、「くりかえし案」と言われます。また、「完全 1 本案」と言われることもあります。

本県では、「同単元（題材）同内容同程度」のみを A・B 年度方式として整理します。単元（題材）配列上は一見、A 年度と B 年度をくりかえすように見える指導類型でも、異程度により評価規準が異なる場合は、「A・B 年度方式」ではなく「くりかえし案」として整理する必要があります。

また、これらの類型をいくつかを組み合わせる場合もあり、「折衷案」と言われます。

このタイプの呼称については、必ずしも全国的に統一されているわけではありません。また、道徳や特別活動（学級活動）のように「単元」という見方のない教科等もあります。あくまで、説明のための類型であって、実際には、それぞれ様々な工夫が加えられ、アレンジされて実践されている点に注意する必要があります。

この手引きで示す類型は、昭和 61 年度改訂版として発行された「複式学級の指導」（島根県教育委員会）をもとに整理しています。

前回発行された昭和 61 年以後、平成元年の改訂で生活科が、平成 10 年の改訂で総合的な学習の時間が、平成 20 年の改定で外国語活動が新たに教科等として加わっています。特に総合的な学習の時間においては、目標が全学年（第 3 学年～第 6 学年）共通で示されており内容は示されていません。そのため、県内の多くの学校が「同単元同内容同程度」又は「同単元同内容異程度」の指導類型をとっています。場合によっては、「異単元」として上学年と下学年が異なる単元及び内容で学習し、学年別に指導しながらも評価規準を同じにするという「異単元異内容同程度」をとることも可能ですが、一般的でないため、図 3 には記載していません。「同単元異内容同程度」の場合も同様です。

以上の類型に指導の具体例をあてはめると、次の表 6 のようになります。

表6 複式学級の指導類型と具体例

類 型				その他の言い方	例	
					上 学 年	下 学 年
異 教 科				学年別指導	◆国語	◆算数
同教科	異単元 (題材)	異内容	異程度		◆算数	◆算数
	同単元 (題材)	同内容	同程度		A・B年度方式 2 本案	◇「図形」
				異程度	完全1 本案 くりかえし案	◆理科
			◇「ものの溶け方」		◇「ものの溶け方」	
			◆音楽		◆音楽	
			◇「楽譜を読もう」		◇「楽譜を読もう」	
			★『一輪の赤い花』 (器楽)	★『一輪の赤い花』 (器楽)		
		☆イ短調の特徴を意識して、音楽の流れを感じ取りながら視奏する。	☆イ短調の視奏に慣れ親しむようにする。			
		異内容	異程度	1 本案 くりかえし案	◆算数	◆算数
				◇「わり算」	◇「わり算」	
	★『筆算』			★『2 位数÷ 1 位数』		

◆教科 ◇単元（題材）★内容 ☆程度

なお、本章においては、以後、「単元（題材）」を「単元」として表記します。

2 島根県の類型別の実施状況

本県の学校で作成されている年間指導計画にはどのような種類のものが多いか、島根県教育庁義務教育課（現教育指導課）が平成25年6月に、県内の複式学級を有する学校を対象に実施した「小学校複式学級における教育課程の調査」の結果によると、その実態は、次のとおりです。（※総合的な学習の時間については、今回調査は行っていない。）

表7 平成25年の1・2年複式学級の実施状況（複式学級総数22学級） 単位（％）

	国語	算数	社会	理科	生活	音楽	図画工作	体育	家庭	外国語活動	道徳	特活
同教科異単元異内容 （学年別指導）	18	100			0	0	0	0			0	0
同教科同単元同内容 （A・B年度方式）	41	0			91	91	91	86			91	91
その他	41	0			9	9	9	14			9	9

表8 平成25年の3・4年複式学級の実施状況（複式学級総数 62 学級） 単位（％）

	国語	算数	社会	理科	生活	音楽	図画工作	体育	家庭	外国語活動	道徳	特活
同教科異単元異内容 （学年別指導）	3	87	0	0		0	0	0			0	0
同教科同単元同内容 （A・B年度方式）	84	2	90	90		90	90	89			92	92
その他	13	11	10	10		10	10	11			8	8

表9 平成25年度の5・6年複式学級の実施状況（複式学級総数 58 学級） 単位（％）

	国語	算数	社会	理科	生活	音楽	図画工作	体育	家庭	外国語活動	道徳	特活
同教科異単元異内容 （学年別指導）	7	90	0	2		2	0	0	2	0	0	0
同教科同単元同内容 （A・B年度方式）	79	0	88	86		91	93	93	91	93	95	95
その他	14	10	12	12		7	7	7	7	7	5	5

表7～9にあるように、平成25年度においては、低・中・高学年ともに、ほとんどの学級において、算数は異単元（学年別指導）により行われており、その他の教科等は、同単元同内容同程度の（A・B年度方式）が主流です。また、低学年の国語においては、入門期であることから第1学年と第2学年がともに学ぶことが難しく、異単元（学年別指導）で指導している学校の割合が高くなっており、同単元同内容同程度（A・B年度方式）と同じ割合で行われています。その他を選択した学校のほとんどが、合併等により複式学級を解消することを見込んでA・B年度方式ではなく特別な指導計画で指導を行っています。

次に示すのは、昭和53年3月に、県内の複式学級を有する小学校を対象に実施した「複式学級の学習指導に関する調査」の結果です。（表10）

表10 昭和53年度の実施状況（複式学級総数約 200 学級） 単位（％）

	国語	算数	社会	理科	生活	音楽	図画工作	体育	家庭	外国語活動	道徳	特活
学年別指導	26	87	16	34		15	12	10	23		3	2
同教科異単元異内容 （学年別指導）	14	40	13	9		5	3	1	4		2	2
同教科同単元同内容 （学年別指導）	12	47	3	25		10	9	9	19		1	0
同教科同単元同内容 （A・B年度方式）	64	4	78	61		74	83	79	71		95	98
その他	10	9	6	5		11	5	11	6		2	0

この表からは、今から約40年前の昭和53年度においても、平成25年度と同様に、算数は学年別による指導が、その他の教科等についてはA・B年度方式が主流であるということがわかります。しかし、その割合は若干異なり、特に国語、理科において、約30%が、道徳と学級活動（特活）を除くその他の教科等についても10%～20%が学年別指導を行っています。また、学年別指導の中でも、現在行われることの少ない同単元異内容の指導が行われていたこともわかります。これは、文部科学省が昭和40年代

に発行していた複式学級用教科書の影響を少なからず受けていたことによると考えられます。なお、様々な類型を組み合わせた折衷案による指導も展開されており、国語、音楽、体育では約10%の学校が折衷案により指導していました。平成25年度の調査と質問の形式が異なるため、表ではその他の欄にまとめて計上しています。

3 島根県の複式学級指導の変遷と同単元同内容同程度（A・B年度方式）

明治5年から始まった小学校教育においては、児童が家から歩いて通える範囲に小学校が設置されたため少人数の学校もあり、しかも、教員の配置も不十分であったため全ての学年を1学級として1人の教員が指導にあたっている学校「単級学校」や、3個学年以上を1学級とする「複々式学級」も多く見られました。単級学校や複々式学級をもつ学校は、戦後になってもまだ多く存在しました。それが現在までに少しずつ形を変え、島根県では現在の小学校における低・中・高の複式学級へと落ち着いてきました。

複式学級における指導法も、戦前は「異教科」「異単元」による学年別の指導方法が主流だったものが、戦後の民主化の流れの中で、学級の成員が一緒に協同で学習することが尊重されたこともあって、まずは同単元異内容による研究が進みました。さらに昭和40年代には、安定的な低・中・高学年学級の編制が継続し、単元だけでなく内容も同じくして同単元同内容が主流となっていきました。文部省（現文部科学省）から出された「複式学級指導資料理科編」（平成6年12月）には、「同単元異内容」を中心に、「同単元同内容異程度」（くりかえし案）や同単元同内容同程度（A・B年度方式）の折衷案が紹介されており、他の教科でも、同単元学習が全国的に広がっていったことがうかがえます。

島根県内では第2章でもふれたように、県独自の加配により、複式学級は1・2年、3・4年、5・6年の複式により編制され、2・3年、4・5年といった変則複式学級が存在しません。このように、比較的安定的な複式学級編制がなされていたことと、平成19年度を最後に廃止となった島根大学教育学部附属小学校複式学級において、先進的に同単元同内容同程度（A・B年度方式）についての研究が進められていたことなどから、平成25年度の実施状況の表からもわかるように、算数を除く教科等においてほとんどの学級で同単元同内容同程度（A・B年度方式）により指導されるようになったと考えられます。

一方、他都道府県教育委員会へのアンケート結果からみた全国的な動向としては、国語、社会、算数、理科の4教科については、系統性の観点や学級編制の不安定さ、児童の転出入への対応などが背景にあって、複式学級においても異単元異内容（学年別指導）が主流となっています。

島根県では、複式学級を有する多くの小学校において、この約30年間、算数以外は同単元同内容同程度（A・B年度方式）による指導が行われてきました。これだけ浸透しているのは、良さがあるからに他なりません。しかし、長年見直されることなく採用されてきたことから、発達段階の異なる2学年の児童が在籍する複式学級であるにもかかわらず、2学年を一斉に同じように指導すればよいという安易な意識や、少人数でありながら個別への対応が充分ではないといった、学年差や能力差への配慮が弱まっているという現状を指摘する声もあります。

近年、複式学級に通う児童をとりまく環境も、学力観も大きく変容しています。今一度、目の前の児童や地域の実態を見つめ、この手引きで紹介する類型の長所や短所、留意点をふまえたうえで、年間指導計画を見直し、児童の成長につながる教育課程を編成することが求められます。

4 指導類型ごとの長所・短所と留意点

(1) 異教科（学年別指導）

① 異教科指導の長所と短所

異教科指導とは、例えば一方の学年が算数を、もう一方の学年が国語を学習するといった、異教科の組合せで行う方式です。

全国的に、変則複式学級のある学校や、単複をくりかえす傾向のある学校、欠学年がある学校、児童の転出入が多い学校において行われることが多い方式です。戦前に多く見られた指導方式でもあります。

長所は、当該学年の目標及び標準授業時数で、当該学年の教科書を用いて指導することができることなどです。複式学級の特例として、2年間の合計時数が、2学年の標準授業時数の合計を下回らなければよいことになっています。学校教育法施行規則第51条で定められた授業時数は、次の表のとおりとなっており、第1学年と第2学年で60時間、第3学年と第4学年で35時間の違いがあります。

表 11 小学校の各学年の授業時数

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
総授業時数	850	910	945	980	980	980

低学年複式学級では、第2学年の方が、算数の週当たりの時数が1時間多く、中学年複式学級では、第4学年の方が、社会と理科を合わせた時数が週当たりの時数で1時間多くなっています。多くの複式学級では、下の学年の総授業時数を上の学年の総授業時数に合わせて年間指導計画を作成しているようですが、異教科指導によって、より発達段階を考慮して年間指導計画が作成できるという長所があります。つまり、当該学年の時数を当該学年の総授業時数に合わせて行うことができることから、週1日、下学年は上学年より1時間早く下校することが可能になります。また、別々の教科であることから、児童によっては、同教科を1つの教室で学んでいる時より学習に集中しやすいという長所もあります。

短所としては、「異教科」の占める割合が多くなるほど、学級が分断される時間も多くなり、複式学級の特徴である2学年の児童による協同的な学習の場の設定が難しいことです。また、学年別指導により、直接指導と間接指導など、「わたり」の指導が複雑で難しくなること、直接指導の時間が少なくなること、教材の研究時間が2つの教科にまたがるため、2倍かかることにより教師の負担が増加することがあげられます。

以上のことから、これまでは実施されることが少なかった方法でしたが、近年は発達段階を考慮した指導を重視する観点から、教育効果が上がる方法として「同教科」との併用などの研究が進められています。

② 異教科指導を実施する際の留意点

異教科指導を実施するにあたって留意する必要があるのは、どの教科を組み合わせるかという点です。

組み合わせを考える時には、特に、学習の場に配慮する必要があります。例えば、国語と体育の組み合わせでは、学習の場が全く異なり、実質的には不可能な組み合わせとなります。理科、音楽、図工、家庭、体育等、特別教室を使うことの多い教科は、異教科指導には向かない教科と言えます。低学年は教室を使って授業することが多いことから、より多くの教科での組み合わせの検討が可能でしょう。ま

た、高学年では、国語と算数が年間 175 時間と同時数であるため組み合わせがしやすくなっています。

以上のような点に配慮し、各小学校における学習環境の実態に即して学習効果を最重要視して時間割を作成します。

(2) 同教科異単元（学年別指導）

① 同教科異単元指導の長所と短所

同教科異単元とは、同じ教科ではあるが、学年で異なる単元、異なる内容で行う方法です。異教科と同様に、教師が一方の学年を指導している間は、もう一方の学年は児童だけで学ぶことになります。島根県で一般的に学年別指導と呼ばれているのがこの方法で、特に内容の系統性の強い算数においては、本県の複式学級の 90～100%がこの方法で行っています。異教科指導と同様に、単複をくりかえす傾向のある学校や、欠学年がある学校、児童の転出入が多い学校では、行われることが多い方法です。入門期（1年生）や、学習指導要領で学年別に配当された目標、内容どおりに指導する方が混乱も少なく、指導効果が高いと判断した学校でも行われます。近年、国語、算数、理科、社会においては、より内容の系統性を重視し、同教科異単元（学年別指導）をとる小学校が全国的に増えてきています。

長所としては、教科の系統性を踏まえた指導がしやすい、転出入児童へ学年を超えた内容についての未履修対応の必要がなくなる、より学年の発達段階に応じた指導ができる、低学年では特に同単元指導よりも指導がしやすいといった点があげられます。また、同単元同内容指導の場合ほどは多くありませんが、異教科指導と比較して、両学年の協同的な学習の場が設定しやすいこともよさとしてあげられるでしょう。それから、第7章でもふれますが、必然的に生まれる間接指導の時間は、児童の学びの主体性を育む可能性のある指導類型だと言えます。

短所としては、異教科指導と同様に、学年別による指導となるため、直接指導と間接指導など、「わたり」の指導が複雑で難しい、直接指導の時間が少なくなる、教材の研究時間が2倍かかることにより教師の負担が増加するといった点があげられます。

② 同教科異単元指導を実施する際の留意点

同教科異単元を実施するにあたって、教師は、間接指導についての考え方を整理しておかなければなりません。間接指導の時間を、教師がもう一方の学年を直接指導している間の待ち時間としてとらえるのか、児童の主体的に学習に取り組む態度を育む絶好の機会ととらえるのかで、教育効果は大きく異なります。学年別指導における直接指導、間接指導、わたり、ずらしといった方法で指導をする際の留意点については、第7章で詳しく説明します。

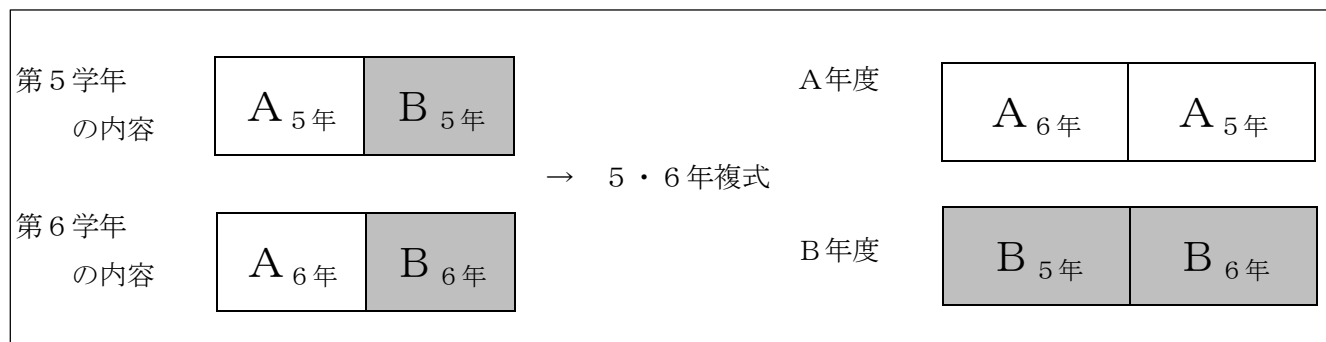
(3) 同教科同単元同内容同程度（A・B年度方式、2 本案）

① 同教科同単元同内容同程度指導の長所と短所

同教科同単元同内容同程度指導は、2 学年の内容を A 年度と B 年度の 2 年間に配分し、いずれの年度においても両学年に同時に同じ内容を同じ目標のもとに同程度に指導することから、A・B 年度方式と言われます。また、2 年分の年間指導計画を A 年度案、B 年度案とし、2 案あることから、2 本案と言われることもあります。

模式的に図で表すと、図 4 のようになります。

図 4 同教科同単元同内容同程度（A・B 年度方式、2 本案）説明図



この案によって学習すると、単式学級であれば第 6 学年で学習する内容を複式学級においては第 5 学年で学習したり、逆に単式学級であれば第 5 学年で学習する内容を複式学級においては第 6 学年で学習したりすることがあります。第 4 章でふれたとおり、複式学級の特例により、複式学級においては学習指導要領に示されている順序によらない教育課程を編成することが可能であることから、このような年間指導計画が作成可能となります。

長所は、児童の側から考えると、複式学級であっても学習内容の上からは単式学級と同じような指導となることによって、より多くの人数で学べ、多様な見方や考え方が出される可能性が大きくなること、教師の側から考えると、個に応じた指導をする時間を生み出しやすいこと、学習の準備等が単式学級と同じになり負担が少ないことがあげられます。

短所は、系統的な内容の指導、特に技術的な面の指導が難しいこと、下学年の児童に対して上学年の児童との能力差や経験差が埋められないままに授業が展開された場合に、目標の達成が難しいことが挙げられます。

ここで、各教科等の「学年の内容」について整理しておく必要があります。その学年で学習すべき内容は、学習指導要領に示されていますが、平成 20 年改訂の現行の学習指導要領において目標と内容が学年ごとに示されているのは、算数、理科、社会の第 5 学年と第 6 学年のみとなっています。つまり、その他の教科等については、複式学級に限らず、単式学級においても、低・中・高それぞれ 2 年間でその内容を学習し、目標を達成すればよいわけです。表 12 に、学習指導要領に示された目標と内容を整理しました。目標や内容が 2 学年共通で示されるようになったのは、道徳を除いて、平成元年改訂の学習指導要領からです。

昭和 52 年改訂の学習指導要領までは、国語、社会、算数、理科、音楽、図画工作、家庭、体育の 8 教科全てが、目標、内容ともに学年別に設定されていました。しかし、平成元年改訂、平成 10 年改訂と

改訂を重ねるごとに目標と内容が2学年共通で示される教科等が増え、現行の算数、理科、社会の第5学年と第6学年のみとなりました。

よって、厳密にいうと、学習指導要領に示された内容が当該学年で学習すべき内容であることから、図4に示すA・B年度方式による指導は、算数、理科、社会の第5・6学年においてしか成立しない複式学級指導類型ということになります。

しかし、学習指導要領をもとに作成されている教科書が学年ごとに発行されていることから、その他の教科においても、各学年の教科書に掲載されている内容を各学年の内容ととらえ、A年度案、B年度案とし、年間指導計画が作成されているというのが現状です。

表 12 各教科等の小学校学習指導要領における目標と内容の示され方

	昭和 52 年改訂	平成元年改訂	平成 10 年改訂	平成 20 年改訂
目標と内容が学年別に示されている教科等	国語、社会 算数、理科 音楽、図画工作 家庭、体育	国語、社会 算数、理科	算数 理科 社会（5・6年）	算数 理科 社会（5・6年）
目標は2学年共通で、内容は学年別に示されている教科等		生活、音楽 図画工作、家庭 （体育5・6年保健）	（音楽の共通教材） （国語の漢字） （体育5・6年保健）	（音楽の共通教材） （国語の漢字・ローマ字） （体育3・4年、5・6年保健）
目標と内容が2学年共通で示されている教科等		体育	国語、生活、音楽 図画工作、家庭 体育 社会（3・4年）	国語、生活、音楽 図画工作、家庭 体育 社会（3・4年）
目標は全学年共通で、内容が2学年共通で示されている教科等		道徳	道徳	道徳、 外国語活動 特別活動（学級活動）
目標と内容が全学年共通で示されている教科等	道徳 特別活動（学級活動）	特別活動（学級活動）	特別活動（学級活動）	
目標が全学年共通で示され、内容が示されていない教科等				総合的な学習の時間
その他			（総合的な学習の時間）については、総則でねらいは示されたが、目標及び内容は学校で定めることとされていた。	

※平成 26 年 3 月発行の複式学級指導の手引き「表 12」から、総合的な学習の時間について修正

②同教科同単元同内容同程度指導を実施する際の留意点

まず、複式学級における同教科同単元同内容同程度指導（A・B年度方式、2本案）を単式学級と同様であると考えのではなく、児童の実態を十分に踏まえたうえで指導する必要があります。

近年、特別支援教育の観点から、児童一人一人の実態に応じた指導が重視されており、単式学級における一斉指導の際も、個に応じた支援が行われています。そういう意味では、単式学級における指導は、同単元同内容同程度ではありますが、実際には異程度の指導が展開されていると言えます。同様に、複

式学級における同教科同単元同内容同程度指導（A・B年度方式、2本案）においても、同じ目標のもとに同程度で指導を展開していても、学級の児童数が少ないことを生かして、一層個に応じた支援がなされています。その際、単式学級で指導する時以上に、一人一人の実態に幅があることも意識して、指導することが大切です。

次に、単元の配列にあたっては、以下の点に留意します。

- 学習の難易を考え、順序性も配慮して、A・B両年度に等しく分けて配列します。
- 学習の内容（領域・分野等）をA・B両年度に等しく分けて配列します。ただし、社会科の我が国の歴史についての学習のようにA・B年度に分けて配列するよりもいずれかの年次に配列して時代の流れに沿って学習した方が良いと判断される場合もあることから、必ずしも二等分にこだわらないことも大切です。
- 単元の目標や学習内容の系統を質と量の面から研究して配分を考えます。指導計画を作成する際は、教科書が重要な参考資料となるわけですが、その場合、単元名だけを見てA・B年次に配分してバランスがとれていると判断してはいけません。単元のねらいや学習内容等、学習の質や量、順序性などについて十分に検討して作成することが大切です。

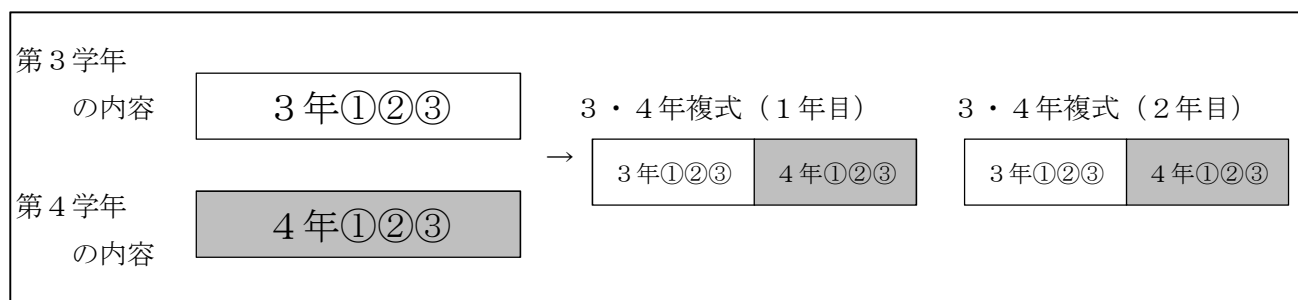
(4) 同教科同単元同内容異程度（完全1本案、くりかえし案）

①同教科同単元同内容異程度指導の長所と短所

同教科同単元同内容異程度とは、2学年分の内容を1年間に圧縮して単元を構成し、2年間くりかえして指導することから、くりかえし案と言われます。また、完全1本案と言われることがあります。例えば、表6で示したように、音楽の学習で同じ題材で同じ内容（曲）を扱いながらも、一方はイ短調の特徴を意識して、音楽の流れを感じ取りながら視奏する、一方はイ短調の視奏に慣れ親しむようにする、と程度を変えて学習をするといった類型になります。

模式的に表すと、次の図5のようになります。

図5 同教科同単元同内容異程度（完全1本案、くりかえし案）説明図



この案によって学習する長所は、両学年の単元や内容を同じくし、同じ雰囲気でも学習しながらも、学年差に応じた指導が可能になる、上学年の児童が1年目に目標に到達できていない場合には、実態に応じて2年目に下学年の児童とともにもう一度学習することができる、学級編制の変動に対処することができる、教材研究を系統的発展的に行うことができるといった点があげられます。

短所としては、教科によって差はありますが、圧縮により時間的な余裕がなくなること、下学年児童や人数が多い学年への指導時間が多くなること、系統性を考慮した年間指導計画を作成する必要があること等があげられます。圧縮にあたっては、例えば1年目は工場Aの見学、2年目は工場Bの見学をするなど、全く同じ活動の繰り返しをさけるよう工夫します。

②同教科同単元同内容異程度指導を実施する際の留意点

同教科同単元同内容異程度指導を実施する際には、両学年の間接指導の時間配分に特に留意します。また、上学年で配慮が必要な児童に目が向きにくくなるので、意識的にはたらきかけるようにします。年間指導計画の作成にあたっては、学習指導要領解説に示されている系統や内容に留意して作成します。特に音楽では、共通教材の扱いや、いずれの学年でも取り扱う内容に留意します。その他にも、目標の設定にあたっては、2学年の共通目標と学年別の目標をそれぞれ明確にする必要があります。

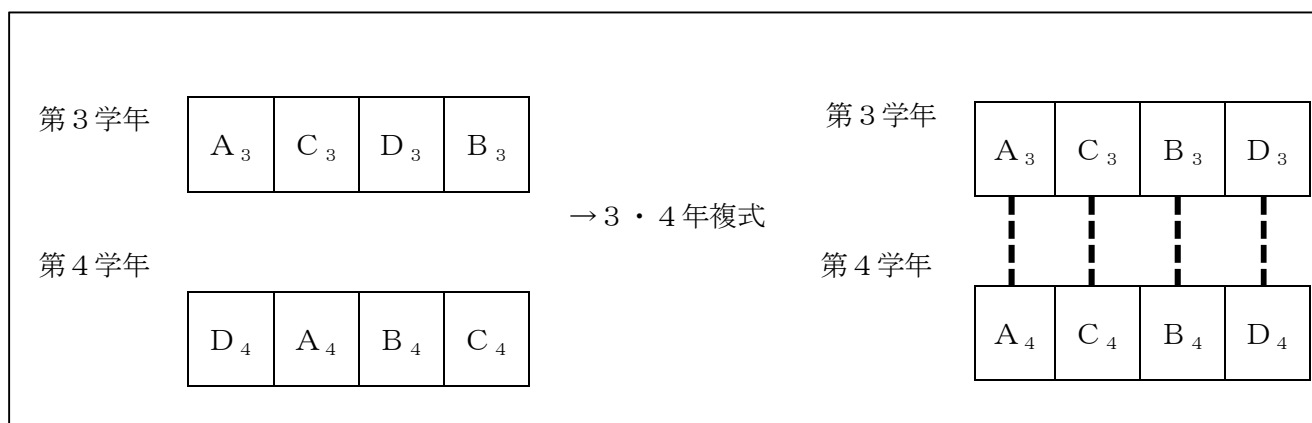
(5) 同教科同単元異内容（１本案、くりかえし案）

①同教科同単元異内容指導の長所と短所

同教科同単元異内容の指導は、同教科同単元同内容異程度と同様に、同じ単元を２年間くりかえす指導の類型となります。異なるのは、単元は同じであっても、上下両学年の学習目標を達成することができるよう学習の内容や程度をかえて、可能な限り共通指導場面を設定し指導する方法です。例えば、理科において「電気」という同じ単元について、第３学年は豆電球に明かりをつける内容を、第４学年は直列つなぎ、並列つなぎについての内容を学習するといった方法です。実質的には、異内容異程度の学年別指導を２年間くりかえします。

模式的に図で表すと、次の図６のようになります。

図６ 同教科同単元異内容（１本案、くりかえし案）説明図



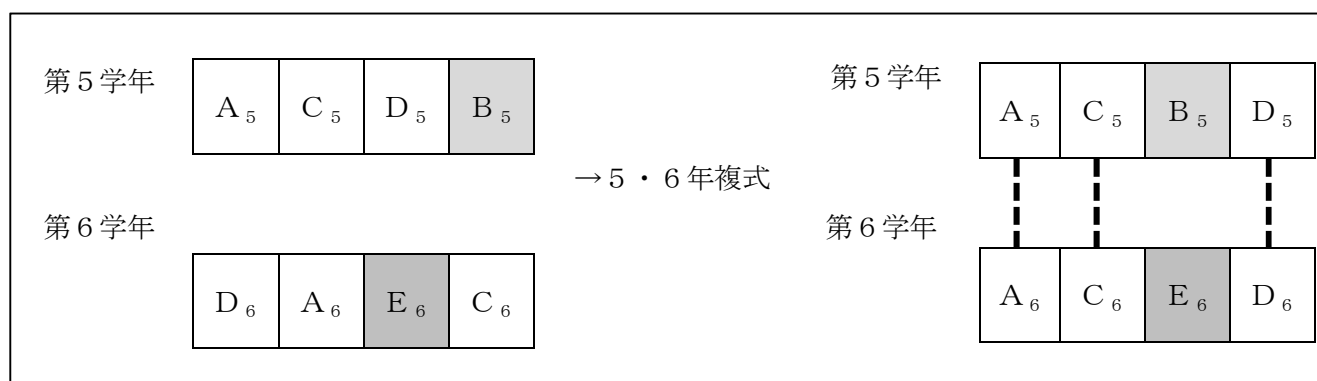
長所としては、同教科同単元同内容異程度（完全１本案、くりかえし案）と同様に、両学年の単元や内容を同じくし、同じ雰囲気でも学習しながらも、学年差に応じた指導が可能になる、学級編制の変動に対処することができる、教材研究を系統的、発展的に行うことができるといった長所に加え、同教科異単元指導の場合と比較して当該学年においてそれぞれの学年の内容を学習しながらも、両学年共通の話し合い場面が多くなり、学級としての一体感が生まれやすいといった良さがあります。

短所としては、異教科指導や同教科異単元の学年別による指導と同様に、直接指導と間接指導など、「わたり」の指導が複雑で難しい、直接指導の時間が減ることや、教材の研究に時間を要し、教師の負担が増加するといった点があげられます。また、完全な学年別の指導になりやすい、単位時間の指導で共通指導場面を設定するために教材研究が必要で教師の負担が増えるといった短所もあります。

②同教科同単元異内容指導を実施する際の留意点

同教科同単元異内容の指導に当たっては、学年別指導における直接指導、間接指導に関わる留意点（第７章参照）に加え、年間指導計画の作成にあたっては、学習指導要領解説に示されている系統性や内容に留意し無理なく入れ替えをします。教科内の系統性だけでなく、第４学年の理科「気温の変わり方」の単元と算数「折れ線グラフ」の単元等、他教科等との関連のあるものもあるので気を付けます。特に、組み合わせのない単元がある場合は、次の図７のように異単元の指導となります。

図7 同教科同単元異内容（1本案、くりかえし案）年間指導計画作成説明図



(6) 折衷案

折衷案とは、1本案を主体に、一部2本案を取り入れた指導計画、また、2本案を主体に、一部1本案を取り入れた指導計画を指します。つまり、新たな類型というわけではなく、それぞれの長所を生かしながら短所を補った指導計画です。そういう意味で、同教科異単元指導で学年別に指導していたところに一部同単元指導を取り入れた場合も折衷案と言われることがあります。

折衷案作成にあたっては、一般的に複雑な年間指導計画の作成となるので、未履修等のないよう留意します。

5 合同学習

複式学級や欠学年があり少人数の学級で学習しなければならないという実態がある場合に、多人数での学びによってもっと学習意欲を高めたい、経験領域を広げたい、社会性を伸ばしたいという意図で、学級や学年の枠をはずし、学習集団を編成して学習する形態を合同学習といっています。例えば、低学年と中学年が一緒に学習したり、下学年（１・２・３年）と上学年（４・５・６年）に分かれたりして学習する形態があります。集団の規模を大きくすることによって、集団で思考する力を伸ばしたり、多人数での活動を楽しんだり、協力して活動するよさを感じたりすることができるようになります。少人数であるために、学習活動を十分行うことができない活動の例としては、

- ・多様な考えを交流させ、新たな見方や考え方を構築する学習活動
- ・体育でチームプレーを必要とする活動
- ・音楽の合奏や合唱 等

があげられます。

合同学習の実施にあたっては、以下の点に配慮します。

○合同学習のねらいを明確にする。

○学習効果を高めるために各学級担任の協力体制を築く。

合同学習においては、複数の教師による指導体制がとられますが、指導の立案、実施にあたっては、主担当を中心にし、その他の教師による協力によって進めます。

○各教科等に留まらず、学校経営全体の計画へ位置付ける。

合同学習は、「写生会」「音楽会」「運動会」などの学校行事に関連して、教科の学習が全校一緒に行われる場合がありますが、各学校において十分検討し、年度当初に綿密な指導計画を立てて実施することによって、効果があがります。

○学年差や個人差等を考慮し、一人一人の児童に細かく配慮する。

学年により能力差の異なる児童が共通の学習課題に取り組み、充実感、満足感をもって学習の喜びを味わえるようにするため、教師は一人一人の実態を的確にとらえ、それをふまえた指導計画を立て、適切な指導法を用いる必要があります。

○下学年の児童の自主性・主体性が伸ばせるよう配慮する。

上学年と下学年で組み合わせられる合同学習では、下学年の児童は上学年の児童に頼りきってしまう姿がよくみられます。そのため、下学年の児童の自主性・主体性を培うためには、十分な配慮をすることが大切です。

○時間割の編成を工夫する。

合同学習は、音楽、図工、体育、特別活動（単式学級であっても小規模の場合は生活の学習も）など幅広く行われていますが、時間割も合同学習を行いやすいよう配慮しておきます。

例えば、中学年と高学年の合同で音楽を行うことが予想される場合、中学年の音楽を３時間目に、高学年の音楽を４時間目に配当しておき、中学年の４時間目は担任の担当教科を、高学年の３時間目は高学年の担任教科を位置付けておくことで、自由に動かすことができるようになります。（図８）

図8 合同学習を想定した時間割作成例

	1校時	2校時	3校時	4校時	5校時	6校時
中学年	国語 (担)	社会 (担)	音楽 (担)	算数 (担)	図工 (専)	図工 (専)
高学年	体育 (担)	算数 (担)	国語 (担)	音楽 (担)	理科 (専)	理科 (専)

↓

	1校時	2校時	3校時	4校時	5校時	6校時
中学年	国語 (担)	社会 (担)	音楽 (合同学習)		図工 (専)	図工 (専)
高学年	体育 (担)	算数 (担)			理科 (専)	理科 (専)

※(担)・・・担任の授業 (専)・・・専科教員の授業
 ※専科教員の授業時数確保に影響しない。
 ※音楽室の確保ができる。

6 集合学習

合同学習の実施によって集団の規模を大きくし学習を進めれば効果はありますが、身体差、能力差の問題を解消するためには困難な面もあるようです。そこで、同一学年の集団規模を大きくし、高め合うために考えられたのが、隣接校との集合学習です。明治以来、本県においても近隣校同士で工夫して行われてきています。2校以上の児童が集合し学習するため配慮することも多くありますが、児童にとっては能力を発揮するよい機会となりますし、複数校の集合であるため教員の専門性をより生かすこともできます。総合的な学習の時間で毎年一緒に活動するなど、実施校同士の連携により集合学習が定着しているところもあります。

主な活動には、学校行事や、各教科等の学習が挙げられます。

集合学習のできる望ましい学校間の条件には、

- (1) 両校が近距離にあり、移動のための交通機関が確保できること。
- (2) 学校の立地条件（海辺の学校、山の学校等）が似かよっていること
- (3) 児童の生活環境、生活経験がおおよそ共通していること
- (4) 両校の児童保護者に理解があること

があげられます。(1)の移動のための交通機関が確保できることが、集合学習を可能にするうえで特に大切な条件となります。

集合学習の実施にあたっては、以下の点に留意します。

- 集合学習のねらいを明確にする。
- 年間指導計画に位置付け、計画的に取り組む。
- 協力的な指導組織づくりをする

指導の効果が高められるよう各校の教師の指導組織づくりをし、指導案にも位置付けます。

○事前・事後の指導を充実させる。

集合学習のねらい等を児童に伝え、事前指導を十分に行い、進んで学習できるようにします。

また、事後には振り返りを行い、以後の学習に自信と意欲をもたせるようにします。

○活動の記録をとり、児童の姿をもとにした振り返りを教師間で共有し、次の活動に生かす。

7 交流学習

全く異なった環境の中で学習や生活を体験させることにより、児童の生活経験を広げ、豊かな人間性を育てたいという意図により生まれた学習形態です。へき地の学校と都市の学校、山間地の学校と海辺の学校が交流し、互いの学級で学習したり生活したりします。本県でも、県内同士、または県境を越えて、交流学習を行ってきた実績があります。日数は、一日の場合や数日間ということもあるようです。他校と交流することによって、多様な情報による視野の拡大や、社会性がより豊かになる等、互いの学校の学習の質を高めるうえでも効果があります。

交流学習を実施するにあたっては、以下の点に留意します。

○交流学習のねらいを明確にする。

○学校間で協議したうえで、年間指導計画に位置付け、計画的に取り組む。

○交流する学校のある地域や学校の実態について、事前の打ち合わせで、教師が十分に把握しておく。

○協力的な指導組織づくりをする

○事前・事後指導を行い、交流学習をより効果的に実施する。

交流する学校のある地域や、学校の実態、実施のねらい等を児童に事前に伝え、さらに保護者や地域の理解、協力も得て交流学習を行うことで、児童がより主体的に取り組むことができるようにします。交流学習の後も、手紙や電子メールによって各校での学習の成果等を継続して交流することで、それぞれの学校での学びの深まりが期待できます。

第6章 授業時数の取扱い

1 各教科等の年間授業時数と総授業時数

各教科等の標準授業時数は、年間 35 週（小学校第 1 学年については 34 週）以上にわたって行うことを原則としています。これは、学校教育法施行規則において定められており、小学校の各教科等の標準授業時数は、次の表 13 のとおりです。この授業時数は、1 単位時間を小学校 45 分としたものとなっています。低・中・高学年複式学級別に見ると、次の表 14 のような違いがあります。

表 13 小学校の各教科等の標準時数

区分	各教科										外国語活動	学習の総合的な時間	特別活動	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	道徳				
第1学年	306		136		102	68	68		102	34			34	850
第2学年	315		175		105	70	70		105	35			35	910
第3学年	245	70	175	90		60	60		105	35		70	35	945
第4学年	245	90	175	105		60	60		105	35		70	35	980
第5学年	175	100	175	105		50	50	60	90	35	35	70	35	980
第6学年	175	105	175	105		50	50	55	90	35	35	70	35	980

表 14 低・中・高学年複式学級における上学年と下学年の週当たりの授業時数の違い

	学年	総時数	週時数	週当たりの時数	週当たりの時数の違い	違いのある教科と時数
低学年 複式学級	第1学年	850	34	25	1	第1学年が年間 34 週計算であることから生じる違い 25 時間以外では、算数が 35 時間、第2学年の方が多い。
	第2学年	910	35	26		
中学年 複式学級	第3学年	945	35	27	1	社会が 20 時間、理科が 15 時間、第4学年の方が多い。
	第4学年	980	35	28		
高学年 複式学級	第5学年	980	35	28	0	社会が 5 時間、第6学年の方が多く、家庭が 5 時間、第5学年の方が多い。
	第6学年	980	35	28		

複式学級では、2 学年で学級を編制することから、標準授業時数を踏まえつつ、学校や地域の実態を十分考慮し、授業時数を定めることとなります。

同単元同内容同程度（A・B 年度方式・2 本案）で年間計画を作成した場合、当該学年の標準時数を下回ったり、上回ったりすることがあります。2 か年を通して 2 学年分の標準時数を確保することが重要です。このことは、複式学級の場合の教育課程編成の特例として、2 以上の学年の児童で編制する学

級については、特に必要がある場合には、各教科等の目標の達成に支障のない範囲内で、学年別の順序によらないことが認められていることによります。例えば、小学校理科の第3・4学年の場合、第3学年は90時間、第4学年は105時間となっています。同単元同内容同程度（A・B年度方式・2本案）で教育課程を編成した場合、第3学年でA年度を実施し、年間95時間行った場合は、2か年を通算して2学年分の195時間を確保しなければならないので、次年度の第4学年では100時間実施する必要があります。この場合、第3学年では5時間当該学年の標準時数を上回り、第4学年では5時間当該学年の標準時数を下回っていますが、2か年で195時間となっているので必要な時数が確保されたこととなります。

当該学年の標準授業時数を上回る授業時数で教育課程を編成する場合、大幅に時間を増やして、児童の負担過重にならないよう配慮する必要があります。

2 1日の生活時程や時間割作成における工夫

<生活時程>

- 児童数の減少による統合等により、複式学級を有する小学校でも、遠方からバスで通学する児童が多くなっています。朝夕の通学バスの運行時刻は児童の生活時程に大きく影響します。児童の家庭生活・学校生活に無理がないよう生活時程に配慮する必要があります。
- 清掃の時間の設定においては、清掃活動の教育的価値、ねらいを明らかにし、清掃区域と児童数の関係を考慮し、役割分担や時間設定を工夫します。

<時間割>

- 山間地の学校では冬期に積雪が多いため、1年間を前期と後期に分けて生活時程や週の授業時間の配当を変えるなどの工夫も大切です。
- 学年別の年間指導計画を作成する場合、下学年児童の下校後に上学年の指導をする時間が生じますが、地理的条件から一緒に下校させた方がよい場合もあるので、各学校の実態に応じて適切な工夫を行うことが大切です。

第7章 学年別指導における学習指導方法

複式学級で同時に両学年に指導を行おうとすると、どうしても学年別に交互に指導することになります。この方法を「わたり」と言っています。その際、一方の学年に指導している間、もう一方の学年は自学自習の学習方法をとっています。前者を直接指導、後者を間接指導と言っています。

間接指導は、学年別指導をした場合に、直接教師が言葉かけをしていない状況を言います。間接指導と言われるのは、児童の自学自習の時間にも教師の指導が及んでいるからです。直接に言葉かけはしていなくても、その自学自習の進行について他の学年の指導にあたりながら、常に気を配る必要がありますし、自学自習の前に直接指導等によって、児童が学習の見通しをもてるようにしなければなりません。

このように、直接指導、間接指導は、学年別指導における学習指導の方法を表す複式指導の専門用語となっていますが、「直接」「間接」にもそれぞれ様々な形態がありますし、その中間にあたる方法など、多様な方法があるのが実態です。また、授業時間内だけでなく、時間外にも、児童との直接的な打ち合わせや、掲示、プリントによる間接的な連絡などが行われます。

1 直接指導

複式学級の学習指導では、直接指導の場面だけを「指導」と考えてしまいがちであることから、次のような状況を招くことがあります。間接指導の有用性を踏まえた直接指導の在り方について考える必要があります。

- (1) 直接指導の時間の指導内容が量的に多くなり、指導の速度が早くなりがちになる。
- (2) 児童の思考の流れを無視した教師の一方的な教授が多くなり、結論だけが強調されがちになる。
- (3) 教具や資料などを用いた指導が行われず、教師の言葉だけの指導が多くなりがちになる。
- (4) 内容が精選されていない発問が多くなり、何を考え、何を答えるべきかがわからず、児童が反応できない状況が生まれやすく、理解も不十分になりがちになる。
- (5) 指導が一斉指導の形態に固定され、個に応じた指導がなされにくくなる。
- (6) 学習指導が一方の学年のみに行われがちになる。

2 間接指導

間接指導の時間は指導が「空白」になる時間と捉えられてしまうことがあります。そのため、複式学級は単式学級の半分の学習効果しかあがらないのではないかという心配が生まれてくるわけです。実際の指導でも、間接指導の時間は直接指導とつながらないドリルや作業に終始してしまう事例もあるようです。

複式学級の学習指導の効果を高めるためには、児童がこの間接指導の時間に積極的に学習できるようにすることが大切です。そのためには、教師自身がこの間接指導の時間の意義を認めることが必要です。つまり、間接指導の場は、児童の自発的な学習態度を育てるための絶好の指導の場であるという指導観に立って、毎時間の指導過程を考えることが大切です。なお、間接指導の時間に限らず、直接指導や単式学級の指導においても、一人でじっくり考える、数人で話し合う、討論する、繰り返し練習する等、様々な「間接指導」を取り入れる必要があります、間接指導の有用性について改めて考える必要があります。

間接指導の時間に、児童が自発的、自主的に学習するためには少なくとも次の4点について留意することが必要です。

(1) 学習の目標や流れをはっきりつかませるようにすること

教師は間接指導の時間にも、その学習進行についてたえず注意をはらっているとはいえ、個々の児童の表情や理解の程度等まではなかなか把握しにくい場合も生じます。一方で、個や学年別グループ等の自発的、自主的な学習活動が単式学級以上に、より効果的に行われる必要があります。そのため、学習の目標や学習の流れについて児童がきちんと理解することができるようにすること、また、学校全体で、または、複式学級を担当する教師で、1時間の授業構成や展開をよく協議しておくことが大切です。そのことが、児童にとっても見通しをもった安心できる学習展開につながります。

(2) 間接指導の時間における学習のきまりについて、児童とよく話し合っておくこと

複式学級において、教師が一方の学年やグループの指導にあたっている時は、もう一方の学年やグループの児童は原則として教師に話しかけないというような簡単なきまりや、声の大きさを各自がその場の状況によって調節することによって、上下両学年の声が錯そうすることで生じる混乱や停滞を克服することが可能となります。また、個人学習からペア学習へ、さらにグループの学習へとといった学習形態に関わる決まりがあると、話し合い方に見通しをもって学習することができます。

複式の学習効果を高めるためには、こうした学習のためのきまりづくりを大切にする必要があります。もちろん、学習規律づくりだけに力が入りすぎて、子供らしい自由な活動を極度に制限することのないよう注意することも大切です。

また、間接指導の時間に学習する内容は、その時間の直接指導の内容と関連のあるものを取り上げる必要があります。よく、他教科のプリント等、その時間の直接指導の内容と全然関連のないものを取り上げられることがあります。このような方法をとる場合、複式学級は単式学級の半分しか指導時間がないということになって、学習の効果は期待できません。

(3) 間接指導における学習指導の効果をあげるために、課題提示の仕方を工夫すること

間接指導の時間における学習の効果をあげることは、そのまま複式学級の学習指導の効果をあげることに直結します。そのためには課題提示の仕方を工夫し、間接指導における児童の取組の充実を図る必

要があります。間接指導の課題提示にあたっては、少なくとも次の4点に留意することが大切です。

①間接指導の課題は、児童にとって解決の見通しのあるものを提示すること

間接指導の時間に学習する内容が、本時の学習目標に直結し、直接指導に深い関連をもっているとしても、個々の児童にとって、あまりにも難しい内容である場合は、学習は成り立ちません。特に、教師が一方の直接指導にあたっているため、児童の取組の様子がつかみにくく、また、個々の状況に応じたきめ細かい指導もできにくいので、この点に留意することが大切です。

②間接指導の課題は、質、量ともに児童の実態に応じて設定すること

間接指導の時間は、ガイド学習によって協同的に学習を進める場合もありますが、児童が自分の力に応じ、自分のペースで学習することを基本にした時間でもあります。したがって、課題の質、量ともに児童の実態に応じることができるよう配慮することが大切です。

③課題は児童によくわかるように提示すること

間接指導の時間は教師の直接の言葉かけなしに学習をすることになります。そのため、課題そのものが、質的にも、量的にもほどよいものであっても、児童は時間の進行とともに本来の課題を見失ってしまう場合があります。そこで、板書やプリント等を利用して、「話し言葉」ではっきりと、詳しく課題の内容を伝えるようにすると有効です。

③間接指導の課題は、質、量ともに児童の実態に応じて示し、児童が課題解決の喜びを味わうことができるように配慮すること

間接指導の時間は、ガイド学習によって協同的に学習を進める場合もありますが、児童が自分の力に応じ、自分のペースで学習することを基本にした時間でもあります。したがって、課題の質、量ともに児童の実態に応じることができるよう配慮することが大切です。

④間接指導の時間における学習は、自己評価あるいは、グループの評価ができるようにしておくこと

間接指導の時間における学習が、目標に向かって進行しているかどうかを自分で評価したり、グループ内で評価したりできるようにしておくことが大切です。

また、ドリル学習をするような場合には、学習の方法とともに、答えの正誤がすぐその場で評価できるようにしておくことも大切です。直接指導の時間に移ってからの答え合わせより、解答を自分でチェックしながら、自己評価する方法が積極的に自学自習に取り組もうとする態度を育むうえでも効果的です。

間接指導の時間が、一定の思考操作が終わったら次の直接指導まで待たなければ学習が進まないということにならないように、間接指導の時間にあらためて問題を発見しグループで検討したり、自分の活動やドリル学習が終われば、類似の問題や発展的な問題ができたりするような配慮も必要となります。このような学習形態での間接指導であれば、必ずしも教師がいなくても、個人やグループで目標に向かった学習の進行が可能となります。

(4) 直接指導の時間に学習の進め方のモデルを教師が姿で示す

間接指導において、児童が自分たちで学習を進めるにあたっての一番のモデルは、直接指導時の教師の姿です。間接指導時の児童の学びを意識して、話し方、意見の広げ方、板書の仕方を示しましょう。

3 「わたり」と「ずらし」

複式学級の学習指導において、直接指導、間接指導が行われるにあたり、「わたり」や「ずらし」が行われます。これらは複式学級の学習の指導特有の用語です。

(1) わたり

複式学級では2つの学年の児童が同時に学習するわけですから、教師としては、学年差や能力差に対する指導上の配慮が必要になります。そこで、両学年の間や、グループの間を移動して指導することになります。このように「渡り歩く」指導形態のことを、「わたり」よんでいます。

わたりの類型は、図9のようになります。1単位時間の中で色を付けた部分が、教師が直接指導している状態を表し、空白の部分は間接指導により自学自習している状態を表しています。また、上学年からわたる場合と、下学年からわたる場合があります。

図9 「わたり」の類型

①わたりの回数や、重点をおく学年、時間に柔軟性をもつ型

上學年	
下學年	

②直接指導の時間や内容が明確に位置付けられている型

上 学 年						
下 学 年						

③一つの学年の直接指導に重点がおかれる型

上学年						
下学年						

④ほとんど一斉指導の型（同単元同内容の場合に多い型）

上学年						
下学年						

⑤③と④の型が組み合わされ、主として学年ごとの直接指導の機会を数回持つ型

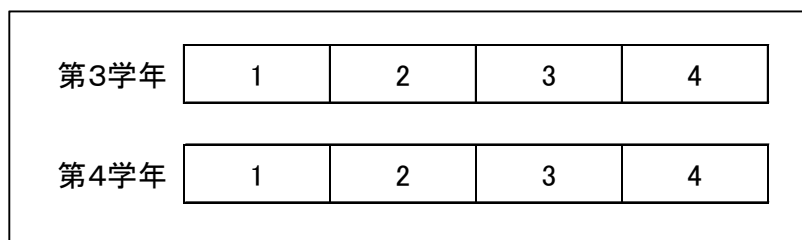
上学年						
下学年						

(2) ずらし

わたりの指導形態においては、直接指導と間接指導の時間があります。そのためには、学習過程を組むとき、両学年あるいは各グループが同時に直接指導の時間にならないよう、どちらか一方を「ずらし」、交互にわたりができるようにするわけです。学習過程の場면을「ずらす」ためには、各場面の学習内容や学習時間に無理のないようにすることが大切です。このように、学習の場면을ずらすことを「ずらし」とよんでいます。

各学年の1単位時間の中での学習過程の場면을、1 課題把握→2 追究Ⅰ→3 追究Ⅱ→4 考察の4場面として考えたとします。単式学級で授業をするならば、図10のように1から4の場面がそれぞれの教室で同時に展開されます。

図10 単式学級の学習過程の場面例



しかし、複式学級において、課題把握の場면을教師が直接指導したいと考えた場合、図11に示すように、一方の学年が課題把握を行っている間、もう一方の学年は場면을ずらして、別の場面の内容に取り組みます。これが「ずらし」です。ずらすことにより、どちらの学年の課題把握も教師による直接指導が可能となります。

図11 複式学級の「ずらし」の学習過程の場面例

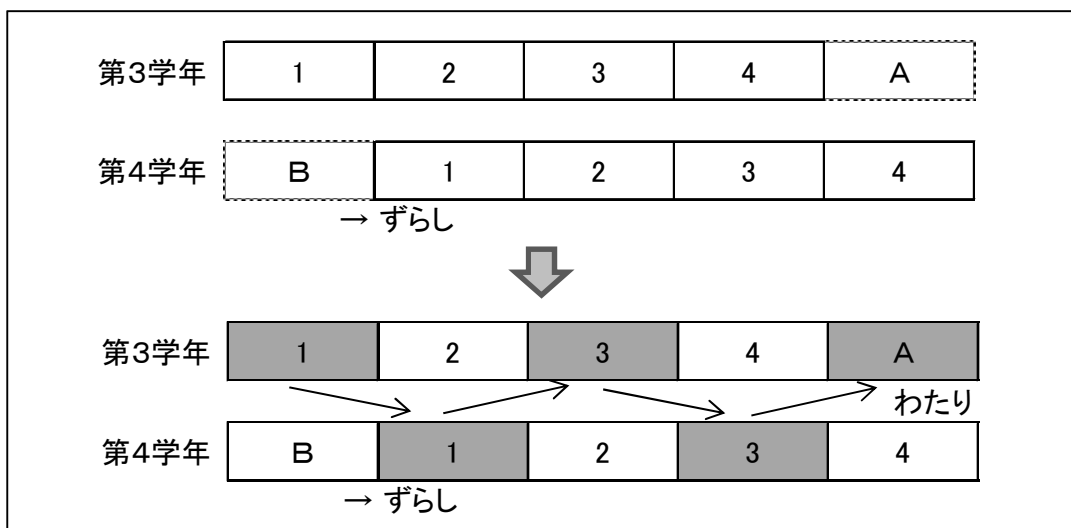


図11では第4学年の方がずらしてありますが、学習の進展過程や内容によって、どちらをずらしてもかまいません。いずれにしても、ずらしたことによって、時間的にAとBのような間接指導の時間が生じます。そこで、たとえば、Aの時間は発展的な問題を設定したり、次時の導入として課題把握の時間にしたりするといった工夫が考えられます。一方、Bでは前時までの学習をふりかえる時間や、前時の学習内容の発展課題に取り組む時間にするとといった工夫が考えられます。この図はあくまで基本型であり、弾力的に考える必要があります。次に実際の指導案を例示します。

図 12 高学年の展開例 算数 第5学年「面積」 第6学年「立体」

(出典：複式学級学習指導事例集第20集 島根県教育庁義務教育課 平成9年)

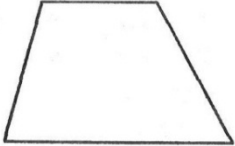
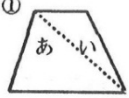
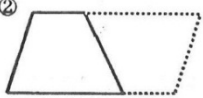
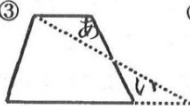
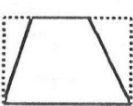
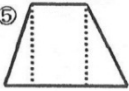
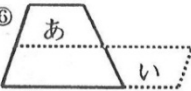
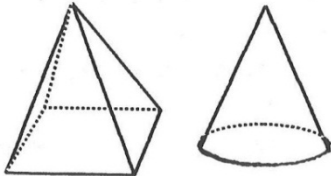
学 習 活 動	過 程	位 置	過 程	学 習 活 動
1 学習課題をつかむ。 台形の面積を求める方法を考えよう。  2 台形の面積を求める方法を考える。 (1)今までに学習した図形を使って求積する。 (2)長方形や三角形に分けて求積する。 (3)パソコンを使って考える。 ①  ②  ③  ④  ⑤  ⑥  4 台形の面積の求め方について話し合う。 (1)どうやって求めたか紹介する。 (2) 台形の面積を求める公式 $(\text{上底} + \text{下底}) \times \text{高さ} \div 2$ を確認する。 (3)練習問題をする。 5 次時の予告	つかむ ／ 見通す ／ 確 か め る ／ ま と め る ・ 広 げ る		広 げ る ／ つ か む ／ 見 通 す ／ 確 か め る ／ ま と め る ／ 広 げ る	1 前時までの学習を振り返る。 ～パソコンを使って～ ・角すい・円すいの底面、側面の形や高さ 2 学習課題をつかむ。 角すいや円すいを真正面から見た図と真上から見た図で表してみましょう。  3 四角すい、円すいの真正面から見た図と真上から見た図をかく。 (1)どのような順序でかいたら良いか話し合う。 (2)真正面から見た図や真上から見た図をかく。 (3)わからないときはパソコンを使って考える。 (4)終わったら、他の立体についてもかいてみる。 4 わかったことをまとめ、話し合う。 ・面の形に気をつける ・面と面との位置関係に気をつける 5 練習問題をする。 (1)真正面から見た図、真上から見た図から立体の名前を予想する。 (2)終わったら、パソコンでいろいろな立体の真正面から見た図や真上から見た図を調べてみる。 6 次時の予告

図 13 低学年の展開例「算数 第1学年「かたちづくり」第2学年「三角形と四角形」

(出典：複式学級学習指導事例集第20集 島根県教育庁義務教育課 平成9年)

1 年		2 年	
教師の支援	学 習 活 動	学 習 活 動	教師の支援
・ 枠の中に色板ならべをすること、楽しんで活動できるようにする。 ・ OHPで影絵を見せることで影絵に色板をならべを意欲づける。 ・ 色板のならべ方を言葉に出すなど動きを確かめながら、操作できるようにする。 ・ 戸惑っている子どもには色板を動かして一緒に考えるようにする。 ・ はやくできた子どもにはできたことを認め、別のならべ方を考えるよう声かけをする。	1 前時の学習を想起しながら、色板ならべをする。 2 課題を知る。 かげえにいろいろをならべて、おなじかたちをつくらう。 3 色板で影絵を作る。 ・ ここにさんかくがはまるかな。 ・ うらがえしにすると はまるかな。 ・ うまくはまらないなあ。 ・ さかさまにしてみよう。 4 各自の作り方を発表し合う。 ・ おなじやりかただ ・ ちがうなあ。 ・ やりかたがいっぱいあるなあ。 ・ おなじか、ちがうかわからない 5 作りたい影絵を作る。	1 課題を知る。 三角形パズルにしようせんしょう。 1回目 絵を見て組み立てる。 2回目 裏にして組み立てる。 2 各自の作り方を発表し合う。 3 直角三角形の定義を知る。 1つの角が直角になっている三角形を直角三角形といいます。 4 長方形を三角形に分け、自分のパズルのパーツ作りをする。 ・ 直角を意識して分ける。 ・ 三角形に切り取ることができず、四角形や五角形になる。 ・ 直角を意識せず切り取ろうとする。 5 友達のパズルをする。	・ パズルをしようとして導入することにより、楽しく学習に入るようにする。 ・ 長方形を5つの三角形に切り分けたことをパズルを見せて確認しておく。 ・ 長方形の台紙に合わせたり、辺の長さに着目するように声かけをする。 ・ 黒板で大きなパズルを使って組み立てながら説明するようにする。 ・ 直角に着目していた場合は直角のある三角形を実際に手に取らせ、直角三角形の定義をする。 ・ 直角に着目していなかった場合は角の形の学習を思い出したり、三角形の仲間わけをすることから直角三角形を見つける活動をし、定義をする。 パズルの約束 三角形に切る。 切り取る数は5つまでにする。 直角三角形が必ず1つはある。 ・ 約束を確かめてから切るようにする。 ・ 直角に着目しているか声かけをする。 ・ うまく分けられない子に対しては、三角定規を使ったり、一緒に線を引いて作るようにする。 ・ 裏返して行う。辺と辺、直角に着目するようにする。 ・ 直角三角形はどれか確かめ合う。 ・ 作ったパズルを掲示し、お互いの作品をあげあわせるようにする。

高学年の算数では、ずらしによって、「つかむ」場面をどちらの学年にも直接指導しているのがわかります。また、両学年ともに「確かめる」「まとめる」場面のうち、話し合いの場面では直接指導しています。また、低学年の算数では、ずらしによる直接指導と間接指導のわたりだけでなく、作業したり、考えたりする場面では、どちらの学年も同時にわたって個への指導をしていることがわかります。

これらの「わたり」「ずらし」といった複式学級の学習指導特有の用語があることから、複式学級指導は特別な指導であるといった印象をもつかもしれません。複式学級指導に取り組んだばかりの時期には、「今日は計画通りうまくわたれた」といった教師自身の動きのみをとり挙げ授業を評価しがちになります。授業をふりかえる際に大切なのは、「その時間の目標を児童が達成するための教師の支援としてわたるタイミングは有効であったか」、「ずらしは効果的であったか」ということであることを忘れてはいけません。よい授業は、「教師がうまくわたれた授業」ではなく、「児童が目標を達成できた授業」です。

4 ガイド学習

ガイド学習は、間接指導をより充実させるために考え出された学習の形態の1つで、学習集団の中から「ガイド」役の児童を決め、そのガイドが教師との話し合い等により立てた学習進行計画にそって授業を進める方式です。学年別指導の中で、以前から様々に工夫され、取り入れられてきました。

ガイドを中心に児童が協力して学習することで、間接指導の質を高めることをねらいとしています。ガイド学習は、間接指導を効果的に進めるだけでなく、児童の集団意識を高め、社会性を育てることや、教師の指導による受け身の学習ではなく、能動的、主体的に学習する態度を養うことを目指します。近年、アクティブ・ラーニングというキーワードに代表されるように、単式、複式と言った学級編制の形態に関わらず、主体的、能動的な学びの充実が求められています。1時間中教師の声が響く授業スタイル、教師のこまかな指示を受け児童が活動する授業スタイルから、児童が主体となって児童の声で学習を進める授業への転換が必要です。そういった意味で、このガイド学習は今求められている授業のスタイルそのものと言えるでしょう。

ガイド学習は、低学年、中学年、高学年と、発達の段階に即して、単純な学習から複雑な学習へと移行していきます。低学年や初めて複式学級となった学級においては、ガイドは教師の作成した「学習ガイド」(カード)をもとに進行する経験を重ね、ガイド中心に学ぶ学習集団づくりの基礎を養います。その経験を積み重ねながら、中学年、高学年と進む中で、学習ガイド(カード)がなくても進行できるようになり、さらには、話し合いの学習において、話し方や聞き方の積み上げによって、既習の知識と関連させながら、また他者の発言と自らの考えを関連させながら考えたり発言したりできるようになっていきます。学級のだれもがガイドとしての役割が果たせるように順番に経験を重ねていくことで、より協力的に、主体的に学ぶことのできる集団に育ちます。

(1) ガイドの役割

ガイドには、表15に示すような役割があります。

表15 ガイド学習におけるガイドの役割

1 学習の準備	複式学級においては、特に児童が学習準備に参加することが大切です。ガイドに限らず、児童全員が準備をしながらどんな資料や教材を使って、どんな活動を行うか予想することができ、主体的な学びへつなげることができます。
2 学習の進行	学習の進行は、ガイドの役割の中心と言えます。学習を進行するには、学習内容の見通しがもてていることはもちろん、進行の手順も定まっていなければなりません。
3 学習規律を整える	学習技能の定着と同時に、話し合い活動を展開するガイド学習においては、学習規律を整える仕事がとても重要です。ガイドを中心に互いに声をかけあいながら学習規律を整えていけるようにします。
4 学習の目標を達成する	学習を進めていく中で、すぐに目標が達成できる児童や、じっくり時間をかけて取り組む児童など、個によって違いがあります。ガイドは、他の児童とも協力しながら、全員が目標を達成できることを目指します。

[参照：へき地・小規模・複式学校の特性を生かした学習指導（指導方法）。全国へき地教育研究連盟編。平成元年3月31日]

これらは、一般的なガイドの役割として示したのですが、実際には、学級の実態や条件の違いに応じてアレンジされ、創意工夫を加えていくことが望まれます。学級集団の成長とともに、ガイドの役割も変化していくことになります。

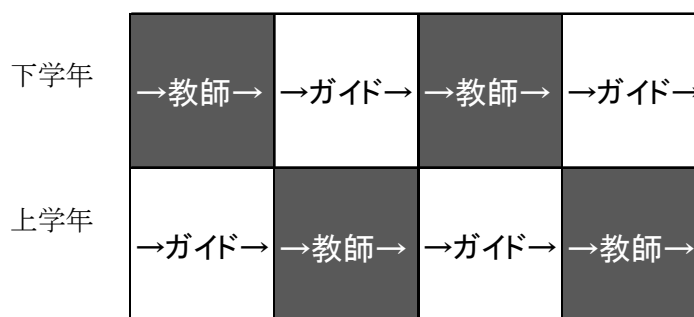
(2) ガイドの位置付け

図 14、図 15 は、1 単位時間の学習過程におけるガイドの位置付けを模式的に表したものです。ガイド学習の経験差や、教科等の学習内容により柔軟に位置付けていく必要があります。

①教師が中心となって授業が展開される場合

- ・・・直接指導の間は教師が進行し、間接指導の間は、教師との事前の話し合いをもとにガイドが中心となり進行します。

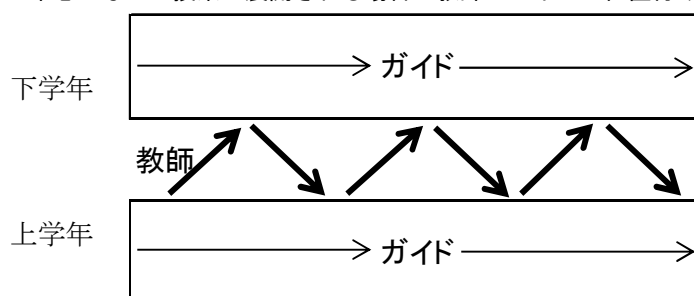
図 14 教師が中心となって授業が展開される場合の教師とガイドの位置付け



②ガイドが中心となって授業が展開される場合（同時間接指導）

- ・・・1 単位時間全体をガイドが進行し、教師は個別に支援したり、ガイドにはたらきかけたりして、全体には間接指導を行います。このように、教師が個別指導にあたり、同時に両学年を間接指導する方式は、同時間接指導とよばれます。

図 15 ガイドが中心となって授業が展開される場合の教師とガイドの位置付け（同時間接指導）



(3) ガイド学習の留意点

- 学習ガイド（カード）には、ガイドがそのまま読んで進行できるよう、図 16 に示すように、話し言葉で流れを書いておきます。経験を重ねれば、簡単な進行メモで学習が進められるようになります。
- ガイド学習は、始めて間もなくの慣れない間は、ガイドだけでなく学習集団全員に学習ガイド（カード）を配付するなどし、みんなが流れを理解し、助け合いながら学習を進められるようにします。

- ガイド学習を始めて間もなくは、リーダー性のある児童をガイドにすると学習が進めやすいですが、学級のだれもが順番にガイドとしての役割ができるように経験を重ねていくことで、より協力的に、主体的に学ぶことのできる集団に育ちます。
- ガイドの進行がうまくいかず、話し合い等の学習活動が停滞していた場合、すぐに教師がガイドにとって代わるのではなく、どう進めたらよいかについてガイドを支援します。時には教師がガイド役をやって見せる（例示する）方法もあります。教師が、ガイドの進行のよさをほめ、価値づけることで、ガイドが自信をもって進行できるようになっていきます。ガイド学習は、ガイドの児童が教師との分業で学習を進行することだけが目的ではなく、学習の仕方を学んだり、主体的な学習態度を身に付けたりすることを目指して取り組んでいくことが大切です。
- 両学年ともにガイド学習をする同時間接指導においては、教師はどちらの学年にも気を配り、全体を見渡し、必要に応じてガイドやそれぞれの学習集団を支援する必要があります。学級のガイド学習についての成熟度が高まり、経験を重ねる中で、学習集団が「自ら学ぶ集団」へと育っていき、教師の出番も少なくなってきます。よりねらいにせまる学習となるよう支援することが大切です。

図 16 学習ガイド（カード）記入例

- | | |
|----|---|
| 1 | 「今日の学習をはじめます。今日のめあてを読みましょう。」 |
| 2 | 「今日の日づけとめあてをノートに書きましょう。」 |
| 3 | 「今日の問題を読みましょう。」 |
| 4 | 「意味の分からないところはありませんか。」 |
| 5 | 「15分まで、考えてください。」 |
| | （中 略） |
| 9 | 「自分のとき方を発表してください。」 |
| 10 | 「付けくわえや別の考えはありませんか。」 |
| 11 | 「質問はありませんか。」 |
| 12 | 「今日のめあてをもとに、学習をふりかえります。ふりかえりをノートに書きましょう。」 |
| | （後 略） |

第8章 複式学級の指導と評価

学習評価には、児童の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能があり、学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すこと、個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善すること等ができます。これが、いわゆる「指導と評価の一体化」です。

そして、学習指導と学習評価のPDCAサイクルを、日常の授業、単元等の指導、学校における教育活動全体等の様々な段階で繰り返しながら展開することが必要です。

複式学級においても、以下を参考に、自校の指導計画に基づいて、単元（題材等）ごとの観点別の評価基準と、学習活動に即した具体的な評価基準を作成する必要があります。（「学習評価を生かした授業改善、授業づくりのためのハンドブック[小学校]」平成23年3月島根県教育委員会参照）

- 学習指導要領に示された各教科の目標、学年の目標及び内容
- 平成22年5月11日付け22文科初第1号「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」（通知）で示された、各教科の「評価の観点等及びその趣旨」並びに「学年別の評価の観点の趣旨」
- 平成22年11月国立教育政策研究所作成の「評価基準の作成のための参考資料」に示された「内容のまとめりとごとの評価基準に盛り込むべき事項及び評価基準の設定例」
- 設置者が作成する指導要録における各教科等の「評価の観点及びその趣旨」

複式学級は、少人数であるという特性をもっていますが、少人数だからこそ、1学級40人の多人数の学級では難しい、児童のノートやプリントへのコメント書きや、児童の発言や行動のとらえを充実させることが可能です。この複式学級の特性を評価に十分生かし、学習指導と学習評価のPDCAサイクルにより学習を展開することで、複式学級で学ぶ児童を伸ばしていくことができます。

また、複式学級においては、単式学級における評価の留意点に加え、以下の点に留意する必要があります。

1 「わたり」による指導における評価の留意点

学年別の「わたり」による指導をする場合は、間接指導の間、教師は児童の発言や行動の観察をすることが直接指導と比べて難しくなります。間接指導の間の児童の評価は、ノートやワークシートへの記述をもとにした評価などが有効である場合が多くなるでしょう。日ごろから、ノート指導を積極的に行い、児童が間接指導の間に取り組んだことや、話し合いによる見方や考え方の変容を書くようにさせ、記述をもとに評価し、次の授業に生かします。

2 同単元（題材）同内容同程度（A・B年度方式、2本案）指導における評価の留意点

同単元（題材）同内容同程度の指導をする場合は、同じ目標、評価基準のもとに授業が展開されることとなります。同程度で指導をする際は、特に複式学級が単式学級以上に個人差の大きな異年齢集団であることに留意する必要があります。下学年の児童は、単元によっては当該学年の目標及び内容ではなく、上学年の目標及び内容で学習することもあります。評価基準は同じであっても、一人一人の児童の取組を丁寧にとらえ、評価し、個に応じた指導の充実を図り、次時へ生かす必要があります。

3 同単元（題材）同内容異程度（完全 1 本案、くりかえし案）、同単元（題材）異内容（1 本案、くりかえし案）指導における評価の留意点

同単元（題材）同内容異程度や同単元（題材）異内容異程度により指導する場合は、単元（題材）又は内容が同じであっても、学年により程度（単元・題材の目標、本時の目標）が異なるため、学年ごとの評価規準を設定する必要があります。しかし、特に同内容の場合は両方の学年に共通する目標もあり、共通の目標と学年別の目標をもとに、それぞれ共通の目標に対する評価規準と、学年別の目標に対する評価規準を設定し、児童の学習状況を評価します。

第9章 複式学級における学習指導方法の工夫・改善

1 教師の構え

(1) 一人一人をよく理解すること

少人数であっても、一人一人の学習や生活の状況を理解することは、決して簡単なことではありません。学校内外の全ての時間的空間的諸条件が、一人一人をよく理解する材料となります。詳しく知るために、学習面や生活面等様々な角度から児童を観察し、よく理解することが大切です。

一にも二にも、児童を丁寧に見取ることが、複式学級の指導では全ての出発点です。

(2) 「じっと待つ」心のゆとりをもつこと

少し困っている姿を見かけたら、それが児童の成長の好機ととらえ、まず見守りましょう。すぐに手助けしたり、早く進めようと引っ張りすぎたりしないようにします。学習の主体は児童です。教師は時に後方から見守り、しゃべりすぎないように気を付け、児童の学びの状況を見極めようとする心のゆとりをもちましょう。

(3) 過保護にしないこと

教師の親切心が知らず知らずのうちに、児童のやる気をそいだり、依頼心を高めたりすることがあります。特に、極小規模の複式学級の場合に気を付けます。今まで単式学級にいた教師が急に人数の少ない複式学級の担任になると、人数が少ないのだからしっかりとらきかけようと思い、かえって児童の成長を阻害してしまうことがあります。

教師が指導することと、児童にまかせることを、はっきり分けることが大切です。あくまでも、児童の主体性、自主性、創造性を育むことに主眼をおいた教育活動に取り組むことが大切です。

(4) きびしさとやさしさを備えること

家庭的な雰囲気の中にも、教師は指導者であることを忘れないようにします。きびしさ、やさしさを合わせもった教師であることが大切です。

(5) しっかりほめること

限られた人間関係の中で、教師の関わりが児童に与える影響はたいへん大きなものです。ほめるべき時にはしっかりほめ、児童の自己肯定感を高めていくはたらきかけをしていくことが大切です。自己肯定感を高めていくことは、児童が中学校、高校、大学と規模の大きな学校や社会に出ても、ひるまずに、自信をもって学んでいくための原動力になります。

(6) 児童と一緒に活動すること

複式学級のように少人数の学級においては、教師が身をもって示したり、児童とともに活動したりすることが、児童の活動への意欲を高めたり活動の幅を広げたりすることにつながります。特に、低学年や学年初めは、児童とともに活動することが大切です。

(7) 教師間の協議・情報交換をすること

(1)～(6)は、複式学級指導にあたる教師の一般的な構えとして示しましたが、複式学級だけでなく、へき地・小規模の単式学級や、大規模校の単式学級にもあてはまります。

上記の教師の構えを参考に、学校や学級の実情に応じて、教師間でよく語り合うことが大切です。楽しく、有意義な「職員会議」「研修会」になるようにし、授業の進め方、児童への対応などを話し合ひましょう。また参考図書や「手引き」、実践事例等を読んだり、県内外の研究会等に出かけたりし、複式学

級の指導についての研修、研究を深めましょう。

2 ノートのとり方の指導の工夫

ノートをとることには様々な意味やねらいがありますが、複式学級の間接指導においては、教師が児童一人一人の考えをとらえるための特に重要な材料となります。ノートに書かれた児童の取組の様子や考え方のよさをもとに、次の授業を展開したり、取組のよさをほめ、価値づけ、学びの質を高めたりすることが大切です。児童の学習ノートを上手に活用する工夫をしましょう。

そこで、ノートには、日付、学習の目標（めあて・ねらい）、自分の考え、友達の考え、学習の目標（めあて・ねらい）をもとにした振り返り等を書くよう指導します。日付を書く位置や、学習の目標（めあて・ねらい）の書き方、色鉛筆の使い方、振り返りの書き方等を、学校全体で共通のものにし、学び方の積み重ねにより記録の仕方や考えの書き方が深まるようにします。

また、間違った解答や、不十分である考えもそのまま残し、大切にできるよう伝えます。このことにより、教師は間接指導の際の児童のつまずきがわかり、その後の指導に生かすことができます。児童にとっても自分の学習の課題を振り返ることができる好機となります。低学年のうちから、「間違い」を大切にすることを伝えていきます。

これらは、個別の指導をより有効に進めるための方法の1つで、各学校独自のノート使用の工夫が望まれます。

3 黒板やホワイトボードの使い方の工夫

(1) 児童が学習に見通しをもてる学習の目標（めあて、ねらい）を書くこと

学習を進行する際、黒板に書かれた内容によって、児童は学習の見通しをもつことができます。本時の学習に見通しをもつことは、主体的な学びとなる契機となります。学習が始まる前に、教師またはガイド役の児童が、黒板に本時の目標（めあて、ねらい）を書いておきます。

(2) 児童も板書をうまく書けるよう指導すること

間接指導の間の児童の発表の様子や話し合いの深まりをとらえるために、児童による板書はとても重要な材料となります。板書から読み取った児童のとらえをもとに、教師はさらに学びが深まるよう直接指導において声かけすることができるようになります。そのためにも、児童がうまく板書できるよう指導することが大切です。

チョークを使って書くことの困難さから時間がかかるといったマイナス面もありますが、多くの児童が黒板に書く活動を好み、積極的に取り組みます。教師は、チョークの握り方や書く文字の大きさ等を年度当初に確認しておきます。また、考えを出し合う際は、どの児童の考えかわかるように名前を明記することも大切です。その他にも、慣れてくれば発言した内容を全て書くのではなく、要約して書いたり、付け加えは黄、反対意見は赤で囲むといったように、色チョークをうまく使ってまとめたりするように伝えます。経験を重ねれば、ガイドが板書も同時に行えますが、初めは板書担当を決めて行う方法もあります。また、黒板に比べてホワイトボードは鉛筆と同じ感覚で書くことができるので、比較的速く書くことができます。小型のホワイトボードを各自が持って、うまく活用している事例もあります。

このように、黒板でもホワイトボードでも、板書になれて学習に有効に活用されるよう工夫することが大切です。

4 多様な考えを引き出す工夫

(1) 教師が児童役となる

極小規模の複式学級においては、学年別指導において1人で学習しなければならない場合もあります。そういった場合には、1人の考えでは限界があるので、教師が児童役となって考えを出すことも多様な考え方にふれさせる方法の1つです。しかし、当然、児童が考える時間を十分確保したうえでの教師の発言でなければなりません。また、内容によっては学級外の児童、校内、家庭、地域の方々の考えにふれる機会を設けるなどして、様々な意見や考えを求める姿勢を育てることも大切です。

(2) ノートに考えを書く時間を確保する

児童からできるだけ多くの見方や考え方を引き出せるよう、書いて考える時間を確保します。ノートに書かれた考えをもとに声かけし、さらに考えを引き出せるようにします。

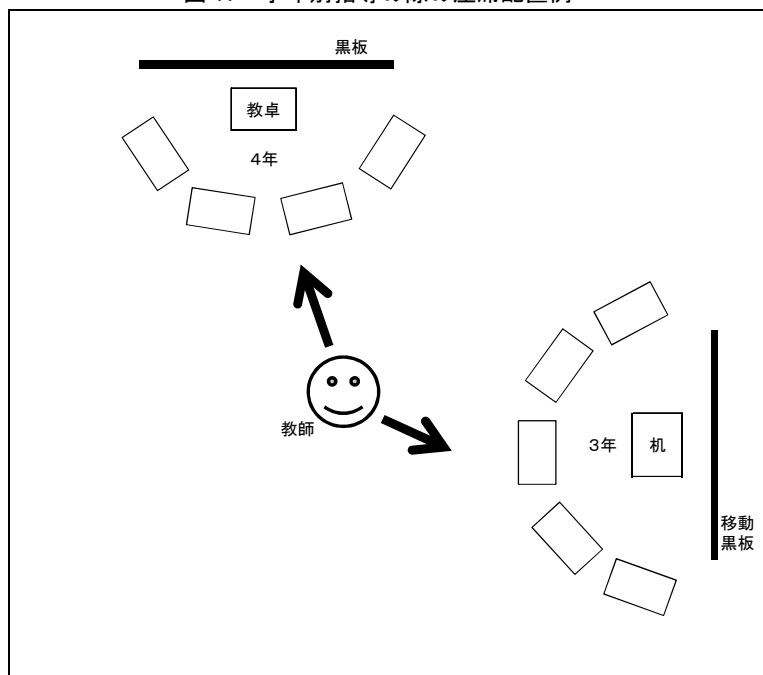
(3) 引き出したい考えを事前に教師が予想する

児童に多様な考えを出させたいと願うならば、何をもって多様な考えとするのか、教師は事前に予想しておく必要があります。児童にふれさせたい考えを教師が材料としてもっていなければ、児童に提案することはできません。また、考えを広げたり深めたりできる教材や発問の工夫が必要です。

5 効果的に学年別に学習する座席配置

図17は、同じ教室で2つの学年が別々に学習し、1人の教員がその指導にあたる場合の教室の座席配置の例です。

図17 学年別指導の際の座席配置例



一方の学年は移動黒板を用いて学習します。前面と側面を利用することによって、互いの学習が視界に入りづらく集中しやすい、ガイド役の声の干渉がさけられるというよさがあります。教師の立ち位置は、両学年の間とし、ガイド学習をする際は、児童の実態にもよりますが後ろから見守り、必要に応じて支援できるようにします。また、それぞれに教卓やそれに代わる机を用意しておく、教材の提示やガイド用の席として使用できます。

このような配置にした場合、前面や側面の掲示物はできるだけ少なくし、学習に集中できるようにします。ついたてがあれば、2つの学年の間に置くと効果的です。また、発表の仕方や学習の約束等を前面、側面の児童から見えやすいところに掲示すると、間接指導の場面で生かされます。座席配置についても学校全体でよく協議して、児童の学びを低・中・高でつなげるなど、教室環境を工夫することが大切です。

第 10 章 複式学級を有する学校の学校経営・学級経営

第 1 章から第 9 章までは、複式学級のエ育課程の編成や学習指導方法について説明してきました。

本章では、複式学級で学ぶ児童が、複式学級で学ぶよさを実感し、そのことを誇りに思い、主体的に学び、様々な資質・能力を身につけていけるような学校づくり、学級づくりをする際の留意点についてまとめています。

1 初めて複式学級を有する小学校に勤務する教職員の皆さんへ

複式学級を有する小学校に初めて勤務する教職員の皆さんの中には、単式学級が主流で標準的であると考え、複式学級は傍流で例外的であるといった意識をもっている人はいませんか。また、単式学級での教育経験をそのまま複式学級に持ち込もうとしたり、単式学級と同じように展開できないことで複式学級では十分な教育ができないという思い込みに縛られたりしていることはありませんか。もしそうだとしたら、その学校で学ぶ児童に十分な教育を行うことはできません。

まずは教師が、複式教育に対するマイナスイメージを払しょくする必要があります。

第 1 章で触れたように、複式学級には単式学級や大規模校とは異なるよさや課題があり、それを教師がしっかり認識して指導にあたれば、複式学級は、単式学級での学びを上回る教育効果が期待できます。逆に、教師が、複式学級であることを悲観したり、単式学級に及ばないと思い込んだりして指導にあたれば、教育効果を十分にあげることができないでしょう。「単式学級だったら・・・。」と教師が複式学級であるという現実を日々後ろ向きに捉えて児童の指導にあたるとすれば、その指導を受ける児童は自信をもって学ぶことができないでしょうし、自分たちの学校や地域に誇りをもつことさえ到底できなくなるでしょう。

複式学級指導に熱心に取り組んでいる先進校を訪問し、授業を参観すると、教師の指示による受け身の学習ではなく児童自身が進んで自分たちで授業を進めている姿に驚かされます。そして、授業協議の場では、授業者をはじめ教職員の皆さんがいかに児童の主体的な学びを実現するために努力しているか、また、複式学級指導にやりがいをもって教育にあたっているのかが伝わってきます。先生方からは「複式学級指導は本当におもしろいんですよ。確かに大変ですけどね。」といった声が聞かれます。さらに、保護者の方からは「授業公開日に、うちの子らが自分たちで授業を進めているのを見ると我が子ながらすごいなあと思うんですよ。」といった声が聞かれます。教職員がそのよさを実感し、課題を認識して指導にあたれば、複式学級ではとても質の高い教育を実現できるのです。

第 1 章で説明したように、「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」により、日本には、単式学級と複式学級があります。私たち教師は、担当する学級が単式学級であろうと複式学級であろうと、大人数の 35 人学級であろうと数名の極小規模の学級であろうと、教育のプロとして、目の前の児童に対し、今置かれている状況において最善の教育を提供する責務があります。35 人の単式学級を担任している教員は、日々、1 時間の授業の中で 35 人全員が目標を達成できるようにと様々な指導の工夫をしたり、提出物の確認やテストの採点等で方法を工夫したりするでしょう。このように 35 人の大規模学級には 35 人の児童を指導する教師としての専門性があるのと同様に、複式学級には複式学級を指導する教師としての専門性があるのです。複式学級を有する小学校に赴任したならば、日々の研鑽を通じ、複式学級指導の専門性を高めていく必要があります。第 9 章までに説明されている複式学級指導の留意点を十分理解するとともに実践に生かして、教育のプロとしての誇りと自覚をもって児

童の指導にあたるよう努力しましょう。

2 管理職のリーダーシップのもと学校全体で取り組む

学級編制や規模に関わらず、どのような小学校においても、管理職のリーダーシップのもと学校経営がなされていますが、特に、複式学級を有する小学校において必要で特有害な配慮事項について検討してみしましょう。

(1) 管理職が複式学級指導のよさと課題を理解して教育課程を編成する

まず、何よりも大切なことは、管理職である校長及び教頭が、複式学級のよさに目を向けることが大切です。

第5章で述べた「島根県の類型別の実施状況」の表にもあるように、島根県では算数においてほぼ全ての学級で学年別指導の指導類型が採用されています。学校によっては「わたり」による学年別指導に不慣れな担任教師の困り感を解消しようと、専科教員や教頭がどちらか一方の学年を受け持ち、単式と同様に指導しているという学校もあるようです。様々な状況があるため一概には言えませんが、このことが、間接指導により主体的に学ぶ場を児童から奪ってしまう面があることも考慮しておく必要があります。

もちろん、経験の少ない教員がいきなり「わたり」による学年別指導をすることは難しい場合もあるかもしれません。そういった状況で学ぶ児童の学力の定着面を心配する向きもあるでしょう。しかし、少人数と一緒に学び合い異学年の存在を生かした学年別指導をさせた教育課程を編成してばかりしていれば、いつまでも学年別指導を理解し、指導する力をもつことはできません。複式学級指導の経験が浅い教員に対するフォローを学校全体ですることが、その教員だけでなく児童を育てることにもつながるのです。安易に2人の教員で別々に指導する教育課程を実施するのではなく、1人の教員が2つの学年を学年別に指導する教育課程を編成することを検討しましょう。

(2) 年度当初には複式学級指導の有効性と留意点について教職員が共通理解をもつ

校長は、年度初めに複式学級のよさを生かした学校経営について全教職員に説明したり、協議したりする場を設けたりすることが大切です。附属学校に複式学級を有する小学校をもたない大学も多く、教員の中には複式学級指導について実習等を経ないままに教壇に立っている場合が多いようです。また、教員として採用された後も、希望をすれば研修の機会がありますが、研修が必須ではないのが現状です。そういった教職員に対し、校長としては、始業式を迎える前に複式学級のよさや課題、複式学級を有する小学校に勤める教職員としての心構え等を理解しあう機会をもつ必要があります。全ての教職員が、目指す児童像を同じくし、同じ方向を向いて指導にあたることは、単式学級、複式学級に関わらず、教育目標を達成するうえでとても大切です。小規模校としてのよさを生かして、大規模校ではできないほどの教職員間の意思の疎通を密接に図っていきましょう。

(3) 移行期には5年先、10年先を見通して教育課程を編成する

第2章「複式学級指導の現状と課題」でふれたように、島根県では近年、少子化による児童減少に伴い、単式学級から複式学級に移行したり、複式学級から極小複式学級を経てさらに欠学年が生じ単式学級に移行したりするといった、単複を繰り返す学級をもつ学校が多くあります。このように単複を繰り返す学校においては、教科書無償給与の関係などを含め、単式学級の時には複式学級の特例が認められ

ないことから、必然的に学年別指導を選択する必要がある場合があります。単複を数年繰り返し、その後は安定的に複式学級になる学校もあれば、いったん複式学級になっても児童数が安定せず、欠学年が生じたり単式学級へと移行したりする学校もあり、それぞれの学校によって状況は様々です。

そこで校長は、今後の児童数をふまえ、学級編制の変化を見通した教育課程編成の準備を始める必要があります。教育課程の編成は、その年だけとか、1～2年先といった短いスパンではなく、5年先、10年先を見通すことが求められます。小学校に入学してから卒業するまでは6年間あるわけですから、入学した1年生が小学校6年間でどのような教育課程を経て卒業するのか、説明できる必要があります。

複式学級になる場合は、どのような指導類型をとっていくかということについても校長は教職員とともに決定しなければなりません。例えば、国語を学年別で指導するのか、A・B年度方式で指導するのかといったことは、教務主任や複式学級の担任一人に任されるようなことではなく、校長がリーダーシップをもってそれぞれの指導類型の長所短所を十分に理解し、数年先を見越して決定するようにします。

特に、児童数の増減が続く移行期にある学校においては教育課程編成や指導類型の検討を迫られることになりますが、年度が変わるごとに教育課程編成の方針が変わると、児童や保護者は戸惑うことになりますし、一貫性のない教育課程となります。児童の学びの連続性を考慮した教育課程の編成を心掛ける必要があります。

(4) 単式学級から複式学級への移行期の指導や学校経営で大切にしたいこと

① 複式学級になる数年前から見通しをもって、児童育成の方針の転換を図る

複式学級になり学年別指導を行う場合には間接指導があり、児童が自分たちだけで授業を進める時間が生じます。複式学級に移行する前に単式学級の時から、教師の指示だけではなく例えばガイドにより児童が自分たちで進める授業スタイルで学習する経験を積むことにより、複式学級になった際のとまどいが軽減できると考えられますし、教師にとっても、間接指導の際の支援等を研究する機会になります。また、複式学級指導で一番難しいのが、つい手や口を出してしまい児童の主体的に取り組もうとする意欲をそいでしまうことです。もちろん必要なときには教師が支援しなければなりません、児童にまかせ待つという視点からの授業改善をこの期間に意識し、実践していくことが大切です。児童の主体的な学習を検討・工夫するよい機会としたいものです。

このような対応は、複式学級に移行する学級だけでなく、1学級でも複式学級になる予定ならば、その学校の他の単式学級でも同じように児童が主体的に学習を進める授業スタイルに変えていくと効果的です。教職員全員で間接指導のあり方について研究を深めることにもなります。

② 初めて複式学級を担任する教員、初めて複式学級になった学級を担任する教員への支援

初めて複式学級の担任となった場合、複式学級特有の学年別指導に最もとまどいを抱くでしょう。また、教員だけでなく、児童も新しい学び方にとまどうことと思います。

そのような場合の初期段階において、教頭や専科教員などによる効果的な支援をする方法があります。様々な方法があると考えられますが、効果的な方法の1つとして、学年別指導をする授業をT2が支援する方法があります。慣れないうちは、1人で2学年を指導すると、一方の学年が何をしてよいかわからない状況になったり、個への支援が十分でない状況になったりすることが生じます。そこでT2の教員は、両学年を俯瞰しながら見守り、例えば困っているガイド役の児童を支援する担当をします。そして、少しずつT2の出番を減らし、最後にはT1の教員1人で学年別指導ができるよう移行していき

ます。支援の際は、あくまで授業を進めるのはT 1であることを忘れないようにします。そして、児童にも、目標は自分たちで授業を進められるようになることで、できるだけT 2の教員には頼らないで進められるようにすることが大切であることを校内で共通理解する必要もあります。

複式教育研修に希望して参加する教員の多くは、初めて複式学級を担当することになった方です。しかも、学校では、自分の学級以外は単式学級というケースもあります。そういった先生方から多く聞かれるのは、自分だけが複式学級で、なかなか他の教員と課題を共有できず孤独を感じるといった感想です。特定の教員だけでなく、校内の全教職員がT 2として授業にかかわることで、皆で授業者と課題を共有しながら学校全体で支援していくことが大切です。

また、初めて複式学級を担当する教員の学級と同様に、たとえ複式学級指導の経験がある担任が授業する場合においても、単式学級から初めて複式学級になった学級の場合は、児童が学習スタイルにとまどうことが予想されます。そういった児童の支援のために、年度当初は慣れるまでT 2が支援をすると効果的です。

(5) 保護者や地域の方々へ複式学級指導について情報を発信する

教職員が同じ方向を向いて指導にあたることと同様に、保護者や地域の方々へ複式学級指導のよさを共有することが大切です。保護者や地域の方々が、学校の複式学級のよさに目を向けた取組を知れば、家庭や地域で児童の主体的な学びの姿が認められ、相乗効果により児童の学びはさらに伸びていきます。一方、学校の複式学級指導が不十分であれば、保護者の方は学校の教育へ不安感や不信感を抱くことにつながりかねません。

単式学級編制だった学校に初めて複式学級ができる際、その事実を保護者に伝えるタイミングは、当該年度当初、1年前、2年前と様々な時期が考えられますが、初めに伝えることができるのは、対象となる児童が入学した時でしょう。児童が入学する時には、その児童が卒業する時の児童数は推定できる状況にあります。例えば小学校3年生で複式学級になることが推測されたならば、入学時の説明会において、その事実を伝えておくことが望まれます。加えて、複式学級指導のよさと課題について、あるいはそれまでの学校の準備体制について伝えていくことが、保護者の方々の安心につながります。

地域の方々への発信も大切です。少子化による児童減少は、学校だけでなく地域にとっても大きな課題です。児童数の減少を受け、市町村によっては統廃合が進んでいるところもあります。時には保護者や地域の方々から複式学級指導の是非について問われることもあるかもしれません。その際に、私たちは教育のプロとして、胸を張って、複式学級、単式学級それぞれによさと課題があり、いずれの学級編制であってもそれぞれのよさを生かした最善の教育をしているのだということを、説明できなければなりません。

また、もともと複式学級を有する小学校の場合も、学校便りや学級便り等で機を捉えて複式学級指導のよさや学校の取組について発信します。小学校1年生が入学する際は、前述の場合と同様に保護者に対し丁寧に説明する必要があります。

最後に、中学校への発信についてもふれます。学年別指導の様子を中学校の教職員に授業公開し、中学校区で主体的な学びのスタイルを共有し、中学校での学びにつなげていくことが大切です。

以上、保護者や地域の方々、中学校への説明についてふれてきましたが、小学校の教職員誰もが同じスタンスで説明できるようにすることが大切です。

(6) 複式教育に係る校内研修・校内研究

これまでも述べてきたように、複式学級指導は複式学級を担任する教員だけでなく、今後1学級でも複式学級になる学年があるならば、学校全体で研修を深める必要があります。複式学級になる数年前から、複式学級指導を核とした校内研修や校内研究を実施することでより研究が深まります。

特に、先進校への視察は効果的です。複式学級指導により、主体的に学ぶ児童の姿や複式学級であることを誇りに思い日々指導に取り組む教員の姿にふれることは、自分たちの目指す姿がイメージできることにつながります。1人よりも2人、可能ならば学校の教職員全員で出かけることで、複式学級指導のイメージを共有でき、その後の研究の推進につながられます。なお、他都道府県に出かける際は、学級編制や教員の加配等が本県とは異なる場合があることに留意しておく必要があります。

複式学級指導に係る研修や研究は、単式学級のそれ以上に教育課程の編成や学校経営に大きく関わってきます。研究主任だけではなく、管理職こそ積極的に研修や研究に関わっていくことが大切です。

(7) 複式学級を有する学校間の協力

学校内で課題を抱え込まず、複式学級を有する近隣の学校との協力体制をつくることも大切です。教育課程の編成や、授業協議の交流等で情報を共有していくことで、複式学級指導についての研修や研究を深めていくことができます。

国指定のへき地校の場合は、県へき地教育研究会や全国へき地教育研究連盟が開催する授業研修会等に参加する機会があります。理事会などもあつて校長同士の意見交換も行われやすい状況にあります。しかし、国指定のへき地校ではない学校は、他の学校との交流の機会が少なくなりやすいようです。情報不足などにより、教育課程の編成や教科書の無償給与事務等で課題が生じている状況もあります。より意識して他の学校との連携を密にし、情報交換をするとよいでしょう。

市郡教育研究会単位で各教科の年間指導計画等を共同で作成していたところもあったようです。年間指導計画だけでなく、同じ教科書で学ぶ学校同士が協力して学習ガイドを作成したり、共同で教材研究をして教材の精度をあげたりすれば、準備に係る負担を減らすことができます。

3 教科書無償給与に係る手続き

複式学級において特別な教育課程を編成している場合は、他学年の教科書を合わせて給与することができます。

しかし、単式学級にはこの特例は適用されません。

文部科学省通知「義務教育諸学校用教科書の無償給与事務について」の「別紙1 無償給与事務の適正な処理についての留意事項 3 学校」において、以下のように記述されています。

翌年度以降複式学級になることを見込んでの過剰な給与や、1つの学年のみで編制された学級に対して、複式学級のように他学年の教科書を合わせて給与するといったことは決して許されないこと。

単複を繰り返す学校が、翌年度複式学級になる学年に他学年の教科書を給与することはできません。移行期の学校においては特に留意する必要があります。今後、文部科学省教科書課から出される教科書無償給与に係る通知に毎年目を通し、複式学級への給与の変更点等がないか各校の担当者は確認しましょう。

また、特別支援学級に在籍する児童に、複式学級において特別な教育課程を編成する場合の特例は適用されません。よって、特別支援学級に在籍する児童には、上学年の教科書は無償給与されないことに留意する必要があります。

4 転出入児童に未学習が生じないために

(1) 複式学級から単式学級へ児童が転出する場合

複式学級の担任は、履修状況を書面にまとめ、転出先の学校（担任）へ伝えます。特に、同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）で指導していた場合は、2年間の履修状況をもれなくまとめます。そして、未学習の内容について、転出先の学校において補習等で対応し、児童に未学習が生じないようにする必要があることを必ず伝えましょう。また、複式学級の担任は、所属校の管理職に、履修状況等を伝えたことを報告することも必要です。

なお、児童の転出がわかった時点から、転出先の学校での学習に少しでも支障が出ないよう、できるだけ補習等で補充をする対策をとることが好ましいことは言うまでもないことです。

(2) 単式学級から複式学級へ児童が転入する場合

複式学級の担任は、転入前の学校から履修状況を確認します。特に同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）により指導している教科等については、履修状況と照らし合わせ、未学習が生じないように補習等で対応します。複式学級の担任は、補習の必要な内容について、所属校の管理職に報告します。担任一人に対応するのではなく、必要に応じて校内の教職員で連携し対応することも大切です。

第 11 章 各教科等における指導のポイント

2つの学年で編成され、少人数構成の複式学級においては、各教科等を指導する場合、様々な課題があります。そして、これらの課題は学級により様相が異なり、一般論だけで解決することは困難です。そのため、教師が一人一人の児童に配慮した指導方法の工夫改善をすることによって、はじめて効果的な学習指導を展開することができます。

参考までに、学習形態、学習過程、教材等、授業について創意工夫を図るうえでのポイントを以下にあげます。その他、巻末にまとめてある参考資料等を十分活用し、複式学級のより良い授業を創造しましょう。

1 複式学級における国語科指導のポイント

- 国語の場合は、算数と同様に、漢字や文法など段階を踏んで系統的に取り組む必要のある要素が多いので、異単元（学年別指導）で指導することにより、基礎的な技能の定着を図るという面で良さがでてきます。一方、指導計画の作成、教材研究等で教師の負担が増えたり、直接指導と間接指導の組み合わせが必要となったりするといった課題もあります。
- 同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）で指導計画を立てる場合は、使用する教材の準備や指導方法が一元的になり教師の負担が軽減される、指導の過程においても学級にまとまった学習の雰囲気を得られ活動も活発になる、という良さがあります。一方、国語の能力を系統的に伸ばしにくい場合があるので、単式学級での指導と同一に考えず、児童の年齢差や経験差に配慮していく必要があります。
- 同単元異内容による指導計画では、上学年、下学年の教科書の教材を、それぞれ、詩、説明文、物語文、作文等のジャンルに分け、同じジャンルを組み合わせ一つ一つの単元を構成します。この方法では、学年ごとに異なった教材を扱いながら、両学年に共通の目標と、それぞれの教材に即した学年別の目標との2つを設定します。教材が異なるために両学年の学習活動が全く別々になると同一単元としてまとめた意味が薄くなることがあるので注意する必要があります。
- 国語の学習指導計画を考える場合、同単元がよいか異単元がよいかが論議されることがあります。取り上げる学習内容や学級（学校）の実態等を考え、全ての学習内容をそのいずれか一方にあてはめるより、単元によって異なる指導計画を立てるということも考えられます。
- 第1学年の児童が平仮名を習得するまでの入門期の2～4か月は、第1学年、第2学年別々の単元で学習することで学習の効率が高められると考えられ実践されています。しかし、この場合でも機をとらえて、できるだけ共通のねらいを多くもたせることで効果的な学習が展開できます。

2 複式学級における社会科指導のポイント

- 複式学級において、第3・4学年の社会科の教材研究を行う際、教科書では事例として市街地や都市部の社会事象が多く取り上げられていることを踏まえたうえで、教材研究をすすめる必要があります。
- 異単元（学年別指導）で指導計画をたてる場合は、見学、調査等を行おうとする場合の制約を受けるので単調な学習活動に流れやすいといった課題がありますが、学校周辺から、市町村、県、日本全国へといった空間の広がり等、学年の系統性を大切にした展開が可能となります。
- 同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）で指導計画をたてる場合は、学級にまとまった学習

の雰囲気を得られ、活動も活発となる利点がありますが、児童の経験や社会認識の差についていかに調整を図るかが課題としてあげられます。教科書資料の使用、作業の分担等をはじめ、学年の発達段階に応じて十分に配慮されなければ効果的な学習にはなり得ません。

3 複式学級における算数科指導のポイント

- 算数科では、以前から、異単元（学年別指導）により指導計画をたてている学校が多くあります。算数科の場合、系統性が重視されるので、同単元同内容同程度（A・B年度方式、2 本案）や、同単元異内容（1 本案、くりかえし案）で年間指導計画を作成することは難しくなります。しかし、部分的に両学年の内容が共通する単元において、同単元異内容（1 本案、くりかえし案）の指導計画を取り入れていくことは可能です。
- 異単元（学年別指導）指導においては、間接指導の時間における学習内容・方法を検討し、より効果的な学習となるようにします。算数科においては、間接指導の時間に課せられる学習課題はドリル学習が多く、場合によっては、本時の学習の目標とつながらない内容であることもあるようです。ドリル学習も必要ですが、ドリル学習だけが間接指導の内容ではありません。話し合いなどの学習を含め、指導過程を工夫することが大切です。
- 異単元（学年別指導）においては、2つの学年をわたらなければならないという教師の意識から、教師が一方的に説明を行い、児童に十分考えさせる時間を確保していない授業になるケースも見られます。その場合は、教師の言葉をできるだけ精選して、児童が考え表現する時間をつくりましょう。

4 複式学級における理科指導のポイント

- 理科は目標が学年別に示されており、異単元（学年別指導）においては、内容の系統性と児童の発達段階を考慮して指導が展開できるという利点がありますが、指導計画の作成、教材研究等で教師の負担が増加したり、実験や観察においても間接指導が必要な場面があることから安全面での配慮が必要となったりします。
- 同単元同内容同程度（A・B年度方式、2 本案）においては、理科は、観察や実験が学習活動の中心となることから、集中的に教材の研究をすることができ準備も容易になります。また、両学年の児童が互いに協力して、考えを深められるという良さがあります。一方、他教科と同様に、学年差、個人差の大きい学習集団であるという実態を十分認識して、能力差に着目した授業展開をしなければなりません。また、理科では、自然を認識していく段階や内容の順序性等、教材の系統性を見極めた指導が特に必要となります。
- 同単元異内容（1 本案、くりかえし案）は、昭和 43 年度から昭和 54 年度にかけて発刊されていた複式学級用の理科教科書で採用されていた年間指導計画で、その間、島根県の複式学級をもつ学校の多くがこの教科書を採用し、学習指導に活用していました。同じ領域の学習について程度を変えて学習するもので、系統的な学習が比較的無理なくでき、技能的なものについてはくりかえして徹底を図ることができるという利点があります。一方、異単元（学年別指導）と同様に、教師の負担が増加したり、同時に異なる実験を行う場合もあり安全面への配慮も必要となったりします。

5 複式学級における生活科指導のポイント

- 複式学級における生活科の指導計画を作成するにあたって、異単元（学年別指導）、同単元同内容（A・B年度方式、2本案）、同単元異内容（1本案）のいずれの指導類型が適切かは一概に言えません。学校や児童の実態に応じて弾力的に内容を取り扱う必要があるでしょう。
- 異単元（学年別指導）では、学年初めの経験差の大きい時期には、学年差に配慮して展開することができるという利点があります。また、学年末においては、第1学年は入学してからの1年をふりかえって、新1年生を迎える内容を、第2学年は生まれてから現在までの自分の成長を確かめる内容を、学年別に指導をすることができます。異単元の場合も、合同での発表会を設けるなど、学級集団を生かした指導計画となるよう配慮します。
- 同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）においては、活動のまとまりをA年度とB年度で偏りのないようバランスよく配列する必要があります。また、同単元同内容同程度による年間指導計画であった場合も、第1学年の入門期や年度末の単元は、くりかえしによる単元または学年別指導による単元にする方法もあるでしょう。
- 同単元異内容（1本案、くりかえし案）において毎年飼育栽培活動を行う際には、例えば、飼育については対象にはたらきかけて遊べるものを第1学年で扱い、工夫して育てることができるものを第2学年で扱う、また、栽培については草花を第1学年で扱い、野菜を第2学年で扱うようにすることもできます。

6 複式学級における音楽科指導のポイント

- 異題材（学年別指導）での指導は、1つの教室で学習する児童に、異なる2つの音楽（教材）を同時に提示すると音が重なるため、音楽科では異題材異内容での指導は難しい面があります。
- 同題材同内容同程度（A・B年度方式、2本案）の指導においては、同題材による指導と言っても、両学年の経験差に配慮した指導が必要となります。複式学級であることの利点を生かし、上学年の歌や楽器の演奏を下学年に聴かせ、音楽への関心を高めさせるといった工夫もできるでしょう。
- 同題材同内容異程度（完全1本案、くりかえし案）の指導においては、学習を発展的に行うことにより音楽に対する感性が徐々に身に付いていくので、毎年同じ題材を設定する際も、それぞれの学年で、学習が積み重ねられるよう、指導する内容や扱う教材を検討する必要があります。

7 複式学級における図画工作科指導のポイント

- 異題材（学年別指導）による指導は、指導計画の作成、教材研究等で教師の負担が大きいことや、図画工作科の場合は、単に題材がそのまま当該学年の学習内容を表しているとはいえないことから、異題材による指導よりも、同題材による指導の方が多く行われているようです。しかし、第1学年の入門期や、第6学年の卒業期においては、異題材で扱われることもあります。彫刻刀などを使用する場合は、安全面での配慮が必要です。
- 同題材同内容同程度（A・B年度方式、2本案）による指導では、学年の差を考え、同じ題材・目標でも学年差や個人差に応じて教師の支援に変化をもたせて指導する必要があります。
- 同題材同内容異程度（完全1本案、くりかえし案）による指導では、同じ題材、例えばお話の絵を描く場合は、両学年で異なる目標を設定する等、造形的な能力や態度を児童の発達段階に応じて伸ばすようにします。

8 複式学級における家庭科指導のポイント

- 同題材異内容の指導（学年別指導）の指導では、「B 日常生活の食事と調理の基礎」及び「C 快適な衣服と住まい」において、第5学年と第6学年を同時展開すると、安全・衛生面での配慮がしやすくなります。
- 同題材同内容同程度（A・B年度方式、2本案）の指導では、知識・技能の系統性への配慮が必要です。すべての内容を同題材同内容同程度（A・B年度方式、2本案）で指導するのではなく、題材によっては、同題材同内容異程度（完全1本案、くりかえし案）で指導することも考えられます。
- 同題材同内容異程度（完全1本案、くりかえし案）の指導では、第5学年と第6学年で異なる程度の目標を設定します。既習である第6学年が第5学年に適宜、アドバイスするなど、上下学年が1つの学級で学ぶ良さを生かすことが期待できます。

9 複式学級における体育科指導のポイント

- 第5学年、第6学年の保健の内容については、内容の系統性があるものもあるので、同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）で年間指導計画を作成する場合は、領域ごとのまとまりを重視して単元を構成することが大切です。
- 体育科の場合は、単に領域・単元がそのまま当該学年の学習内容を表しているとはいえないことから、異単元による指導よりも同単元同内容同程度、同単元同内容異程度による指導の方が多く行われています。
- 同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）の場合、低学年、高学年と比較して、中学年において運動の学習における学年差が大きいと言われています。また、学年の違いを超えた個人差もかなり見られます。したがって、教師は運動の種別に応じて、学年差を特に重視すべき場合と、学年を超えた能力差を重視すべき場合の両方を考える必要があります。
- 同単元同内容異程度（完全1本案、くりかえし案）で、中学年、高学年の合同学習を行う場合は、中学年、高学年の両方に共通の目標と、別の目標との2つを設定する必要があります。複式学級の良さを生かし、上学年の児童がリーダーとして活躍する場を設定すると、上学年の主体性を伸ばしたり、初めて学習する下学年の活動をより活発にしたりすることができます。

10 複式学級における道徳（道徳の時間）指導のポイント

- 複式学級においては、下学年児童が、上学年児童の前でも自分の考えが自由に発言できるような環境作りを日常的に心がけます。下学年児童の素朴な「どうして?」「おかしい」「何か変だ」などの意見のつぶやきが、目標に迫るうえで有効な場合があります。上下学年の区別なく話し合える学級づくりが大切です。
- 複式学級では、ねらいとする価値について学年差の設定が難しいので、学年別指導ではなく、同じねらいを同じ資料を用いて学習している学校が多いようです。指導する際には、下学年に対して資料の漢字の読みや言葉の意味の理解といった面で配慮する必要があります。
- 学年差を考慮し、特に、視覚や聴覚に訴える変化のある資料を用意する必要があります。

11 複式学級における外国語活動指導のポイント

- 外国語活動では、コミュニケーションや、体験的な理解を大切にしていることから、異単元（学年別指導）よりも、同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）で行うことにより、効果的に学習が展開されるでしょう。
- 同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）においても、第5学年の入門期においては、A・B年度に関わらず、毎年同内容の単元を設定し、外国語を初めて学習する第5学年の児童に配慮します。その際、児童に身近で基本的な表現を使いながら、外国語に慣れ親しむ活動や児童の日常生活や学校生活にかかわる活動を中心に、友達とのかかわりを大切にしたコミュニケーション活動を行うようにします。

12 複式学級における総合的な学習の時間指導のポイント

- 総合的な学習の時間では、学級内でのグループや学級の枠を超えた学習などの多様な学習形態をとったり、地域の人々の協力を得つつ全教師が一体となって指導にあたるなどの指導体制とったりするなど工夫します。
- 総合的な学習の時間で育てようとする資質や能力及び態度の設定においては、学年段階によって違いが出てきます。設定にあたっては、第3・4学年、第5・6学年と、2学年をひとまとまりとした2段階による設定が実践事例としても多く、現実的な示し方です。

13 複式学級における特別活動指導のポイント

- 複数の学年で構成されていることを良さとして生かし、上学年が下学年をリードしていくのだという意識を大切にし、支えていくような言葉かけをします。
- 学級会活動においては、下学年児童が上学年児童の前でも自分の考えが自由に発言できるような環境作りを日常的に心がけ、学級をよりよくするための話し合いができるようにします。

第 12 章 各教科の年間指導計画例

はじめに

本章では、国語科、社会科、算数科、理科、生活科、音楽科、図画工作科、家庭科、体育科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動の 13 の教科等について、年間指導計画作成の際の留意点や指導にあたっての配慮事項を紹介しています。

平成 26 年 3 月発行版の「複式学級指導の手引き」には、島根県でこれまで行われることの少なかった指導類型による指導を行う場合の年間指導計画例を特に取りあげ紹介していましたが、本手引きではこれまで島根県でも数十年にわたって実践が重ねられてきた同単元同内容同程度（A・B 年度方式、2 本案）の年間指導計画等についても取りあげています。

本章で取り上げた指導類型や年間指導計画例については、あくまでも、各校で各教科等の年間指導計画を作成するにあたっての参考資料です。それぞれの小学校で、児童の実態や、数年先を見通した学級編制の変動の状況等を考慮したうえで、教育課程を編成してください。

1 国語科

(同単元異内容、異単元、折衷案：同単元異内容・異単元)

1 同単元異内容、異単元による年間指導計画作成の際の留意点

学年別指導を行う際に大切にしたいことは、国語科の目標を達成するために、児童に付けたい力を明確にした指導を行うことです。そのためには学習指導要領にある指導事項を把握して的確に単元の指導計画に盛り込むことが重要で、どの単元でどの指導事項を指導するのかを明らかにした年間指導計画の作成が必要です。

国語科の複式教育の学年別指導において主な学習指導の類型は、いわゆる同単元異内容※¹、異単元（学年別指導）があります。

月	指導事項	読解への関心・態度		読す力・聞く能力			書く能力			その他の留意点
		話す・聞く	読む	読む	聞く	話す	書く	書く	書く	
6	お気に入りの場面を説明しよう									
7	おもちゃの作り方を説明しよう									
8	よく見てくわしく書いて知らせよう									
9	書籍の中から大さなお話を選ぼう									
10	自分の宝物を紹介しよう									
11	夏休みをふり返ってお話をしよう									

マトリックス型の指導計画

- ・同単元…領域（「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」）が両学年そろっていること。特に「読むこと」については、物語文と物語文、説明文と説明文が揃っていること。
 〈例〉第3学年（読むこと） 「もうどう犬の訓練」（説明文）
 第4学年（読むこと） 「くらしの中の和と洋」（説明文）
- ・異単元…領域及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が、両学年そろっていないこと。
 〈例〉第5学年（読むこと） 「大造じいさんとがん」（物語文）
 第6学年（書くこと） 「ふるさとの良さを文章で伝えよう」

※異内容…異教材のこと。
 同単元（例：読むこと）であっても各学年で扱う教材が異なること。
 ※異程度…学年によってねらいが異なること。

国語科における主な学習指導の類型として上記の2つを挙げましたが、そのどちらかが良いというわけではなく、単元や教材の性質、指導時期（例：1年生が平仮名を覚える入門期）によって上記を使い分けたり、同単元異内容及び異単元の折衷案で指導をしたりしながら、国語科の目標達成を図ります。

(1) 同単元異内容の特徴と留意点

- 〈例〉第3学年 「海をかつとばせ」（物語文）
 第4学年 「一つの花」（物語文）

○領域・内容の関連を生かして組み合わせた指導を行うことができます。

○単元の課題をつかむ部分やまとめる終末部分をはじめとして、両学年の学習の共通化を図る学習過程を組むことも可能となります。

- 〈例〉両学年共通の言語活動「おはなしリーフレットでお気に入りの物語を説明しよう」
 第5学年目標「登場人物の会話から、人物の心の変化を見つけよう。」
 第6学年目標「情景描写に注目して、人物の心の変化を見つけよう。」

※¹ 国語科の場合、同単元異内容であっても、必ずしも1本案でなく、学年別指導を行う場合もあるため、同単元異内容（1本案、くりかえし案）とは表示しません。

- 単元がずれ過ぎないようにするために、両学年の進度が同じになるように調節する必要があります。
- 同単元異内容であっても、学習過程で両学年の学習の共通化をせずに、異単元と同様の学年別の指導を行うこともできます。
- 間接指導時に、自分たちで学習が進められるように学びの方法や手順を身に付けさせておくことや、ワークシートの作成が必要です。

(2) 異単元(学年別指導)の特徴と留意点

〈例〉第5学年 「動物の体と気候」 (読むこと)

第6学年 「表現を工夫して書こう」 (書くこと)

- 単式学級の指導過程をとることが基本となります。
- 転出入する児童への配慮や漢字の学習、テストワークへの配慮が軽減されます。
- 異なる単元の教材研究や、異なる1単位時間の指導過程をとることが必要となり、直接指導や間接指導の組み合わせが複雑になります。
- 間接指導時に、自分たちで学習が進められるように学びの方法や手順を身に付けさせておくことや、ワークシートの作成等教材の工夫が必要です。

(3) 同単元異内容と異単元の折衷案

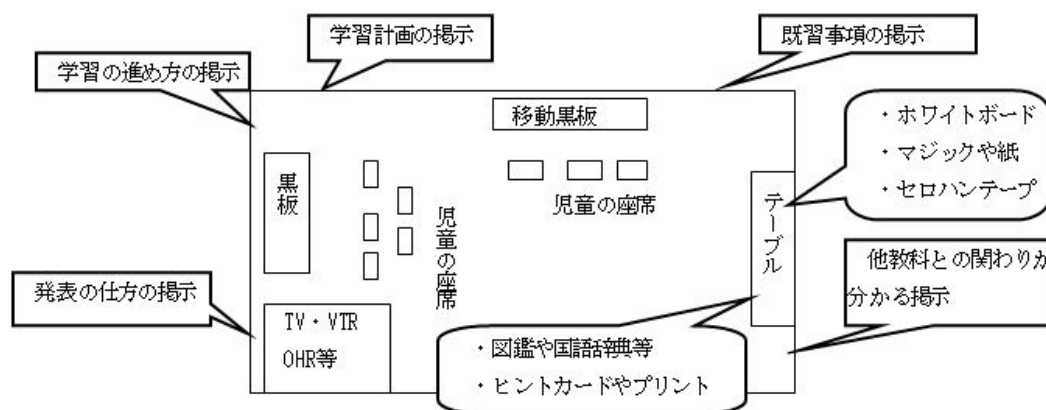
○上記(1)、(2)のいずれかで指導方法を固定するというだけでなく、例えば第1年生が平仮名を習得する入門期までは異単元で学習し、その後は同単元異内容で学習する指導形態に変えたりするなど、児童が学びを広げたり深めたりしながら国語科の目標を達成できるようにします。本稿では、この第1学年、第2学年の国語科指導計画例と留意点を後頁で示すことにしました。また、学習効果を生み出すために、現在多くの教科書会社で同単元異内容の単元配列になっていますが、単元によっては、意図的に異単元異内容に組み替える事例として、第5学年、第6学年の国語科指導計画例と留意点も後頁で示すこととしました。

2 指導にあたって

(1) 授業の前に

○【学習環境の整備】

国語科の指導においても学年別指導を効果的に行うためには、黒板（移動黒板、小黒板、ホワイトボード等）や座席の位置、壁面の利用、教具の準備等、教室内の学習環境を整えていくことが大切です。



○【学習の見通し】

学年別指導では間接指導の時間が多くなるため、児童だけで話し合いができ、ねらいが達成できるような授業展開を考えます。学習課題を質、量ともにしっかり吟味し、学習内容の精選、話題の焦点化を行い、学習課題やその時間の活動を黒板等に掲示するなどして、児童に見通しをもたせます。

(2) 授業の中で

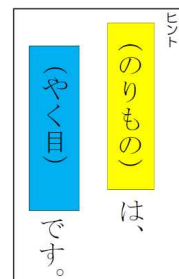
○【「ずらし」を入れるには】

その時間の授業で最も力を入れて考えを深めていきたいところで直接指導が行えるよう、「ずらし」による指導を行います。課題把握は直接指導で確実にを行う方がよいです。もう一方の学年への間接指導においては、例えば、音読活動を位置付けることができます。その際には、「一斉読み」「グループ読み」「ペア読み」「一人読み」「一文読み」「交互読み（男女別、ガイドと他の児童）」など音読活動にもバリエーションをもたせます。間接指導においても、児童の主体的な学習への取組となるよう配慮する必要があります。

○【間接指導時の支援】

課題追究の場面における間接指導では、間接指導時には子どもたち自身による学習の見通しを立てる活動を重視したり、「ヒントカード」を準備したり、「ガイド学習」、「ペア学習」等を必要に応じて設定したりして適切な支援をします。既習事項を生かしながら、課題に対する自分の考えをもつことができるようにワークシートを工夫し配付することも有効です。その際、児童一人一人の学習の過程を把握するために、ワークシートやノート等を活用した指導を合わせて行うとよいです。一人一人がどのように考えていったのか、最終的にどのような判断をしたのか、学習中にどんな疑問をもったのかなどが分かりやすく表現されていると、次の指導に生かすことができます。

※ヒントカード例
第1学年
「いろいろなふね」



説明に使われている基本的な文型をおさえるためのヒント

○【話し合い活動の充実】

少人数での話し合い活動が充実するためには、聞く側に聞き取る力をつけていくことも大切です。話し合い活動に教師が参加できるような学習過程の工夫を行い、少しずつ話し合える関係をつくりながら、根拠をもって聞いたり話したりできるようにします。時には、教師が児童になり代わって提案したり、多様な意見が出ない場合は、あえて児童になったつもりで、別の意見を出してみたりするなど、比較、検討あるいは意見の広がりがあるような展開を工夫します。

○【学習のまとめ・振り返り】

学習のまとめでは、全員で黒板を活用しながら、学習内容をまとめることも一つの方法です。自己評価だけでなく、相互の学習内容の伝え合いをしたり、異学年による相互評価を取り入れたりするとさらに効果的な振り返りとなります。

(3) 授業の後で

○【次時に生かす評価】

本時の目標、課題に対応した評価をしますが、この評価結果を次時の授業に生かすとともに、指導計画や授業展開の改善に生かすようにします。

○【家庭学習とつなぐ】

漢字練習や音読練習、日記、短文づくり等を家庭学習の課題として出すときには、児童の自主的な取組を大切にすると同時に、常に授業との関わりを意識させるなど学習意欲の向上に努めます。

○【学校図書館の活用】

教科書教材で学習したことを活用する読書を取り入れたり、調べ学習を充実させたりするなど学校図書館を活用した授業づくりをし、授業から豊かな読書活動へ広がっていくよう配慮します。

低学年国語科（同単元異内容）年間指導計画（例）

1 年			2 年			
	単元名・教材名	時数	単元名・教材名	時数		
4	みつけたよ	84	一 はっきりとした声で読もう	17	【ポイント①】入門期は異単元指導を行います。ただし、「話す・聞く」「書く」単元などでは両学年が互いに発表し合うなどの交流の場を設定することが望まれます。網掛けは交流可能な単元の一例です。	
	はきはきあいさつ		・としょかんへいこう			
	ほんがたくさん		□「お話カード」を書こう			
	・じをかこう		・かたかなで書くことば			
あいうえおのうた	二 書いてあることを正しく読もう					
5	あめですよ		□よく見て書こう	25		
	・ふたとぶた		□ことばで絵をつたえよう			
	みんなにつたえよう		・かん字の書き方に気をつけよう			
	・ねことねっこ		三 ばめんに気をつけて読もう			
6	・ことばあそび			20		
	あひるのあくび		□まよい犬をさがせ			
	ぶんをつくろう		・組みあわせたことばをつかおう			
	かいがら		四 せつめいの文をくらべて読もう			
7	・おばさんとおばあさん			29		
	「はへを」をつかってぶんをつくろう		□できるようになったよ			
	こえのゆうびんやさん					
	よんでねきいてね					
8	どうやってみをまもるのかな					
	・いしやといしや					
	こんなことしたよ					
	おおきなかぶ					
9	えにつきをかこう					
	ほんはともだち		・本は友だち			
	あるけあるけ／木		しを読もう			
	はなしたいなききたいな		□話したいな、とくいなこと			
10	おもいだしてかこう		□かんじたことを	23		
	かぞえうた		□「ありがとう」をつたえよう			
	かんじのはなし		□言いつたえられているお話をしろ			
	一 おはなしをたのしんでよう		一 人物のようすや気持ちに気をつけて読もう			
11	・かたかなをかこう		□絵を見てお話を作ろう	31		
	□わたしのはっけん		・声に出してみよう・主語とじゅつ語に気をつけよう			
	二 のりもののことをしらべよう		二 どうぶつのひみつをみんなでさがそう			
	□「すきなもののクイズ」をしよう		□聞き合おう、みんなのたからもの			
12	・目づけとよう目をおぼえよう		三 じゅんじょをかんがえてせつ明しよう	25		
	□じゅんじょよくかこう					
	□きいてつたえよう		四 むかし話を楽しんで読もう			
	三 いろいろなおはなしをよう		□おばあちゃんに聞いたよ			
13	□むかしばなしをたのしもう		五 分かりやすくせつ明しよう	22		
	□「じゃんけんやさん」をひらこう		・おくりがなに気をつけよう			
	・かたちのにているかん字		□考えたわけを書こう			
	□ことばあそびをしよう		六 虫について知ったことをもとに考えよう			
14	四 いろいろなやりかたをくらべてかんがえよう		□「思い出ブック」を作ろう	26		
	□たのしかったね、一年生		・はんたいのいみのことば			
	・まとめてよぶことば					
	五 おはなしのすきなところをはっぴようしよう		七 お話を紙しばいにしよう			

【ポイント③】両学年とも、児童が何のために何を学ぶのか実感できるよう、目的と方法を明確にしましょう。併せて学習の進め方の理解を図りましょう。

高学年国語科（折衷案：同単元異内容、異単元）年間指導計画（例）

5 年				6 年			
	単元名・教材名	時数		単元名・教材名	時数		
4	一 自分の思いが伝わるように声に出して読もう だいじょうぶ だいじょうぶ ・本に親しもう	4 読④	4	一 想像を豊かにして「語り」をしよう 風切るつばさ ・図書館へ行こう	4 読④	9	
	二 文章の構成を考えながら要旨を読み取ろう 動物の体と気候	5 読⑤		□表現をくふうして書こう	3 書③		
	□メモを使って題材をさがそう	3 書③		・熟語の構成を考えよう	2 伝国②		
5	・文の組み立てに気をつけよう	2 伝国②	15	二 自分の考えを明確にしながら読もう イースター島にはなぜ森林がないのか	5 読⑤	8	
	□ゲストティーチャーをすいせんしよう	3 話・聞③		□学校の良さを宣伝しよう	3 話・聞③		
12	四 動物と人間のかかわりをえがいた物語を読もう 大造じいさんとがん	7 読④ 書③	7	五 ふるさとの良さを文章で伝えよう ふるさとの良さをしょうかいしよう	9 書⑨	9	
1	五 活動したことを伝える文章を書こう 伝えよう、委員会活動	9 書⑨		四 戦争と人間の生き方をえがいた本を読み広げよう ヒロシマのうた	6 読④ 書②		19
	□古文に親しもう	3 読① 伝国②			□伝えよう、大切にしたい名言		
2	□わたしの「とっておきの一枚」	6 話・聞⑥	9	六 わたしたちの日本語について考えよう 豊かな日本語の使い手になろう ・雨のいろいろ ・数え方でみがく日本語	11 読⑥ 書⑤	11	
	六 メディアとわたしたちのかかわりについて考えよう テレビとの付き合い方	9 読⑤ 書④		七 未来に向かって 君たちに伝えたいこと／春に	4 読④		4
3	七 人間の生き方をえがいた伝記を読もう 手塚治虫	10 読⑤ 書⑤	10				

【解 説】

上表では、2 学年のいずれか一方において、教科書の配列によらない単元を網掛けで示しています。この単元の組み替えには、以下のような教師の意図が背景にあります。

4、5 月の網掛けの部分は、第 5 学年が、説明文「動物の体と気候」の読解を教師がきめ細やかに指導しながら進めていく一方で、第 6 学年は「表現をくふうして書こう」の学習において詩や生活文等を書く際に比喩等の技法を用いて文章を書くことを例文に従って自主的に習得することをねらっています。ここには、自主的な学習を進める第 6 学年児童の姿を、第 5 学年児童が見ることができるという効果も期待できます。

12、1 月は、第 6 学年が「ふるさとの良さをしょうかいしよう」の紹介文を書く学習と、物語文を読む学習を入れ替えることで、冬季休業中に「課題設定や取材」にじっくり取り組ませることをねらっています。また、このことで、第 5 学年は、文学教材の大作「大造じいさんとがん」を、第 6 学年は「ヒロシマのうた」の双方に教師がしっかりと関われるメリットも生まれます。このように、無目的に組み替えるのではなく、児童が自ら学ぶ力を身に付けることができるようにすることを第一義的に考え、指導計画を構成することが求められます。

このような教科書の単元の組み替えは、例年の実績を踏まえ、修正を加えながら学校内の共通認識に立って指導計画が作成されることが望ましいと言えるでしょう。

2 国語科

(折衷案：同単元同内容同程度・異単元)

国語科は、漢字とローマ字を除いて目標や内容が2学年でまとめて示されています。同単元同内容同程度の指導の場合には、同一教材を扱うので、教材・教具などの準備が軽減し、教材研究の充実が期待できます。児童にとって多様な読みの交流ができるので、多くの人数で共に学ぶ良さがあります。指導事項を同一にしながらも、学年差、個人差のある学習集団としてとらえ、能力差に着目した授業を展開します。

しかし、国語科では当該単元で付けたい力を明確にして系統的に指導しますので「3領域1事項の指導事項や指導に係る学習用語には系統性があること」「上学年の指導事項を基にして付けたい力や同程度の評価規準を設定すること」に留意する必要があります。

具体的には、後頁の年間指導計画（案）に示していますが、指導事項を系統的に計画的に指導できるように、単元によっては学年別指導をすることも考えられます。

1 折衷案：同単元同内容同程度、異単元による年間指導計画作成について

年間指導計画の作成にあたり、(1)単元を通して付けたい力の明確化(2)系統的な指導につながるマトリックス型年間単元重点一覧表の作成が大切です。

(1)単元を通して付けたい力の明確化

○「小学校学習指導要領解説国語編」には、3領域1事項「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の指導事項等が整理して系統的に示されています。単元を通して、どの指導事項を取り上げて指導するのか明らかにすることが、付けたい力を見極めることになります。

○付けたい力を身に付けるために最適な言語活動を選び、単元に適切に位置づけます。

(2)系統的な指導につながるマトリックス型年間単元重点一覧表の作成

マトリックス型年間単元重点一覧表（例）

	指導事項					言語活動例					指導事項					言語活動例				
	ア	イ	ウ	エ	オ	ア	イ	ウ	ア	イ	ウ	エ	オ	オ	ア	イ	ウ	エ	オ	オ
指導事項・言語活動例	め考え、収集したことを伝えること	な目標や意図を明確に伝えること	応じて通じる共通の話題を扱うこと	見話と手紙の意図を伝えること	画互いの話し合いの場を設けること	れ資料を聞き取りし、整理すること	を調べたことやまとめること	る物や人物を推薦すること	し意見や考えを整理すること	構自分の考えを明確に表現すること	い目的や意図を明確に表現すること	て引用した資料や図表などを区別して書くこと	り表現の効果を高めること	て書いたものを発表し、合うことを目指すこと	をや短歌、俳句、小説、詩などを書くこと	し自分の活動の成果を報告すること	書物や資料の価値を伝えること	書物や資料の価値を伝えること	書物や資料の価値を伝えること	書物や資料の価値を伝えること
教材名																				
大造じいさんとガン																				
漢字の広場																				
秋の夕暮れ																				
グラフや表を用いて書こう									○		○	◎							★	

- マトリックス型年間単元重点一覧表を活用すると、当該単元の重点を確定することになり、系統的な指導につながります。
- マトリックス型年間単元重点一覧表に指導事項に最適な「言語活動例」の欄を設けることで、各単元の言語活動を概観することができます。
- 単元の入れ替えなどした場合にも、指導に偏りがでないよう、年間を通して確認しながら修正することができます。

(3) 作成上の留意点

- 同一年度に一方の学年の教材が偏らないよう配慮して、A・B年度にほぼ均等に振り分け、その際には「小学校学習指導要領解説国語編」を基にして、各領域の指導時数に配慮して作成します。例えば各学年の「A話すこと・聞くこと」に関する指導については、意図的・計画的に指導する機会が得られるように第1・2学年においては年間35時間程度、第3・4学年では年間30時間程度、第5・6学年では25時間程度配当します。「B書くこと」についても第1・2学年では100時間程度、第3・4学年では85時間程度、第5・6学年では55時間程度を配当します。
- 低学年の1学期は第1学年が国語科学習の入門期であることから、学年別指導が考えられます。指導にあたり、学年別指導の年間指導計画例が参考になります。
- 漢字やローマ字については、小学校学習指導要領解説国語編「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に、学年別漢字配当表を基準に漢字を読み書きできるようにすることや第3学年でローマ字の履修をすることが示してあります。一方で、小学校学習指導要領第1章総則第2内容等の取扱いに関する共通的事項に「学校において2以上の学年の児童で編成する学級について特に必要のある場合には、各教科、道徳、外国語活動及び特別活動に目標に達成に支障のない範囲内で、各教科、道徳、外国語活動及び特別活動の目標及び内容について学年別の順序によらないことができる」とあることは先述（第4章）しました。漢字やローマ字については、同単元同内容同程度のA・B年度方式で国語科の目標の達成に支障がないかどうかを検討する必要があります。ローマ字指導については後頁の中学年国語科年間指導計画（案）に具体例を示しています。

2 折衷案：同単元同内容同程度、異単元の指導にあたって

- 学習指導が一斉学習の形態になる反面、学年差や個人差に応じたきめ細やかな個別指導の充実を図る必要があります。例えば、「B書くこと」の単元では、書く力の学年差や個人差に対応するために学習の手引きや個別に配慮したワークシートの作成などが必要となります。後頁の1・2年複式学級年間計画案に示すように学年別指導との折衷案も考えられます。
- 「C読むこと」では、指導事項や指導事項に係る学習用語の系統性を理解した上で、当該単元で付きたい力を明確にします。例えば、中学年で説明文教材を使って「要点」「段落相互の関係」などを指導する場合、当該単元を通して第4学年には「要点」「小見出し」の習熟を図りながら「段落相互の関係」について指導できます。しかし、第3学年には「要点」「小見出し」の理解を図り、更に「段落相互の関係」について指導することになります。このように下学年の学習内容が増えることや評価規準は上学年に沿った同程度の評価になる場合があることに留意します。下学年の負担を軽減したい場合は、後頁の中学年国語科同単元（折衷案：同単元同内容同程度、異単元）年間指導計画（案）高学年国語科（同単元同内容同程度、異単元）年間指導計画（案）に示しているように学年別指導も考えられます。
- 同単元同内容同程度指導においては、評価規準については異学年でも同じ評価規準になります。学年別に異なる評価規準は設定しません。学年差に配慮して授業をする必要がある場合は、学年別指導、あるいは同単元同内容異程度の年間指導計画を作成しましょう。

	A年度（単元名・教材名）	配当時数	B年度（単元名・教材名）	配当時数
1 学期	【第1学年 単元配列（例）】 ☐ みんなのせかい ☐ はきはき ☐ じをか ☐ あいう ☐ あめで ☐ ともだ ☐ とんこと ☐ ねことねっこ（伝）	4 2 4	【第2学年 単元配列（例）】 ☐ 風のゆうびんやさん（読） ☐ としょかんへいこう（読） ☐ かん字の書き方にきをつけよう（伝） ☐ こんなことがあったよ（話・聞） ☐ たんぽぽのみつを見つけよう（読） ☐ かた（伝）	10 1 3 4 12 3 5
ポイント① 学年別指導をすると、第2学年には間接指導の時間が多くなると考えられます。第2学年の網掛けの単元では、学習内容を第1学年に紹介しようという目的意識をもたせるとよいでしょう。 例えば、第2学年の「風のゆうびんやさん（読）」の学習では、ペープサートで音読発表会をする言語活動を設定したり、「こんなことがあったよ（話・聞）」の学習では、各教科の学習や学校行事などを紹介する言語活動を設定したりして指導計画を立てることが考えられます。1学期に学年別指導をする場合の単元配列については、学年別年間指導計画例（本書P57）が参考になります。				
2 学期	☐ 声やうごきであらわそう（2年読） 名前を見てちょうだい ☐ わたしのはっけん（1年書） ☐ よう日と日づけをおぼえよう	15 5	☐ おはなしをよもう（1年読） サラダでげんき ☐ 絵を見てお話を作ろう（2年書） ☐ かたかなをかこう（1年）	15 10 3 8 3 7
ポイント② 2学期「B書くこと」の網掛けの単元については、A・B年度に振り分けて例示しています。ただし、第1学年と第2学年の学年差による書く力を考慮して、学年別指導をすることも考えられます。学年別指導をした場合には、必ず年間指導計画に入れ替えた単元名や時数の変更などを明記しておき、次年度の年間指導計画の参考にしていきます。				
	☐ おもい出してかこう（1年書） ☐ 名人をしょうかいしよう（2年書） ☐ むかし話をしょうかいしよう（2年読）	5 12 17	☐ ことばあそびうたをつくろう（1年書） ☐ いろいろなおはなしをよもう（1年読）	12 18

	A年度（単元名・教材名）	配当時数	B年度（単元名・教材名）	配当時数
1 学 期	□音読しよう（4年読） こわれた千の楽器	7	□音読しよう（3年読） すいせんのラッパ	7
	□国語辞典や漢字辞典の使い方を知ろう（伝）	3	□国語辞典や漢字辞典の使い方を知ろう（伝）	3
ポイント③ 語彙を広げるために辞典を使って繰り返し学習する経験は大切です。そこで、網掛けに示すような単元を設定した指導が考えられます。上学年が下学年に使い方を教えたり、2年間で辞典の使い方の習熟を図ったりできます。また、A年度に国語辞典を扱い、B年度に漢字辞典を扱うなど、A・B年度に単元を振り分けた指導もできます。あるいは、教科書の単元の配列通りに、第3学年に国語辞典、第4学年に漢字辞典を扱って学年別指導をすることも考えられます。				
	□読んで、感そうをつたえ合おう 自然のかくし絵（3年読）		□説明のまとまりを見つけよう ヤドカリとイソギンチャク（4年読）	
ポイント④ 「C読むこと」を指導する時に、指導事項の系統性と学年差を考慮する必要があります。例えば、網掛けの単元で「要点」「小見出し」「段落相互の関係」などを指導する場合に、第4学年には既習事項であっても、第3学年にとっては全てが初めての学習内容となり、負担感をもつことがあります。評価規準は第4学年に基づいた同程度の評価となるため、両方の学年の児童が目的に応じて段落相互の関係を理解したり、事実と意見との関係をとらえて読んだりして学習ができるよう指導計画を立てる必要があります。 あるいは、学年差や個人差など学級の実態を踏まえ、学年別指導をすることも考えられます。				
2 学 期	□書き手のくふうを考えよう □ローマ字（伝）	8 3	広告と説明書を読みくらべよう □ローマ字（伝）	8 3
	□感想を伝え合おう		□読み比べよう	
ポイント⑤ 上記の網掛けの単元は、A・B年度の両方にローマ字の単元を設定した指導の例示です。このことにより、ローマ字の確実な習得が期待できます。 第3学年には直接指導の時間配分を多めに設定し、第4学年にはパソコンを使って言葉をローマ字入力するようなICTを活用した学習形態をとります。第4学年の教科書には、ローマ字の単元が配列されている場合もあります。				
	を調べよう くらしの中の和と洋 □世界の物語をしょうかいしよう	12	□同じ読み方 □読書会を開こう	

	A年度（単元名・教材名）	配当時数	B年度（単元名・教材名）	配当時数
1 学 期	☐ 朗読しよう（6年読） サボテンの花／生きる ☐ 一つの言葉から（5年書） ☐ 文章を読んで自分の考えを持とう （6年読） イースター島にはなぜ森林ないのか ☐ 音目と理由	5 3 6 6	☐ 音読しよう（5年読） だいじょうぶ だいじょうぶ ☐ ずい筆を書こう（6年書） ☐ 筆者の考えをまとめて伝え合おう （5年読）動物の体と気候 ☐ 意見と理由とのつながりを聞き取 る（6年話聞）	5 3 6 6 8
ポイント⑥ 「C読むこと」を指導するにあたり、指導事項の系統性と学年差を考慮する必要があります。例えば、網掛けの単元で「要旨」について指導する場合に、第6学年には既習事項であっても、第5学年にとっては初めての学習内容となります。「要旨」は、教科書では第6学年に位置付けられています。特に第5学年の児童が目的に応じて文章の内容を押さえて要旨をとらえ、自分の考えを明確にしながら学習ができるように支援しましょう。教科用図書の巻末に学習用語が系統的にまとめて記載されている場合もあり、授業で活用できます。 あるいは、この「C読むこと」の単元については、児童が学年に応じて系統的に学習できるよう学年別指導も考えられます。				
2 学 期	ポイント⑦ 3学期の第6学年の教科用図書には、国語科学習のまとめに関わる単元があります。下記の網掛けの単元などを扱う上では、学年別指導をすることが考えられます。 例えば、第5学年の「六年生におくる字をすいせんしよう（話聞）」では、第6学年に伝えたい気持ちにふさわしい漢字を選ぶことを話材にし、第6学年に漢字を発表するような言語活動が設定できます。第6学年の「六年間を振り返って書こう（書）」では、6年間の思い出を題材にし、作文に書いて文集にまとめて第5学年に伝える言語活動が設定できます。複式学級の良さを生かせる単元とも言えます。			
3 学 期	う		う	
	読）		読）	
	【第5学年 単元配列（例）】 ☐ 六年生におくる字をすいせんし よう（5年話聞） ☐ 朗読で発表しよう（5年読） 大造じいさんとがん	5 8	【第6学年 単元配列（例）】 ☐ 六年間を振り返って書こう （6年書） ☐ 未来に向かって（6年読） 君たちにつたえたいこと	9 4

3 社会科

(異単元)

1 異単元による年間指導計画作成の際の留意点

小学校社会科は、地域社会や我が国における人々の社会生活を広い視野からとらえ総合的に理解することを通して、公民的資質の基礎を養うことを究極的なねらいとしている教科です。学校や地域、児童の実態を十分に把握したうえで、へき地・小規模の複式学級の特性を生かした弾力的な年間指導計画を作成する必要があります。

(1) 地域の実態に即し、へき地の特性を生かした社会科学習

教師は小学校学習指導要領、小学校学習指導要領解説社会編、教科書、副読本、地域に関する資料等を研究し、地域の調査や地域の方からの聞き取りなどの地域の実態把握を行い、地域を素材とした教材開発に取り組みます。その際、前年度までの各学校における実践を踏まえ、単元の目標を達成するうえでより優れた教材となるよう努めます。特に第3学年、第4学年においては自分たちの住んでいる地域社会について学習することから、他校では得難い素材を積極的に教材化して年間指導計画に位置付けます。

(2) 観察や調査・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の充実

観察や調査・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動を重視し、社会科としてのねらいを明確にして指導計画に位置付けます。その際、地域教材を取り上げた学習が単なる地域社会の学習にとどまらず、各学年の目標に迫ることができるよう、取扱い方を工夫します。

校外で学習する場合は、校外での学習を重ねて2つの学年で一緒に出かけるような組合せ、重ねないようにして別々に出かけるような組合せなど、地域や学校の実態を踏まえて工夫します。学校図書館や公共図書館、コンピュータなどを活用して、様々な情報を集めることに重点を置く方法もあります。

＜一緒に出かける組合せ例＞

○第3学年「学校のまわり」と第4学年「火事からくらしを守る」、「事故や事件からくらしを守る」

○第3学年「市の様子」と第4学年「水はどこから」

※ 組合せて出かけた後、作成した地図や資料を用いて、互いの気づきや発見を意見交流することもできます。

校外に出かける場合、校内の協力体制を構築しておき、協力を得ることが重要です。その体制については年度当初に全教職員で共通理解をしておきます。

(3) 2つの学年の単元の組合せ

効果的指導ができるように学習内容を比較検討し、単元の組合せを工夫します。共通のキーワードを取上げ異学年の学習を関連付けて指導することもできます。同学年の考え方の共有だけでなく、1時間の終末や単元のまとめなどの時間において学びを共有することで異学年同士の考え方の共有も期待できます。

＜関連付けて指導する組合せ例＞

○第5学年「わたしたちの生活と情報」と第6学年「わたしたちの生活と政治」

※ 単元を組合せ、「報道の働き」と「政治の働き」を共通の視点（キーワード）で関連付けて指導することもできます。

(4) 学校図書館や公共図書館、インターネット等通信機器の活用

実際に観察や調査・見学などの体験的な学習ができない場合は、学校図書館や公共図書館、インターネット等通信機器を活用し、様々な情報が得られるように工夫します。また、インターネットを介したメールや映像のやり取り、テレビ会議システム等による情報のやり取りを通して、他校とつながりをつくり、交流して考えを深めることができるようにします。

さらに調べたことや考えたことを分かりやすく伝える発信能力を育てます。

2 異単元の指導にあたって

(1) 授業の前に

- 主体的な社会科学習を支える環境づくりの一環として「社会科学習コーナー」などを設置する案もあります。
- 学年用移動黒板（ホワイトボード）等を設置したり、事前に学習の流れを示したりして、授業がスムーズに進められるようにします。また、小黒板（ホワイトボード）や発表ボード、画用紙など、間接指導時における個の学習活動や学年（グループ）での話し合い活動を支える教室内の諸準備をします。
- ワークシートを有効に活用することによって、学習課題が明確になり、学習すべき内容がわかりやすくなります。特に間接指導時に調べ学習をする場合は、ワークシート等を用意し、資料を調べて分かったことや考えたこと、疑問に思ったこと等を書き込めるようにします。

(2) 授業の中で

- 学習の成果を自分の言葉でノートに書き表したり、絵やイラスト、新聞等にまとめたりするなど、多様な方法で表現する活動を取り入れるとともに、少人数であることを生かして、それらの相互交流を工夫します。
- 児童の自主的、主体的な学習活動にしていくために社会科においてもガイド学習を取り入れることができます。全ての児童がガイド役をするようにし、学習の流れや進め方を体験的に学べるようにします。
- 1単位時間における両学年の学習内容を検討したうえで、教師の関わり方を工夫します。一方の学年に直接指導をする場合も、間接指導となるもう一方の学年の児童が課題をしっかりと理解したうえで、解決しようという意識と意欲をもって主体的な活動ができるように教材や学習形態を工夫します。場合によっては、同時間接指導を取り入れ、児童がそれぞれ主体的に学習を進められるようにします。
- 自分の力で解決したことを集団での思考により確認したり深めたりする学びを大切にします。児童が話し合うような場面に教師が直接指導に関わる場合、間接指導となるもう一方の学年の児童が自主的・主体的に学習活動に取り組み、自ら学び、自ら考える時間になるように、学習課題を明確に示すとともに、どうしたらゴールなのか具体的なイメージを示し確認します。
- 間接指導の時間に児童にとって重要なことがわからないときは、できるだけ学年集団の中で解決できるように指導しますが、解決できないときは間接指導中であっても教師の助けを求めるように指導しておきます。「どうしてもわからないときは手をあげて。」と指導するのも1つの方法です。教師には

児童が課題を把握することのできる的確な指示を出したり、学習をスムーズに進めていくことのできるワークシートを用意したりすること等が求められます。

- 社会科では調べたり、調べたことを発表したりする学習活動を組むことが多くあります。その際、上学年と下学年が関わり合うような学習活動を展開することにより、上学年では学習したことの再確認、下学年では社会的な見方や考え方の広がりにつなげることができます。特に学習する内容が身近なところから外へ広がっていく中学年においては効果的です。
- ノートや小黒板（ホワイトボード）、ワークシート等に学習したことをしっかり書いて記録に残すことは学習の効果をあげるだけでなく、教師が一人一人の学習状況を把握するうえでも重要です。特に間接指導時に言葉で直接聞くかわりに、間接指導中の記録をノートや小黒板（ホワイトボード）、ワークシート等を書くように指導します。それぞれの特徴を踏まえ、場面や活動によって使い分けます。
- 直接指導を効率的に行い、間接指導を効果的に進めるために、コンピュータ、TV、電子黒板、実物投影機などのICTの活用を図ります。
- 複式学級の指導では児童数が少ないことから、評価したことをその場で児童に伝えることができます。自らの伸びを実感できるような言葉かけを授業の中で行います。

(3) 授業の後で

- 複式学級ならではの少人数を生かし、学習指導後の記憶の鮮明なうちに評価の記録を整理し、蓄積していきます。そして、児童一人一人の学習状況について、それぞれの学年の評価規準をもとに確認し、次時の指導計画を修正します。
- 年間指導計画・単元指導計画についての成果や課題を明らかにし、授業の改善を図ります。

中学年社会科（異単元）年間指導計画（例）

月	3 年			4 年		
	単元	小単元	時数	単元	小単元	時数
4	わたしたちのまち みんなのまち	導入	1	くらしを守る	導入	1
5		1 学校のまわり	12		1 火事からくらしを守る	9
6		2 市の様子	10		2 事故や事件からくらしを守る	8
7		学習のまとめ	1	住みよいくらしをつくる	学習のまとめ	1
9	はたらく人とわたしたちのくらし	導入	1		導入	1
10		1 店ではたらく人	14		1 水はどこから	12
11		2 農家の仕事	11		2 ごみのしよりと利用	14
12		学習のまとめ	1		学習のまとめ	1
1	かわってきた人々のくらし	導入	1	わたしたちの県	導入	1
2		1 古い道具と昔のくらし	9		1 山ろくに広がる用水	10
3		2 のこしたいもの、つたえたいもの	8		学習のまとめ	2
		学習のまとめ	1		導入	2
					1 県の広がり	7
					2 特色ある地いきと人々のくらし	14
					3 世界とつながるわたしたちの県	4
					学習のまとめ	1
					都道府県カルタで遊ぼう	2

ポイント⑥ 第3学年と第4学年の場合、授業時数に差がある。この時数の差は、「3年生下校後に4年生だけで授業を行う」時間とすることもできる。

※第3学年は年間70時間、
第4学年は年間90時間で作成

ポイント⑦ 授業時数の差から生まれる第4学年だけで指導できる時間にどのような学習活動を組み込めば効果的か考える必要がある。

高学年社会科（異単元）年間指導計画（例）

月	5 年			6 年		
	単元	小単元	時数	単元	小単元	時数
4	わたしたちの国土	導入	1	日本の歴史	導入	2
		1 世界の中の国土	5		1 縄文のむらから古墳のくにへ	8
5		2 国土の地形の特色と人々の暮らし	5		2 天皇中心の国づくり	9
		3 国土の気候の特色と人々の暮らし	5		3 武士の世の中へ	6
6		学習のまとめ	2		4 今に伝わる室町文化	4
	生活と食料生産	導入	2	5 戦国の世から江戸の世へ	10	
7		1 米づくりのさかんな庄内平野	10	ポイント② 地域特性を生かし、都市部では得難い素材を積極的に教材化し、我が国の農業や水産業について考えるようにする。		
9		2 水産業のさかんな静岡県	8		6 江戸の文化と新しい学問	6
		3 これからの食料生産とわたしたち	4		7 明治の国づくりを進めた人々	7
		学習のまとめ	2		8 世界に歩み出した日本	7
10	生活と工業生産	導入	2		9 長く続いた戦争と人々の暮らし	7
		1 自動車をつくる工業	9		10 新しい日本、平和な日本へ	6
11		2 工業生産と工業地域	6	導入	1	
		3 工業生産と貿易	5	1 わたしたちの願いを実現する政治	9	
		学習のまとめ	2	2 わたしたちの暮らしと日本国憲法	5	
12	情報と生活	導入	1	生活と政治	学習のまとめ	1
		1 情報産業とわたしたちの暮らし	4			
		2 社会を変える情報	5			
1		3 情報を生かすわたしたち	4			
		学習のまとめ	2			
2	生活と環境	導入	1	世界の中の日本	導入	1
		1 わたしたちの生活と森林	5		1 日本とつながりの深い国々	6
		環境を守るわたしたち	4		2 世界の未来と日本の役割	8
		自然災害を防ぐ	4			
3		学習のまとめ	2			学習のまとめ

100

105

ポイント③ 第5学年「わたしたちの生活と情報」と第6学年「わたしたちの生活と政治」の学習の一部を重ねる実践例がある。

※第5学年は年間100時間、第6学年は年間105時間で作成

ポイント④ 第5学年と第6学年は年間授業時数に違いがあることに留意する。

4 社会科

(同単元同内容同程度)

1 同単元同内容同程度（A・B年度方式）による年間指導計画作成の際の留意点

同単元同内容同程度の学習指導においては、社会科の特質から考えて、

- ・中学年は、もともと小学校学習指導要領で目標と内容が2年まとめて示されており、上・下学年の学習を含んだ共通の目標をもって指導ができる。
- ・同内容で学習することから、異単元による学年別指導と比較して、教材・教具、資料の準備、教育機器による学習活動が容易である。
- ・校外に見学に出かけることが多いが、見学・調査・観察などの学習活動が2学年で一緒にできる。

といったよさがある一方で、指導の中で、学年差に応じた指導をどのようにするかという課題を考慮して年間指導計画を考える必要があります。

(1) 中学年の年間計画作成の際の留意点

○対象地域の拡大に考慮する

中学年の内容では、地理的概念を自分の住んでいる身近な地域から市町村、都道府県へと拡大させていくような形で構成されていることに留意し、各年度において校区等を学習対象とする単元から始めて、広域市町村や県全体を学習対象とする単元に広がるように配慮します。

○単元を配列する際の留意点

例えば、表1のように内容別に単元を配列する場合、各内容は分割せず、各年度の前半に身近な題材を、後半に歴史的・地理的認識を広げる題材を配分します。各年度の中の順序性は問題なく、1単元にじっくり取り組める一方、県全体の学習を終えた後で学校の周りの学習をする学年があるとともに、転出・転入に対応できにくい問題があります。

表1 内容別に配列する型

A年度	B年度
内容（1）身近な地域や市町村 内容（3）飲料水・電気・ガスの確保と廃棄物の処理 内容（5）生活の変化や人々の願い、先人の働き	内容（2）生産と販売 内容（4）災害や事故の防止 内容（6）県の位置や県全体の概要、 県内の特色ある地域

また、小学校学習指導要領解説社会科編に2つの事例を取り上げていくことが示されている場合、それぞれの内容を独立させて2年間に分割して扱うことが可能です。その際には、両年度で扱う内容について、難易度のバランスや系統性、地域の実情に配慮して指導計画を作成します。どの内容を分割して扱えるかは地域の実態によって大きく異なります。地域や学校の特色を把握しながら検討を加えていくことが大切です。この場合、表2のように各年度で中学年の全内容の学習が可能であり、各年度の内容のバランスや低・高学年との接続の点で問題が少なくなります。一方で各年度の単元数が多く、細切れの学習になります。

表2 内容を2分割する型

A年度	B年度
内容(1)－身近な地域	内容(1)－身近な市町村
内容(2)－生産	内容(2)－販売
内容(3)－飲料水・電気・ガスの確保	内容(3)－廃棄物の処理
内容(4)－災害の防止	内容(4)－事故の防止
内容(5)－生活の変化や人々の願い	内容(5)－先人の働き
内容(6)－県の位置、県全体の概要	内容(6)－県内の特色ある地域

さらに、表3のように、一部の内容を2分割することも考えられます。その場合対象地域の順序性にも問題がなく、じっくり取り組む単元も多くなります。一方で分割する内容とまとめて扱う内容とを地域の実情等を考慮して検討する必要があります。

表3 一部の内容を2分割する型

A年度	B年度
内容(1)－身近な地域や市町村	内容(2)－生産
内容(2)－販売	内容(3)－廃棄物の処理
内容(3)－飲料水・電気・ガスの確保	内容(4)－事故の防止
内容(4)－災害の防止	内容(5)－生活の変化や人々の願い
内容(5)－先人の働き	内容(6)－県の位置、県全体の概要、 県内の特色ある地域

(2) 高学年の年間計画作成の際の留意点

○中学年からの接続、中学校への接続について配慮する

中学年の地域中心の学習から高学年の我が国の国土や歴史の学習への接続、中学校の社会科学学習に移行することについて十分に念頭におきます。特に、第5学年で歴史を学習する学年に対して、国土の位置や地理的環境について触れる機会を設けたり、第6学年時に歴史的・公民的内容について振り返る時間を設定したりするなどの配慮が必要です。また、中学年時に下学年で県の学習をしていた場合に、都道府県の位置や名称についての定着度合に留意する必要があります。

○単元を配列する際の留意点

平成27年度現在、県内の高学年の複式学級において、A・B年度方式で年間指導計画を作成している学級の全てが第5学年と第6学年の内容を交互に学習しています。これは、第6学年の我が国の歴史についての学習が年間指導時数の3分の2程度を占める単元であることに大きく起因します。県内で多くとり上げられている方法ですが、第5学年で第6学年の内容を学習した児童が転出した場合、また、第6学年の児童が第5学年の内容を学習する複式学級に転入した場合、児童は1年間で2年分の内容を学習する必要があり、転出入児童及び受け入れる学校への負担が非常に大きい単元配列であることを十分留意する必要があります。

また、分割して配列することは可能ですが、我が国の歴史の内容を分割すると時代の流れに沿って継続的に学習することが困難である上に、我が国の歴史についての学習の後半から学習を始めて前半へと移行させる学年が生じることに留意します。

分割を検討するには、両年度に配分された学習内容が、原則的には第5学年の単元が年度前半に、第6学年の単元が後半に配置されるよう配慮されるよう留意する必要があります。例えば、第5学年の単元の一つを、歴史的学習を中心に行う年度の始めに移動し、第6学年の公民単元を、地理的学習を中心に行う年度の終わりに移動することで負担を減らすことも考えられます。

2 同単元同内容同程度の指導にあたって

- 中学年では、下学年で身近な地域や市町村の学習を扱わない場合には、白地図で表す活動や地図記号を扱う活動を学習の中に適宜取り入れる必要があります。
- 中学年の内容について、学校がへき地に位置している場合は、下記の例のようなへき地の利点を活用して指導することができます。

内容(1)…地域の地形に特色があり、土地利用の様子、生活と自然環境との関係性が捉えやすい。
内容(2)…ほとんどの家庭に車があり、スーパーマーケットに行った経験があるので、地域内の商店を利用した消費生活と市街地の大規模店舗を利用した消費生活との違いを明確に見つけやすい。移動販売車などの特色ある教材がある。地元の自然条件を生かした生産活動が多い。
内容(3)…消防署や警察署が遠い場合に、消防団や駐在所の働きをとりあげることができる。
内容(4)…湧水や地下水などを利用した給水が多く、ダムや浄水場を利用した給水と比較しやすい。
内容(5)…古い道具が地域に残っていたり、昔の生活の様子を聞くことも容易であったりする。

- 高学年では、内容が抽象的・概念的な理解を求めるものになりやすいので、できるだけ具体的な事例や事象をとらえて、実証的な学習をしていきます。児童の個々の能力が育成され、主体的な理解が得られるよう、指導計画作成の際にも、「産業」「歴史」「政治」「世界」の学習が、児童の身近な事象や人々のくらしと結びついた具体的な学習になるよう計画します。
- 第5学年で我が国の歴史についての学習を扱う場合に、日本全体や世界を視野に入れて考える視点、国土の自然条件や社会条件から考える視点、日本の産業や環境の現状についての理解などの面で、第6学年との差があることを考慮して、授業の中での支援を考える必要があります。
- 目標の考え方については、単元目標を両学年共通の目標として設定します。それに基づいて評価規準も設定します。

中学年社会科（同単元同内容同程度）年間指導計画（例）

【内容別に配列する型】

月	A年度		B年度	
	単元	時数	単元	時数
4 5 6 7	わたしたちのまち（3年） 1 学校のまわり 2 市のようす	2 4	はたらく人々（3年） 1 農家のしごと 2 店のしごと B年度は、下学年を考慮し、白地図や地図記号等について学習する必要があります。	2 7
9 10 11	住みよい暮らし（4年） 1 ごみのしりと利用 2 水はどこから	2 8	くらしを守る（3年） 1 火事からくらしを守る 2 事故や事件からくらしを守る	1 9
12 1 2 3	かわってきたくらし（3年） 1 くらしのうつりかわり 2 地域にのこるもの きょうどをひらく（4年） 1 きょうどをひらいた人々	1 8 1 3	わたしたちの島根県（4年） 1 島根県のようす 2 県内の特色ある地いき	3 1
				8 3 7 7

学年の内容毎にまとめる配列も考えられます。その場合、内容の系統性・発展性に問題はありますが、低学年や高学年にスムーズに接続しにくい学年が生じます。

【内容を2分割する型】

内容(1)は学校のまわりから市全体へと対象が広がるという順序性をもっているため、分割する際に、単元の始めは同様の内容を繰り返して扱うことも考えられます。

月	A年度		B年度	
	単元	時数	単元	時数
4 5	わたしたちのまち（3年） 1 学校のまわり	1 3	わたしたちのまち（3年） 1 市のようす	1 1
6 7	はたらく人々（3年） 1 農家のしごと	1 2	はたらく人々（3年） 1 店のしごと	1 5
9 10	くらしを守る（3年） 1 火事からくらしを守る	1 0	くらしを守る（3年） 1 事故や事件からくらしを守る	9
11 12	住みよい暮らし（4年） 1 ごみのしりと利用 きょうどをひらく（4年） 1 きょうどをひらいた人々	1 6 1 3	かわってきたくらし（3年） 1 くらしのうつりかわり 2 地域にのこるもの 住みよい暮らし（4年） 1 水はどこから	1 8 1 2
1 2 3	わたしたちの島根県（4年） 1 島根県のようす	1 1	わたしたちの島根県（4年） 2 県内の特色ある地いき	2 0
				7 5 8 5

内容(6)は県の概要と、県内の特色ある地域及び他地域と外国との関わりとに分割して扱うことができます。また、「自然」をテーマにする年度と「産業・交通」をテーマにする年度とに分けて扱うことも考えられます。

【一部の内容を2分割する型】

完全に2分割するより細切れの学習が減ります。

月	A年度		B年度	
	単元	時数	単元	時数
4	わたしたちのまち（3年）	2 4	はたらく人々（3年）	1 2
5	1 学校のまわり		1 農家のしごと	1 8
6	2 市のようす		かわってきたくらし（3年）	
7			1 くらしのうつりかわり	
9	はたらく人々（3年）	1 5	くらしを守る（3年）	1 0
10	1 店ではたらく人	9	1 火事からくらしを守る	
11	くらしを守る（3年）		住みよいくらし（4年）	1 2
12	1 事故や事件からくらしを守る		1 水はどこから	
	住みよいくらし（4年）	1 6	わたしたちの島根県（4年）	
	1 ごみのしやりと利用		1 島根県のようす	1 1
1			2 県内の特色ある地いき	2 0
2	きょうどをひらく（4年）	1 3		
3	1 きょうどをひらいた人々			

7 7

8 3

【学年別に固定する型】

両学年共に内容の系統性・発展性にそって学習できる利点があります。

月	A年度（第5学年内容）		B年度（第6学年内容）	
	単元	時数	単元	時数
4	わたしたちの国土	1 7	日本の歴史	3 8
5	1 世界の中の国土		1 縄文のむらから古墳のくにへ	
6	2 国土の地形の特色		2 天皇中心の国づくり	
7	3 国土の気候の特色	1 0	3 貴族のくらし	3 3
8	生活と食料生産		4 武士の政治の始まり	
9	1 くらしを支える食料生産		5 室町文化	
10	2 米づくりのさかんな地域	2 6	6 天下統一	1 0
11	3 水産業のさかんな地域		7 江戸幕府と政治の安定	
12	4 これからの食料生産		8 町人の文化と新しい学問	6
	生活と工業生産	5	9 明治の国づくり	
	1 工業生産と工業地域		10 世界に歩み出した日本	
	2 自動車をつくる工業	1 6	11 長く続いた戦争	1 7
	3 工業生産を支える仕事		12 民主的で平和な日本へ	
	4 これからの工業生産		生活と政治	1 0
	情報化した社会と生活	1 1	1 国民の願いを実現する政治	
	1 情報産業とくらし		2 国の政治のしくみ	
1	2 社会を変える情報	1 6	3 くらしと日本国憲法	1 7
2	3 情報を生かす		世界の中の日本	
3	生活と環境		1 日本とつながりの深い国々	
	1 生活と森林	1 0	2 世界の未来と日本の役割	1 0 5
	2 環境を守る			
	3 自然災害を防ぐ			

1 0 0

1 0 5

B年度において、日本全体や世界を視野に入れて考える視点や国土の自然条件や社会条件から考える視点、日本の産業や環境の現状についての理解などの面で、上学年と下学年で差があることを考慮して、授業の中での支援を考えましょう

5 算数科

(異単元)

1 異単元による年間指導計画作成の際の留意点

(1) 異単元による学年別指導

算数科は、系統性を重視する教科です。そのため、2年間の学習内容を一つにまとめる同単元異内容異程度（完全1本案、くりかえし案）や同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）で指導することには難しさがあり、県内の複式学級では、異単元による学年別指導で算数科の授業が行われることが一般的です。

(2) ねらいが明確な授業となるようにする

算数科の学年別指導では、教師に、複数の学年を見なければならぬので時間が足りないという意識があり、「考える活動」が十分ではない場合もあるようです。年間指導計画に「考える活動」に取り組みさせる重点単元を位置付けたり、単元計画に「知識や技能を習得する活動」と「考える活動」をバランスよく配当したりして、学年別指導でも「考える活動」が十分に行われるようにすることが大切です。

(3) スパイラルによる教育課程編成を工夫する

学習指導要領では、知識・技能の確実な定着のため、また、学ぶ意欲を高めるため、発達や学年の段階に応じた反復（スパイラル）による教育課程を編成することが示されています。学年別指導を基本としながら、2つの学年が同じ教室で学ぶ複式学級のよさを生かし、下学年の児童が上学年の内容への興味・関心を高めたり、上学年の児童が下学年の内容を学び直したりする機会も柔軟に設定するようにします。

次のような関連する内容や領域については、可能な範囲で異学年が同時期に学習できるよう、単元配当を工夫することも考えられます。教師にとっては、異学年で共通となる部分が多いので、より効果的な指導も見込めます。

【例1】3年「一億までの数」、4年「一億をこえる数」

- ・扱う数の範囲は異なりますが、十進位取り記数法の意味や大きな数の唱え方について、異学年が一緒に学習することが可能です。
- ・億や兆の単位は3年生の指導内容ではありませんが、日々の暮らしの中でふれることも予想されるので、4年生への指導にあわせ、3年生にも簡単にふれることが考えられます。

【例2】5年「小数のかけ算」、6年「分数のかけ算」

- ・数直線図による指導を柱としながら、小数倍と分数倍の意味を関連付けて異学年が一緒に学習することが可能です。
- ・小数倍については児童が理解しにくい内容でもあるので、6年生の導入として「小数のかけ算」の復習を位置付け、5年生の内容を6年生がいっしょに学習することも考えられます。

2 学年別指導にあたって

【子どもの声でつくる算数授業】

学年別指導では、教師が直接的に児童に関わる時間は短くなります。学年別指導だからこそ、児童がお互いの表現をつなぎ、考えを伝え合い学び合うような、「子どもの声でつくる算数授業」をつくることのできる好機ととらえましょう。「子どもの声」をいかしながら、「考える楽しさ」を味わい「算数が好き」と感じられるようにしていくために、次のようなことを大切にしていきます。

(1) 授業の前に

【考えること、やりきることを楽しむ児童の姿を明確にして授業を構想する】

算数が好きな児童を育てることは島根県の大きな課題であり、また、学ぶ楽しさや意義等を実感できるようにすることは、学習指導要領でも大切にされています。そのことは、複式学級においても例外ではありません。特に、教師が児童に直接的に関わりにくい間接指導での活動が、児童にとって目的意識を見いだせない、楽しさを感じられないものとなることは避けなければなりません。教師は、次の例に示すような、児童が考えること、やりきることを楽しんでいる姿を具体的にイメージしながら単元や1時間ごとの展開を考えるようにします。

例えば、「速く計算ができる」「正しく作図ができる」といった「できる、わかる楽しさ」に重点を置く場合、間接指導を技能の習熟の時間にあてるなどし、児童が自信を深められるような展開を考えます。また、「お互いの考えをわかり合う楽しさ」「新しいことを見つける楽しさ」などに重点を置く場合、間接指導での話し合いがより深まりのあるものとなるよう、問題の内容や問題の提示の仕方を工夫した展開を考えます。

児童に感じさせたい楽しさにより、重きを置く学習活動は変わります。言い換えると、授業における学習活動により、児童が楽しさを感じられるかどうかが決まってきます。

考えること、やりきることを楽しむ姿（例）

動き出す自分を楽しむ！

- ・ 難しそうだけどやってみたい。
- ・ どんな方法が使えるかな。

一人で考えることを楽しむ！

- ・ まずは、図をかいてみよう。
- ・ ここに線を引いたらどうなるかな。
- ・ ここまではできたけど…。
- ・ みんなはどんなふう考えているかな。

みんなで考えることを楽しむ！

- ・ そういう考え方もあるのか。
- ・ なるほど、そういう意味だったんだ。
- ・ 図を使うと説明がわかりやすくなるね。

やりきることを楽しむ！

- ・ ○○さんの説明を聞いたらよくわかった。
- ・ 難しかったけど、最後までしっかり考えた。
- ・ 家に帰ってからもっと考えてみよう。

【児童が活動している姿を具体的にイメージして授業を構想する】

学年別指導では、間接指導時の学習活動をより充実したものとするのが大切です。一つの答えが求まった時点で個による追究が終わると、その児童が何もしないでいる時間ができてしまいます。話し合いの視点が明確でないと、児童の力で話し合い活動を進められなくなってしまいます。特に、間接指導で児童がいきいきと活動している姿を具体的にイメージし、授業を構想していくことが大切です。

授業を構想する際の留意事項（例）

- ・ 「やってみよう」「考えてみたい」という思いをもって児童が活動する姿をめざし、問題の内容や提示の仕方を工夫する。
- ・ 答えを求めて満足するだけでなく、よりよい方法を児童が考えていく姿をめざし、言葉、式、表、図（絵）などを使っていろいろな方法で考えるような学習展開を工夫する。
- ・ 「自分の考えを伝えたい」「友達の考えをわかりたい」という思いをもってお互いの考えをわかり合おうとする姿をめざし、図（絵）と式の中から共通することを見つけたり、複数の考えをつないで新しいことを見つけたりするなど、何について話し合うのか、どのように話し合うのか児童にはっきりとわかるような話し合いの場の在り方を工夫する。

(2) 授業の中で

【自分の力で解き方などを表現できるように継続的に指導する】

算数においては、次に示すようなことを、児童が自分の力でできるように継続的に指導していくことは、児童に「自分の力であきらめずに考えてみよう」「自分の力でここまでがんばれた」という

思いをもたせるのに有効です。こうした思いを積み重ねることは、児童が学習に主体的に取り組もうとする意欲を高めることにつながります。

自分の力で考えられるようになるために

- ・ 絵や図をかいてみる。
 - ・ わかっている情報を絵や図に書き込む。
 - ・ 問題を言い換えるとどうなるか考える。
 - ・ 似た問題をやったことがないか思い出す。
 - ・ 簡単な場合で考えてみる。
 - ・ 補助線をいろいろ引いてみる。
 - ・ 表に整理してみる。
 - ・ 表からきまりを考えてみる。
- など

【「子どもの声」を大切にしながら、お互いの考えをわかり合う場をつくる】

「ガイド学習」を進めるにあたっては、ガイド役だけでなく、話し手、聞き手をしっかり育てるという視点も大切です。それは、型を示して、その型にそった言い方、聞き方をさせるということではありません。

「子どもの声でつくる算数授業」で大切にしたいのは、みんなの力で自分たちの表現を豊かにし、自分が話すときに、あるいは友達の話聞くときに使うといい言葉を獲得していけるようにすることです。

友達の「意図」をくみとったり、お互いの考えをつないだりする発言などを、教師が大切に価値付け、児童の発言をまとめて掲示するなどし、「こんなふうに考えればいい、こんなふうに話せばいい」と児童が実感できるようにします。よりよい話し手、聞き手を育てることが、児童の主体的な話し合い活動を支えることにつながります。

大切にしたい「子どもの声」

友達の「意図」を考える言葉

- ・ Aさんは、どうしてそんなふうに考えたのだろう。
- ・ Aさんが言おうとしたのは、～ということかな。
- ・ Aさんの考えの続きが言えるよ。

似ているところ、違うところを明らかにしていく言葉

- ・ だったら、Bさんの考えと似ているよ。
- ・ ～というところが同じじゃないかな。
- ・ CさんとDさんの図はよく似ているけど、よく見ると～なところが違っている。

式、図、言葉などを関連付けお互いの考えをつなぐ言葉

- ・ Cさんがかいた図で、Aさんの式を説明できるよ。
- ・ Bさんの式の～は、Cさんの図ではこれにあたるよ。
- ・ AさんとBさんは違う式を書いているけど、考え方は同じということなのかな。

友達の考えに反応する言葉

- ・ えっ、どういうこと？
- ・ へえ～。なるほど。
- ・ あっ！今の発表を聞いて、すごいことを見つけた！

自分たちの学びのよさを価値づける言葉

- ・ Aさんの考えた式は、いつでも使えそうだ。
 - ・ Bさんの考え方にはびっくりした。
 - ・ 次は、Cさんの図を使って考えてみたい。
 - ・ まだ他にもいい考えがあるかもしれない。
- など

(3) 授業の後で

【学年別指導を教師が楽しむ】

学年別指導では、指導の方法に関わる検討事項が多くあり、教師の負担は決して少なくありません。算数科では、多様な考えが出にくいという指摘もあります。しかし、児童一人一人をきめ細かく見られるというよさをいかし、児童がどんな意図で表現したのかをていねいに見ていくと、教師の発想を越えた、児童の考えの豊かさに気付くことができます。授業後は、児童が黒板やノートに残した学習の足あとを活用し、一人一人の学習成果を見取るとともに、評価言を児童に伝えることを大切にします。そして、児童を主体とした学年別指導ならではの児童の成長ぶりを教師が楽しみ、児童に返していきましょう。

中学年算数科（異単元）年間指導計画（例）

月	3 年生	時数	4 年生	時数
4 月	1 九九の表とかけ算	6	3 折れ線グラフ *ふく習 じゅんぴ	6
5 月	2 わり算 *ふく習 ◎どんな計算になるのかな ◎かくれた数はいくつ(1) 考	13 2	2 1けたでわるわり算の筆算 ◎算数実験室 ◎わくわく算数学習 ◎何倍でしょう 考	13 2
6 月	3 円と球 *ふく習 じゅんぴ	8	1 角とその大きさ	8
7 月	4 たし算とひき算の筆算 *ふく習 じゅんぴ	14	5 垂直・平行と四角 *ふく習 じゅんぴ	14
	5 一億までの数 ◎買えますか？ 買えませんか？	11	4 一億をこえる数 *ふく習 じゅんぴ	8
	6 たし算とひき算 ◎算数じっけん室 ◎わくわく算数学習 ◎夏休みの算数の自由研究	6 1	6 小数 ◎夏休みの算数の自由研究	9 1
9 月	*ふく習 じゅんぴ	1	7 式と計算の順じょ *ふく習 じゅんぴ	9
	7 時間と長さ *ふく習 じゅんぴ	8	8 2けたでわるわり算の筆算	11
	8 あまりのあるわり算 考	11	9 そろばん *ふく習	2
10 月	◎かくれた数はいくつ(2)	2	★発見！算数島	—
	★発見！算数島	—	★発見！算数島	—
	9 三角形 考	7	10 面積 考	10
11 月	◎何倍でしょう	2		
	10 計算のじゅんじょ	1		
	11 1けたをかけるかけ算の筆算	13	11 がい数とその計算 ◎見積もりを使って ◎どんな計算になるのかな ◎もとの数はいくつ *ふく習 じゅんぴ	13
12 月	12 重さ	8	12 小数×整数、小数÷整数 考 ◎よみとる算数	19
	13 分数 *ふく習	11		
1 月	◎間の数	1	*ふく習 じゅんぴ	1
	15 表とグラフ	8	13 調べ方と整理の仕方 *ふく習 じゅんぴ	4 1
	14 計算のきまり	1	15 変わり方	6
2 月	◎べつべつに、いっしょに 考	3		
	16 小数 *ふく習 じゅんぴ	10	*ふく習 じゅんぴ 14 分数 *ふく習 じゅんぴ	10
3 月	17 2けたをかけるかけ算の筆算 ◎よみとる算数	7	16 直方体と立方体 考	11
	18 □を使った式	4		
	19 そろばん	2	◎だれでしょう	1
	◎みらいへのつばさ	1	◎みらいへのつばさ	1
	*もうすぐ4年生	2	*もうすぐ5年生	3
	★発見！算数島	—	★発見！算数島	—

考：考える活動を重点に置く単元

- ・上下学年ともに、下巻は10月中旬ごろから使用するよう単元を配列しています。（網掛け部分）
- ・同じ領域や内容の学習を同時期に扱う場合、ねらいや問題場面を共通にするなどの工夫をすることが考えられます。また、上学年が下学年の支援をしたり、上学年が前年度の学習を振り返ったりするなど、複式で学ぶことのよさを生かすようにすることが大切です。
- ・時数については、教科書会社が設定したものを参考として示していますが、上下学年の学習の進み具合により柔軟に対応することが大切です。

高学年算数科（異単元）年間指導計画（例）

月	5 年生	時数	6 年生	時数
4 月	* おぼえているかな？ 6 合同な図形	9	1 対称な図形	12
	1 整数と小数	5	* おぼえているかな？ 2 円の面積	6
5 月	3 比例	3	6 角柱と円柱の体積	5
	* おぼえているかな？ 2 直方体や立方体の体積	10	7 およその面積や体積	3
6 月	4 小数のかけ算 考	12	* かたちであそぼう「不思議な輪の変身」 * おぼえているかな？ 4 分数のかけ算 考	1
	5 小数のわり算	14	3 文字と式	4
7 月	* どんな計算になるのかな？	1	5 分数のわり算	11
9 月	7 偶数と奇数、倍数と約数	11	* どんな計算になるのかな？	1
	8 分数と小数、整数の関係	6	8 比と比の値	9
10 月	* 考える力をのぼそう「きまりを見つけて」 考	2	* おぼえているかな？ 9 拡大図と縮図 考	8
	* かたちであそぼう「ブロック遊び」	1	* おぼえているかな？ 10 速さ 考	11
	9 分数のたし算とひき算	12	* 算数の目で見よう 「震災の経験を生かそう」	2
	* 算数の目で見よう 「古くて新しい路面電車」	1	11 比例と反比例	16
	* おぼえているかな？ 10 単位量あたりの大きさ 考	13	* 考える力をのぼそう「全体を決めて」 考	2
11 月	* おぼえているかな？ 11 図形の角	7	* おぼえているかな？ 12 並べ方と組み合わせ方	6
12 月	12 四角形と三角形の面積 考	13	* かたちであそぼう「紙を切って」 * 考える力をのぼそう「関係を見つけて」	1
1 月	* おぼえているかな？ 考 13 百分率とグラフ	12	* おぼえているかな？ 13 資料の調べ方	2
	* 算数のおはなし「失われる森林」	-	* おぼえているかな？ 14 量の単位	10
2 月	14 正多角形と円周の長さ	10	* おぼえているかな？ 14 量の単位	6
	* 指導順序の入れ替えをする 場合、学期をまたがないよう に、また、上巻と下巻をまた がないように留意します。		* 算数をつかってやってみよう 「単位計算尺を作ろう」	-
	* おぼえているかな？ 15 分数のかけ算とわり算	6	* 算数の目で見よう 「世界にほこる新幹線」	2
3 月	16 角柱と円柱	5	* 算数のまとめ	14
	* 算数のおはなし「先のとがった立体」	-	6 年間のまとめの時期と なります。5 年生ができる 内容については、余剰の時 間を活用し、5、6 年生が いっしょに学習することも 考えられます。5 年生にと っても、これまでの学習を 振り返る機会となります。	
	* 考える力をのぼそう「差や和に目をつけて」	1	* 算数卒業旅行	10
	* かたちであそぼう「一筆がき」	1		
	* 算数の目で見よう 「ごみの減量と二酸化炭素の量」	2		
	* 5 年のふくしゅう	3		
	* 算数おもしろ旅行	2		
	* 算数の考えを使ったクイズ・パズルにちょう戦！	-		
	* 算数自習コーナー	-		

考：考える活動を重点に置く単元

- ・上下巻分かれている場合は、10月中旬ごろから下巻を使用するよう単元を配列しています。（網掛け部分）
- ・同じ領域や内容の学習を同時期に扱う場合、ねらいや問題場面を共通にするなどの工夫をすることが考えられます。また、上学年が下学年の支援をしたり、上学年が前年度の学習を振り返ったりするなど、複式で学ぶことのよさを生かすようにすることが大切です。
- ・時数については、教科書会社が設定したものを参考として示しています。上下学年の学習の進み具合により柔軟に対応することが大切です。

6 理 科

(異単元)

1 異単元（学年別指導）による年間指導計画作成の際の留意点

(1) 当該学年で培う資質や能力を意識します。

異単元で行うことのよさの1つに、学年の系統性を大切にした学習の展開が可能となることがあげられます。第3学年：比較しながら調べる、第4学年：関係付けながら調べる、第5学年：条件に目を向けながら調べる、第6学年：推論しながら調べるといった、学年を通して育成する問題解決の能力を意識して単元を展開します。

(2) 2つの学年の単元の組み合わせについては、各学年における指導のねらいと教材内容を加味し、学級の実態に応じ、適した方法を選択します。

＜系統性を生かして組み合わせる例＞

○第3学年「身近な自然の観察」と第4学年「身の回りの生き物の様子」では、2つの学年で校外に観察に出かけるなど、類似単元の組み合わせにより、一緒に活動することが可能です。

○第5学年「電流がうみ出す力」と第6学年「電気の利用」を組み合わせることで、学年別ではあるが、第6学年の児童が既習の内容を想起することが可能です。

＜別の内容を組み合わせる例＞

それぞれの学年の児童がもう一方の学年の学習内容に影響を受けずに、集中して当該学年の内容を学習できるようにしたいと考える場合、あえて関連のない単元を組み合わせることも考えられます。児童の実態に応じ、適した組み合わせを考えます。

(3) 学年別のわたりによる指導を実施する際には、安全面での配慮から、火や危険な薬品を用いた実験と屋外での実験・観察ができるだけ重ならないように年間指導計画を工夫します。

○中学年複式学級では、第4学年「物の体積と温度」「水のすがたとゆくえ」「物のあたたまり方」において、アルコールランプを用いた実験を行います。高学年複式学級では、第5学年「もののとけ方」第6学年「物の燃え方と空気」「水溶液の性質とはたらき」において、アルコールランプや危険な薬品を用いた実験を行います。これらの実験ともう一方の学年の屋外での実験・観察を必要とする単元が重ならないようにします。

○火や危険な薬品を用いた実験と屋外での実験・観察の重なりが避けられない場合は、他教科と組み合わせる等の対応も考えられます。

(4) 算数科の内容との関連を図ります。

○第3学年「物の重さをくらべよう」と算数科のはかりの使用や重さの単位に関わる単元との関連や、第5学年「ふりこの運動」と算数科の平均値に関わる単元との関連を図り、年間指導計画を作成します。

この他にも、年間指導計画（例）に中学年、高学年それぞれの年間指導計画作成におけるポイントを示しています。それらも参考にしながら、年間指導計画を作成してください。

(5) 中学年は第3学年が年間90時間、第4学年が年間105時間と総時数が異なります。

第3学年の負担過重にならないよう配慮して、年間計画を作成します。

2 異単元（学年別指導）の指導にあたって

<「わたり」による指導にあたって>

○「わたり」により、直接指導と間接指導を繰り返す場合、「ずらし」による空白の時間が生じることは前章で伝えてきました。「ずらし」による空白の時間をなくし、より効率よく授業を展開するために、いずれかの学年の前時の最後に、直接指導により次時の導入を図っておくとよいです。このことにより、本時において、児童だけで学習が進められ、もう一方の学年で教師の直接指導による導入が可能となります。また、同様に、終末にいずれかの学年に空白の時間が生じます。終末の時間は、本時に関わる内容についての発展課題プリントや、練習問題プリントに取り組むこと等が考えられます。

<同時間接指導による指導にあたって>

○学習ガイドを作成するときは、自然事象への働きかけ→問題の把握・設定→予想・仮説の設定→検証計画の立案→観察・実験→結果の整理→考察→結論の導出、といった問題解決の過程を意識した学習展開とします。

○学習ガイドには、自分たちで授業を進められるよう、学習の流れが示してありますが、理科においては、安全面での配慮のため、教師がどの場面で直接指導するのか書いておきます。

○初めて複式学級を経験する児童においては、ガイド学習に慣れていないことから、実験が安全管理上まかせられない場合もあります。児童の実態に応じて、初めのうちは、「わたり」による教師の直接指導を行い、徐々に自分たちで進められるようにするなど柔軟な対応が必要です。

○2つの学年ともに実験を行う授業の場合は、同時間接指導を取り入れ、児童がそれぞれ主体に授業を進めるようにし、教師は2つの学年ともに見守り、必要に応じて実験や記録のポイント等を声かけするよう展開すると、全体が把握しやすくなります。

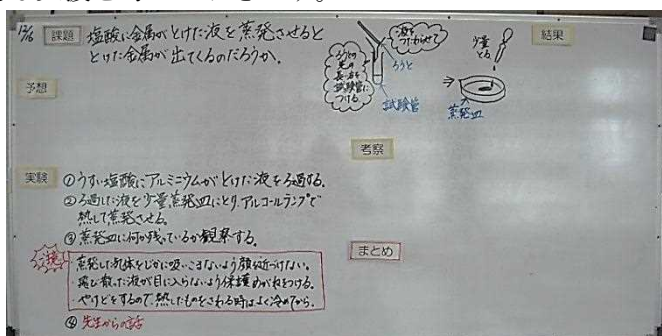
2月16日6年理科学習ガイド	
1 今日の課題	○前の時間の学習をふりかえります。 「前の時間の学習では、塩酸にとけた金属はどうなったのかを考えました。あわを出してとけたので、気体にかわって出ていったという考えや、食塩水のように、金属のままでとけているという考えや、あわが出たり熱くなったりのため、別のものに变化したのではないかという考えが出ました。」 ○今日の課題を読んでください。 ＜課題＞塩酸に金属がとけた液を蒸発させると、とけた金属が出てくるのだろうか。 ○今日の課題をノートに書いてください。
2 予想	○結果を予想して、予想をノートに書いてください。 ○自分の考えを発表してください。 ○皆さんどうですか。質問や付け加えはありませんか。 ※先生からの話
3 実験方法	○実験方法を確認します。実験方法を読んでください。 ○実験方法をノートに書いてください。 ※先生からの話（気をつけること）
4 観察・実験	○班の友だちと協力して、安全に実験しましょう。 ○結果をノートにわかりやすくまとめましょう。
5 結果の整理	○結果を発表してください。
6 考察	○結果から考えたことをノートに書きましょう。 ○結果から考えたことを発表してください。 ※先生からの話
7 まとめ	○結果からの考察をもとに、今日の課題についてまとめます。 ・・・・・・でいいですか。
8 ふりかえり	○めあてをもとに今日の学習をふりかえり、ノートに書きましょう。

<授業の前に>

- 提示する課題は、問題意識を高めるよう、また、追究の過程に見通しがもてるよう工夫します。
- 学年用の移動黒板等を理科室に設置し、前日、学習の流れを書いておくともスムーズに進められます。
- 予想されるつまづきを想定し、あらかじめ具体的な支援を考えておきます。

<授業の中で>

- 火を使う等、安全面で配慮が必要な場合は、授業の初めに両学年全員に配慮事項を伝えます。
- 実験の結果や、結果からの考察等、一人一人の考え方を必ずノートに記述するよう伝え、全体での考察場面では、その記述をもとに考えの良さが引き出せるようにします。



中学年理科（異単元）年間指導計画（例）

中学校理科（異単元）年間指導計画（例）		
月	第3学年	第4学年
4	春の自然観察④	春の自然⑥
	たねをまこう③	
5	チョウを育てよう⑦	電気のはたらき⑫
	植物の育ちとつくり④	
6	かげのでき方と太陽の光⑦	動物のからだのつくりと運動⑦
	こん虫の育ちとつくり④	
7	こん虫の育ちとつくり⑤	夏の自然⑤
	実ができたよ④	
9	太陽の光を調べよう⑨	夜空を見よう②
	風やゴムで動かそう⑩	
10	明かりをつけよう⑩	月や星の動き⑦
	物の体積と力⑥	
11	物の体積と温度⑨	秋の自然⑤
	水のすがたとゆくえ⑬	
12	冬の夜空②	物の体積と力⑥
	冬の自然⑤	
1	物の重さをくらべよう⑧	物のあたたまり方⑬
2	つくってあそぼう⑦	
3	生きものの1年をふり返って⑦	

ポイント①
第3学年の「春の自然観察」と第4学年の「春の自然」等を組み合わせることで、校舎外に出る活動と一緒にを行うことが可能です。（場の共有の仕方）

ポイント②
『生物の構造と機能』にかかわる単元。第3学年「植物・昆虫の育ちとつくり」との関連を図ります。（単元のつながり）

ポイント③
この年間計画では組み合わせるはいませんが、第4学年の「電気のはたらき」と第3学年の「明かりをつけよう」を組み合わせるも可能です。（単元のつながり）

ポイント④
第3学年の「かげのでき方と太陽の光」と第4学年の「一日の気温の変化」を組み合わせることで、第4学年の児童が既習の内容を想起することが可能です。（単元のつながり）

ポイント⑤
第3学年の「風やゴムで動かそう」は、実験を理科室前の廊下等で実施することで、第4学年の支援も可能です。（場の共有の仕方）

ポイント⑥
第3学年の「明かりをつけよう」は、主として自席での実験とし、第4学年の「水のすがたとゆくえ」のグループ実験を支援します。（安全性の確保）

ポイント⑦
第3学年の「物の重さをくらべよう」は、主として自席での実験とし、第4学年の「物のあたたまり方」のグループ実験を支援。（安全性の確保）

ポイント⑧はかりの使用や重さの単位については、算数科の学習との関連を図ります。（他教科とのつながり）

※第3学年は90時間、第4学年は105時間で作成

高学年理科（異単元）年間指導計画（例）

月	第5学年	第6学年	
4	種子の発芽と成長⑮	生物の暮らし②	ポイント① 第5学年の「種子の発芽と成長」と第6学年の「生物の暮らし」等を組み合わせることで、校舎外に出る活動を一緒に行うことが可能です。 (場の共有の仕方)
5		物の燃え方と空気⑩	ポイント② 第6学年の「物の燃え方と空気」の学習期間は、第5学年の学習は室内で行うよう計画する必要があります。 (場の共有の仕方)
6	天気の変化⑩	動物のからだのはたらき⑩	ポイント③ 第5学年の「植物の発芽と成長」「天気の変化」「魚のたんじょう」では、生物の成長状態や天候などによって、計画通りに実行できない場合があります。よって、その状況を見ながら時には2～3単元を並行して展開したり、単元を入れ替えたりして臨機応変に授業を設定します。 (単元のつながり)
	魚のたんじょう⑪	植物のからだのはたらき⑧	
7		生き物の暮らしと環境⑥	
9	花から実へ⑥	月と太陽⑥	ポイント④ 月齢20前後の月は、朝見られることから、第5学年の「花から実へ」の学習と組み合わせることで、校舎外に出る活動を一緒に行うことが可能です。 (単元のつながり)
10	流れる水のはたらき⑮	大地のつくりと変化⑬	ポイント⑤ 第5学年「流れる水のはたらき」と第6学年「大地のつくりと変化」の導入日を揃えることで、地域教材や博物館等の活用が可能です。 (場の共有の仕方)
	台風の天気と変化④	てこのはたらき⑪	
11	ふりこの運動⑩		ポイント⑥測定結果の平均値について算数科の学習との関連を図ります。 (他教科とのつながり)
12	人のたんじょう⑦	水よう液の性質とはたらき⑫	ポイント⑦ 第5学年の「人のたんじょう」は、主として自席での活動とし、第6学年の「水よう液の性質とはたらき」の実験を支援します。 (安全性の確保)
1	電流がうみ出す力⑫	電気の利用⑯	ポイント⑧ 第5学年の「電流がうみ出す力」と第6学年の「電気の利用」を組み合わせることで、第6学年の児童が既習の内容を想起することが可能です。 (単元のつながり)
2	物のとけ方⑮		
3		人と環境⑪	ポイント⑨ この年間計画では組み合わせてはいませんが、第5学年の「物のとけ方」と第6学年の「水溶液の性質とはたらき」を組み合わせるも可能です。 (単元のつながり)

※第5学年、第6学年ともに、105時間で作成

7 理 科

(同単元同内容同程度)

1 同単元同内容同程度指導の特徴

同単元同内容同程度での指導では、より多くの人数で学べ、多様な見方や考え方に触れられる機会が増える良さがあります。理科で行う野外観察や危険を伴う実験、観察等では目が届きやすく、安全面での配慮を行いやすくなります。また、教材の事前準備などの負担が軽減できます。

一方、理科では学年毎に目標と内容が示されていますが、下学年が上学年の内容を学習する場面が生じるので、単元配列や指導において発達段階を考慮した工夫が必要です。また、転出・転入があった場合に、理科は算数と同様に系統性が強い教科であることから、学びの逆転が生じないように補習をする、転出先の学校へ既習内容を伝える等の配慮をする必要があります。

2 同単元同内容同程度指導（A・B年度方式）による年間指導計画作成の際の留意点

(1) 問題解決能力は2年間を通して育てることを意識します。

2 学年を通して資質・能力を育てるように意識して目標を設定します。

理科で育てる資質・能力は、

第3学年：比較しながら調べる

第4学年：関係づけながら調べる

第5学年：条件に目を向けながら調べる

第6学年：推論しながら調べる

といった学年を通して育成すべき問題解決の能力として設定されています。

中学年の指導では、「比較しながら調べる」能力を2年間かけてどの単元でもしっかり育て、第4学年の単元では、さらに「関係づけながら調べる」能力も付け加えて育てていきます。

高学年の指導では、中学年で身につけた「比較しながら調べる」能力、「関係づけながら調べる」能力を基盤に置きながら、「条件に目を向けながら調べる」能力をどの単元でも育て、第6学年の単元では、さらに「推論しながら調べる」能力を育てていきます。

(2) 時数や季節、学習内容の系統性を考慮して年間指導計画を工夫します。

◎A年度・B年度それぞれの内容量や時数、難易度を同じ程度にします。

同単元同内容同程度の指導計画を立てる際には、2 学年の内容をA年度、B年度の2 カ年に再配分するため、それぞれ内容や難易度が同程度になるようにします。中学年は第3 学年が年間 90 時間、第4 学年が年間 105 時間と総時数が異なります。時数については、2 学年を通して2 学年分の標準時数を確保することが重要です。(第6 章)

◎内容の関連や系統性等を「単元のつながり」に配慮して配当します。

○内容の関連や系統性がある単元が多いため、以下の単元はA、B どちらか一方の年度にまとめて配当するとともに、同一年度内においても順序に気をつけます。

◆中学年

・「チョウを育てよう（3年）」→「こん虫の育ちとつくり（3年）」

・「たねをまこう（3年）」→「植物の育ちとつくり（3年）」→「実ができたよ（3年）」

「植物」と「動物」に分けて別の年度に担当すると、難易度を同程度にすることができます。同一年度に担当すると、「育ちとつくり」の視点で「植物」と「動物」を比較して学習を深めることができます。

- ・「春の自然（４年）」→「夏の自然（４年）」→「秋の自然（４年）」→「冬の自然（４年）」→「生き物の１年を振り返って（４年）」
- ・「物の体積と力（４年）」→「物の体積と温度（４年）」→「物のあたたまり方（４年）」
- ・「夜空を見よう（４年）」「月や星の動き（４年）」「冬の夜空（４年）」

◆高学年

- ・「種子の発芽と成長（５年）」→「花から実へ（５年）」
- ・「魚のたんじょう（５年）」→「人のたんじょう（５年）」

「植物」と「動物」に分けて別の年度に担当すると、難易度を同程度にすることができます。同一年度に担当すると、「生命の連続性」の視点で「植物」「動物」「人」を比較して学習を深めることができます。

- ・「天気の変化（５年）」→「台風の天気と変化（５年）」
- ・「物の燃え方と空気（６年）」→「植物のからだのはたらき（６年）」→「動物のからだのはたらき（６年）」→「生き物の暮らしと環境（６年）」

「植物」と「動物」に分けて別の年度に担当すると、難易度を同程度にすることができます。同一年度に担当すると「からだのつくりとはたらき」の視点で「植物」と「動物」を比較したり、「生物と環境」の視点でつながりを類推したりして学習を深めることができます。

「物の燃え方と空気」の学習を「植物のからだのはたらき」「動物のからだのはたらき」と同じ年度内の始めに行うことで、空気中の酸素、二酸化炭素と生物の関係を理解しやすくなります。

○下学年の内容を学習後、上学年の内容を学習する必要がある単元は、必ず同一年度に下学年の内容を先に、上学年の内容を後に配列します。

◆中学年

- ・「明かりをつけよう（３年）」→「電気のはたらき（４年）」

◆高学年

- ・「電流が生み出す力（５年）」→「電気と私たちの暮らし（６年）」
- ・「物の溶け方（５年）」→「水溶液の性質（６年）」
- ・「流れる水のはたらき（５年）」→「大地のつくりと変化（６年）」

◎植物を継続栽培する単元は、年度を分けて配当します。

動植物の飼育・栽培や野外観察は、季節・天気に配慮して配当します。

「たねをまこう（３年）」「植物の育ちとつくり（３年）」「実ができたよ（３年）」と、「春の自然（４年）」「夏の自然（４年）」「秋の自然（４年）」「冬の自然（４年）」「生き物の１年を振り返って（４年）」では、それぞれ植物の継続栽培を行うので、負担を考え、別々の年度に配当します。

◎学年差に配慮して、毎年度始めに理科の学び方等について取り上げます。

毎年度中学年はじめの単元は、３年生にとって理科学習の入門期であることに配慮して、理科学習の学び方や観察の仕方についての指導の時間を確保します。

(3) 算数科の内容との関連を図ります。

第３学年「物の重さをくらべよう」と算数科のはかりの使用や重さの単位に関わる単元との関連や、第５学年「ふりこの運動」と算数科の平均値に関わる単元との関連を図り、年間指導計画を作成する必要があります。複式学級の多くが算数科は学年別に指導していることから、下学年は、当該年度の算数科と関連づけやすい一方、上学年の児童は前年度に学習した内容となるため、想起する時間を設ける等の配慮が必要です。

3 同単元同内容同程度（Ａ・Ｂ年度方式）の指導にあたって

◎評価基準は同程度になるので、下学年への配慮が必要です。

同単元同内容同程度の指導を行う場合は、基本的に上学年でも、下学年でも目標及び評価規準は同じになります。下学年が上学年の内容を学習する場合は、学級や児童の実態を考慮して支援する必要があります。

学年毎に目標と内容が示されている理科では、特に下学年への配慮が必要になります。下学年の学習の状況に合わせ、上学年が補うように配慮するとよいでしょう。実験や話し合いの際は、上学年と下学年でペアやグループを組み、上学年が既習内容について下学年に説明したり、実験器具の使い方を示したりすることで、上学年の児童にとっても、下学年の児童にとっても学びが深まる好機となります。そのために、指導方法やグループの構成、座席の配置などの工夫をこらすことが大切です。

◎実験器具や薬品等は初出の単元で丁寧に指導する必要があります。

単元の配当によっては、器具や薬品の取り扱いの順序が変わることがあります。アルコールランプや顕微鏡等の実験器具、ヨウ素液や石灰水等の薬品等複数の単元で扱う物は、先に扱う単元で丁寧に指導することが必要です。

中学年理科（同単元同内容同程度）年間指導計画（例）

A 年度		B 年度	
月	単元名	月	単元名
4	春のしぜんかんさつ（3年）⑤	4	春のしぜん（4年）⑤
5	たねをまこう（3年）②	5	チョウを育てよう（3年）⑨
	かげのでき方と太陽の光（3年）⑦		風やゴムで動かそう（3年）⑩
6	植物の育ちとつくり（3年）④	6	夏のしぜん（4年）⑤
	太陽の光を調べよう（3年）⑩		
7	花がさいたよ（3年）③	7	夏の星（4年）②
9	天気と気温（4年）⑥	9	こん虫の育ちとつくり（3年）⑧
	実ができたよ（3年）③		
10	明かりをつけよう（3年）⑧	10	月や星の動き（4年）⑥
	じしゃくにつけよう（3年）⑨		秋のしぜん（4年）⑤
11		11	とじこめた空気と水（4年）⑦
			物の体積と温度（4年）⑨
12	水のすがたとゆくえ（4年）⑩	12	動物の体のつくりと運動（4年）⑤
			冬の星（4年）②
1	電気のはたらき（4年）⑫	1	冬の自然（4年）⑤
			物のあたたまり方（4年）⑭
2	つくってあそぼう（3年）⑤	2	
3	物の重さをくらべよう（3年）⑧	3	生き物の1年を振り返って（4年）

ポイント①
入門期の3年生にとっては、初めての理科の学習になるので、視点を持って観察することや、スケッチや記録の仕方などを丁寧に指導します。（下学年への配慮）

ポイント②
「春のしぜん」「夏のしぜん」「秋のしぜん」「冬のしぜん」「生き物の1年を振り返って」は、1年間を通して継続的に学習します。（単元のつながり）

ポイント③
内容に系統性がある「かげのでき方と太陽の光」と「太陽の光を調べてみよう」の順で同一年度内に配当します。（単元のつながり）

ポイント④
「夏の星」「月や星の動き」「冬の星」は、関連した内容名なので、同一年度内に配当します。（単元のつながり）

ポイント⑤
内容に系統性がある「明かりをつけよう」と「電気のはたらき」の順で同じ年度に配当します。（単元のつながり）

ポイント⑥
「閉じ込めた空気と水」「物の体積と温度」「ものの温まり方」は、関連した内容なので、同一年度内に配当します。（単元のつながり）

ポイント⑦
「明かりをつけよう」「磁石につけよう」「電気のはたらき」の3単元の活用として設定することができます。（単元のつながり）

ポイント⑧
はかりの使用や重さの単位については、算数の学習との関連を図ります。（他教科とのつながり）

2年間で（90+105）時間を確保します。

高学年理科（同単元同内容同程度）年間指導計画（例）

A 年度		B 年度	
月	単元名	月	単元名
4	天気の変化（5年）⑩	4	物の燃え方と空気（6年）⑨
5	植物の発芽と成長（5年）⑮	5	植物のからだのはたらき（6年）⑨
6	魚のたんじょう（5年）⑪	6	動物のからだのはたらき（6年）⑨
7		7	生き物のくらしと環境（6年）⑨
9	花から実へ（5年）⑤	9	流れる水のはたらき（5年）⑭
	台風と天気の変化（5年）④		
10	太陽と月の形（6年）⑧	10	物のとけ方（5年）⑮
	人のたんじょう（5年）⑦		
11	ふりこのきまり（5年）⑨	11	
12	てこのはたらき（6年）⑨	12	大地のつくり（6年）⑩
1	電気が生み出す力（5年）⑬	1	変わり続ける大地（6年）④
2	電気と私たちのくらし（6年）⑭	2	水溶液の性質とはたらき（6年）⑭
3		3	人と環境（6年）⑨
計 105 時間		計 105 時間	

ポイント①
6年生の学習内容なので、5、6年でペアを組んで実験するなど、5年生への配慮をします。
(下学年への配慮)

ポイント②
「生物のからだのはたらき」について動物と植物との共通点・相違点を意識して指導するため同年度内に配当します。
(単元のつながり)

ポイント③
「生命の連続性」について動物・植物・人の共通点・相違点を意識して指導するため、同年度内に配当します。
(単元のつながり)

ポイント④
「流れる水のはたらき」「大地のつくり」「変わり続ける大地」は関連した内容なので同年度内にこの順で配当します。
(単元のつながり)

ポイント⑤
「物のとけ方」「水溶液の性質とはたらき」は関連した内容なので同年度内にこの順で配当します。(単元のつながり)

ポイント⑥
測定結果の平均値について算数科の学習との関連を図ります。
(他教科とのつながり)

ポイント⑦
電気単元の系統性を考慮し、「電気が生み出す力」と「電気と私たちのくらし」はこの順で同年度内に配当します。
(単元のつながり)

8 生活科

(折衷案：異単元・同単元同内容異程度・同単元同内容同程度)

1 年間指導計画作成の際の留意点

生活科の目標や内容は2学年共通に示され、地域や児童の実態に応じた重点的・弾力的な指導が可能となっています。このことを踏まえ、複式学級や小規模校のよさが生きるよう、指導計画作成することが大切です。

年間指導計画作成にあたっては、基本的には、学年差に応じた異単元指導と体験の場や活動を共通に行うことのできる同単元同内容異程度指導、同単元同内容同程度指導のそれぞれのよさを取り入れた折衷案の作成が考えられます。その際、以下の点について配慮が必要です。

- ①低学年複式学級においては、第1学年と第2学年の発達差、経験差が大きいことに配慮し、各学年それぞれの児童が自らの思いや願いを実現していくことができるよう、適切な目標や内容を設定すること。
- ②たくさんの仲間と学び合い、成長し合える場を確保するために、第1学年と第2学年が交流したり協働したりして学習する場を工夫すること。

また、幼児教育から小学校教育へと円滑に移行するために、特に生活科を中核として合科的・関連的な指導の工夫を進め、指導の効果を一層高める「スタートカリキュラム」を編成・実施することが求められています。幼稚園・保育所等と小学校が互いの指導内容を理解し、連携することが重要です。

※スタートカリキュラムスタートセット（H27.1）参照

(1) 生活科における異単元指導

4・5月は入学したばかりの第1学年と、進級した第2学年の発達や経験の差が特に大きい時期であり、学校生活の入門期である第1学年に特に配慮が必要となることから、異単元での指導が考えられます。

4・5月の異単元計画例

第1学年 単元名「がっこうだいすき」

- ・なかよくなりたいな 内容（1）
- ・がっこうのことがしりたいな 内容（1）
- ・がっこうをたんけんしよう 内容（1）

第2学年 単元名「2年生だうれしいな」

- ・1年生をむかえよう 内容（1）（9）
- ・学校の春を見つけよう 内容（5）



それぞれの学年の目標を明確にしたうえで、学習内容の中に第1学年・第2学年合同の学校探検を設定することも可能

(2) 生活科における同単元同内容異程度指導

低学年の児童は、個別の学習活動から協働的な学習活動ができるようになる発達時期にあります。第1学年と第2学年の協働的な学習活動を仕組むことは、互いの学びを広げ深めたり、社会性を高めたりするうえでとても有効です。そこで、第1学年が学校生活に慣れた頃から、同単元同内容異程度で指導することが考えられます。

同単元同内容異程度の学習は、児童にとって2年間の繰り返しとなります。単なる繰り返しの学習ではなく、2年間を見通し、活動が広がったり深まったりできるように工夫する必要があります。

指導計画を立てる際には次の点に留意します。

- ・第1学年は初めての経験、第2学年は既に経験しているということを踏まえ、学年に応じたねらいや内容の程度を変える等の工夫をします。
- ・学習内容は、各学年の実態に即して弾力的に運用できるようにします。



(3) 生活科における同単元同内容同程度指導

生活科の目標、内容は2学年共通で示されています。同単元同内容異程度指導でも記述したように、第1学年が学校生活に慣れた頃から、同単元同内容同程度で指導することも考えられます。

同単元同内容同程度の学習は2年間を見通し、A年度・B年度の内容を変えて単元を配列します。例えば「おもちゃをつくろう」を、A年度は「うごくおもちゃをつくろう」、B年度は「秋のおもちゃをつくろう」で指導することが考えられます。

指導計画を立てる際には次の点に留意します。

- ・2学年共通の評価規準で指導します。
- ・飼育栽培（内容（7））については毎年度取り扱う必要があります。そのとき、A年度を飼育、B年度を栽培とするか、毎年度飼育と栽培の両方を行うのかは、各校で十分検討して決めます。
- ・第3学年社会科の学習との関連に配慮し、町探検（内容（1）（3））を行う単元は、2学年にわたって取り扱うとよいでしょう。

（※年間指導計画例参照）

2 指導に当たって

(1) 異単元指導上の留意点

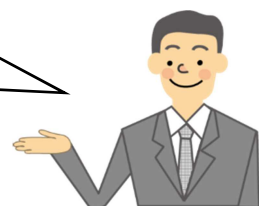
①各学年の学習の目標を明確にして活動させる

例1：単元名「がっこうだいすき（第1学年）」「2ねんせいだうれしいな（第2学年）」

第1学年、第2学年の単元や1時間毎の目標を明確し、それぞれの児童に毎時間の学習課題をしっかりと理解させることが大切です。このために学習過程・学習方法を工夫する必要があります。

	第1学年	第2学年
単元の主な目標	～生活科内容（１）を中心として～ 学校の施設や先生、友達のことが分かり 楽しく安心して遊びや生活ができるよ うにする。	～内容（５）（９）を中心として～ 自分の成長と役割を自覚するととも に、学校生活への意欲を高める。
合同の活動	学校探検をしよう！	
本時の目標	学校の施設のことがわかり、学校を支え る人と仲よくなる。	１年生に学校の様々な施設、人々やき まりを紹介することができる。
学習課題	がっこうには、なにがあるかな。どんな ひとがいて、どんなことをしているのか な。	１年生に学校にあるもの、いる人やき まりを教えてあげよう。

担任一人で指導する場合、異内容を同じ場で学習させることになります。
この場合、第1学年・第2学年それぞれに自分の学年の本時の学習課題
をしっかり理解させ、学習に取り組ませることが大切です。



②2学年が交流したり協働したりする場をつくる

例2：単元名「もうすぐ2年生（1年）」「あしたへジャンプ（2年）」

それぞれの学年が異なる学習活動を行うことになりますが、例えば、第1学年が次年度の新入生と遊ぶ計画を進める時に、経験者である第2学年からアドバイスをもらう時間をつくったり、第2学年のインタビュー活動に第1学年が協力したりするなど、伝え合い交流し合う機会を積極的に設けることが大切です。

実際の活動場面では間接指導が多くなることが予想されます。児童がより主体的に学習に取り組むことができるよう、ガイド学習などの学習方法や同時間接指導などの指導方法、学習過程等の工夫をすることが大切です。



(2) 評価について

同単元同内容異程度・異単元に関わらず、第1学年、第2学年の実態に応じて、それぞれの単元の評価規準や学習活動における具体的な評価規準を設定することが必要となります。

同単元同内容同程度では、両学年の評価規準は同じに設定しますが、個人差や経験差を考慮し、評価規準を達成できるよう個に応じたはたらきかけが必要となります。

●実際に遊ぶ中で、
みんなが楽しく遊べ
るように考え、遊び
のルールや約束を工
夫しながら遊んでいる。
【1年 思考・表現】

●みんなで楽しく遊
べるように、遊びの
ルールを考え、それを
言葉や掲示物でみんな
に伝えている。
【2年 思考・表現】

活動の評価例 単元「おもちゃをつくろう」

生活科（折衷案：異単元・同単元同内容異程度・同単元同内容同程度）年間指導計画例

★は、栽培継続単元「みんなでそだてよう」11時間

月	時数	第1学年単元名（主な内容）	時数	第2学年単元名（主な内容）	学期
4	がっこうだいすき 6時間		2年生だいれしいな 9時間		一 学 期 36 時 間 （ 二 年 ） 33 時 間
	3	なかよくなりたいたいな（1） がっこうのことがしりたいな（1）	6	1年生をむかえよう（1）（9）	
	3	がっこうをたんけんしよう（1）	3	学校の春を見つけよう（5）	
5	2	★たねをまこう（7）	2	★野さいをそだてよう（7）	
	どきどきわくわくまちたんけん 9時間				
	1	まちのことを話そう（3）			
6	2	まちたんけんの計画を立てよう（3）			
	3	★まいにちせわをしよう（7）	3	★野さいのせわをしよう（7）	
	4	まちたんけんに行こう（3）（みんなでつうがくろをあるこう1年生(1)）			
7	2	がっこうやまちのことをつたえ合おう（1）（3）			
	いきものなかよし大作せん 7時間				
	2	生きものをさがしに行こう・つかまえよう（7）	幼保と小の連携の点から、近隣の幼稚園や保育所の幼児との交流が考えられる。		
2	いきものをそだてよう（7）				
8	3	いきもののひろばにしょうたいしよう（7）			
	なつだ いっしょにあそぼうよ 2時間				
	2	くさばなやむしをさがそう つちやすな、みずであそぼう（5）			
9	2	★たねとりをしよう（7）	2	★野菜を収穫しよう（7）	
	2	★花のことを伝えよう（7）	2	★野さいのことをつたえよう（7）	
	もっとなかよしまちたんけん 21時間				
10	2	まちたんけんの計画を立てよう（3）	の単元は、同単元異内容（学年別指導）として例示していますが、同単元同内容同程度指導でも可能です。		
	2	まちのあきをさがそう（5）			
	2	はっぱやみであそぼう（5）（6）			
11	2	まちの人に会いに行こう（3）			
	3	もっとまちの人となかよくなろう（3）			
	3	ふりかえろうまちのすてきなできごと（3）（8）	校区連携の点から、近隣の小学校の児童と、互いの町を紹介し合う活動が考えられる。		
3	まちの人につたえるじゅんぴをしよう（3）（8）				
4	まちのすてきをつたえよう（3）（8）				
12	2	★サツマイモをしゅうかくしよう（7）			
	おもちゃをつくろう 10時間				
	3	うごくおもちゃをつくろう（6）	6	あきのおもちゃをつくろう（6）	
3	もっとくふうしよう（6）				
1	4	みんなであそぼう（6）			
	みんないっしょに 9時間				
	3	じぶんのいちにちをふりかえろう（2）	地域の正月行事への参加や、お年寄りを講師に冬の伝統的な遊びを教えてもらう活動が考えられる。		
3	いえのひとといっしょにしよう（2）				
3	じぶんでできることをしよう（2）				
2	ふゆをたのしもう 12時間				
	6	ふゆをたのしもう（5）（6）			
	3	図書かんへ行こう（4）※地域の実態等に応じて公民館等の施設に変更			
3	3	図書かんのことを聞いてみよう（4）			
	もうすぐ2ねんせい 15時間		あしたへジャンプ 15時間		
	3	あたらしい1ねんせいをしょうたいしよう（9）	3	大きくなった自分のことをふりかえろう（9）	
4	3	あたらしい1ねんせいといっしょにあそぼう（9）	3	すてきなところを教え合おう（9）	
	6	あたらしい1ねんせいをむかえるじゅんぴをしよう（9）	3	大きくなった自分のことをまとめよう（9）	
	3		3	ありがとうをとどけよう（1）（9）	
5	3	もうすぐ2年生（9）	3	すてきな3年生になろう（9）	

9 音楽科

(同題材同内容異程度、同題材同内容同程度)

1 年間指導計画を作成するに当たっての留意点

学習指導要領では、児童が意欲的に音や音楽とかかわりながら学習し、それらの音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる指導が求められています。

そのため、地域や学校の実態、児童の心身の発達の特性を考慮し、弾力的な指導計画が作成できるように、学年目標及び内容は、低・中・高学年の括りで示されています。そこで、2つの学年が同時に学習を行う複式学級にあっては、このことを生かすとともに、学習指導要領の趣旨を十分に理解して、創意ある指導計画を作成することが大切です。

(1) 指導計画の作成に当たって

○児童の実態等の把握

- ・児童一人一人が基礎的・基本的な内容を身に付けることができるようにするため、個に応じた指導の充実を図る必要があります。そのためには、児童や地域の実態、教育課程全体との関わりを考え、題材の目標、評価規準、指導内容、取り扱う教材等を十分に吟味し、音楽活動を通して身に付けたい力を明らかにします。
- ・複式学級の場合、上学年の前年度の学習内容（注：学習内容とは、教師にとっての指導内容と同じで、指導事項と〔共通事項〕から成ります。以下同様とします。）と扱った教材を確認する必要があります。既習の教材を扱う場合は、学習内容や授業のねらいを高めて再度取り扱ってもよいのですが、提示の仕方や上学年が下学年に教える活動を取り入れる等の工夫をし、児童主体のより充実した音楽活動になるよう心がけます。
- ・歌唱、器楽、鑑賞の教材については、学校行事や季節、生活経験、地域の実態との関連性を十分に踏まえて取扱いを工夫します。



○指導目標設定の工夫

- ・複式学級においては、学習指導要領に示されている学年ごとの学習内容を明確にし、実現できるような指導目標を設定する必要があります。

○学習内容に基づく教材設定の工夫

- ・地域の人々や隣接学校との連携を深めるとともに、長い間親しまれてきた唱歌、地域で傳承されているわらべうたや民謡、郷土の音楽や踊りなど、児童に身近な地域の音楽文化の教材化に努め、学校の実情に合わせた編曲をしたり、様々な表現活動を組み合わせたりすることにより、児童の学習に生きる教材となるような工夫をします。
- ・単式学級と複式学級が年度ごとに交互に編制される場合には、以下のことに留意します。
 - ア 類似内容の教材や学習内容の近い教材を組み合わせ、次年度を見通した年間指導計画を作成します。
 - イ 単式学級となった年度は、当該学年の児童の実態に応じた学習内容（A表現及びB鑑賞の指導事項及び〔共通事項〕）を指導します。
 - ウ 低・中・高学年によって構成される複式学級においては、学年差を考慮した学習内容を位置付けます。その際、異なる学年が同じ学習内容であっても、上学年は下学年で学んだ学習内容を発展させて高まりのある学習活動が展開されるように配慮します。
 - エ 複式学級で構成された年度の教材については、各学年の指導目標及び学習内容に照らし合わせて学習効果が期待されるものを取り扱います。

(2) 同題材同内容異程度の場合

学習内容を精選して、低・中・高学年それぞれに共通する学習内容の学びもれのないよう留意します。また、児童一人一人の能力、音楽経験の違いなどを考慮するとともに、学年相応のねらいやその活用について考慮します。

(3) 同題材同内容同程度の場合

内容の系統性、児童の音楽経験などを十分に考慮することが大切です。学年差による楽器の演奏技能や記号の理解度等を考慮し、必要に応じて同題材同内容異程度等の学年別指導との折衷案で年間指導計画を作成することも考えられます。

2 実際の指導に当たっての留意点

複式学級の音楽科の学習指導においては、学年の異なる児童のそれぞれの能力や学年の実態を踏まえた上で、協力し合いながら、主体的かつ創造的な音楽活動に取り組むことができるよう指導することが求められています。実際の授業においては、児童が楽しく活動することを通して、表現や鑑賞の能力を高めるとともに、音楽活動の喜びを味わい、生涯にわたって音楽に親しむ態度や意欲を育成するため、次のような点に配慮しながら、複式学級のよさを生かした学習活動を展開していく必要があります。

○創造的な学習活動を充実する

- ・音や音楽から聴き取り感じ取ったことをもとにして、児童自らが創意工夫しながら生き生きと音楽表現を行い、それを分かち合えるような学習の展開に努めます。
- ・児童が楽しみながら、主体的に課題に取り組めるように配慮しつつ、課題意識をもって音楽活動を展開していくことができる題材を設定します。

○自ら学ぶ意欲を育てる

- ・児童が進んで音や音楽に関わったり、豊かな音楽活動を体験したりすることができるように、〔共通事項〕を手掛かりにした教材研究を行い、学習意欲を高める学習内容を設定します。
- ・音楽を学び続ける意欲を高めるため、発展的に学習を積み重ねていくような学習活動の展開を構想します。

○指導と評価の一体化を図る

- ・上学年と下学年の音楽経験の差や少人数の利点を生かし、児童一人一人の実態に応じて、適時性のある個に応じた指導と評価を工夫します。



(1) 授業の前に

○学習の見通しをもたせるために、掲示物等により学習の流れや学習のめあての可視化を図ります。特に学年別に展開する場合は、児童が主体的に進めることができるよう示します。

(2) 授業の中で

○児童一人一人の実態を把握し、適切な個別指導を行います。また、学習活動を行う中で、児童の多様な発想を大切にし、共有することで音楽観が広がるよう支援します。

○音楽表現の創意工夫を試行錯誤する授業の場合、個やグループでの活動を取り入れるなど、児童が主体的に授業を進めることができるように配慮します。その際、教師は音楽経験の差や少人数の利点を生かし、異学年の学び合いを効果的に取り入れるとともに、音楽表現や演奏のポイント等を声かけするようにします。

○音楽表現の技能による能力差が予想される学習活動では、上学年が模唱（模奏）やアドバイスをしたり、下学年が上学年に質問をしたりする学習場面を設定します。また、お互いの音楽表現を交流し、学習内容が深まりのあるものになるように支援することが求められます。

(3) 授業の後で

○ワークシートや授業中の児童の姿の見取りをもとに、授業を振り返り、次時の展開に生かします。

中学年音楽科（同題材同内容異程度）年間指導計画（例）

【音楽科の目標】		A表現										B鑑賞		【共通事項】	
学期	学年	教材名	時数	歌謡の活動	器楽の活動	音楽づくりの活動	鑑賞の活動	ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ウ	エ
一学期	年間	巻頭	1	○											(7)音色
		明るい歌声をひびかせよう	6	○				○							(7)音色、音階や調、旋律、拍の流れる様子、リズム、テンポ、強弱、終始線
		リコーダーとなかよしになろう	6							○					(7)音色、リズム、テンポ、強弱、音の重なり
		拍のながれにのってリズムをかんじよう	7							○					(7)音色、リズム、テンポ、強弱、音の重なり
二学期	年間	いろいろな音のひびきをかんじよう	8	○						○					(7)音色、リズム、テンポ、強弱、音の重なり
		せんりつのとくちゅうをかんじよう	7	○						○					(7)音色、リズム、テンポ、強弱、音の重なり
		友だちと音や声を合わせて楽しもう	5	○						○					(7)音色、リズム、テンポ、強弱、音の重なり
		せんりつを感じよう	5	○						○					(7)音色、リズム、テンポ、強弱、音の重なり
三学期	年間	日本の音楽に親しもう	7	地域の民謡や伝統芸能などを教材開発して指導することも考えられます。											(7)音色、リズム、テンポ、強弱、音の重なり
		曲の気分を感じ取ろう	6	○						○					(7)音色、リズム、テンポ、強弱、音の重なり
		巻末	2							○					(7)音色、リズム、テンポ、強弱、音の重なり
										○					(7)音色、リズム、テンポ、強弱、音の重なり

児童や地域の実態に応じて教材を精選したり、2ヶ年を品通して教材を選択したりすることが大切です。

※ 「主な教材」、「【共通事項】」の丸数字は当該学年を示している。

學年音樂科(程度)年間指導計劃(例)

【音楽科の目標】音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を表現する能力を育て、豊かな情操を育てる。

【学年の目標】

- (1) 生活に明るく調いのあるものにする態度と習慣を育てる。
- (2) 基礎的な表現の能力を伸ばし、音楽表現の楽しさを感じるようにする。
- (3) 様々な音楽に親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を伸ばし、音楽を味あうように聴くようにする。

[illegible]

※)「主な教材」、「共通事項」の丸数字は当該学年を示している。

10 図画工作科

(同題材同内容異程度、同題材同内容同程度)

学習指導要領では、学校や児童一人一人の実態に応じ、様々な表現に対応した弾力的な指導を重視する観点から、図画工作科の目標と内容を2学年まとめて示しています。複式学級ではこのことを積極的に生かし、2年間(24か月)のカリキュラムを(教科書の上下で)計画することが可能です。また、伸ばしたい資質や能力が共通するような題材を配列することが望めます。この場合、下学年での経験やそこで修得した技術を基に上学年で学習するという学習過程が計画でき、学年差を考慮したカリキュラムを編成することが可能となります。

1 複式学級における指導計画作成の際の留意点

○複式学級だからといって、教科の目標が変わるわけではありません。単式学級同様、学習のねらいを明確にし、題材設定、扱う材料や用具等を工夫した指導計画を作成する必要があります。ただ、発達の段階の異なる2学年で構成された学級であるので、2学年を一斉に指導すればよいと安易に捉えるのではなく、学年差や発達における個人差を踏まえた上で、どんな力を伸ばせばよいのかを明確にもち指導計画を作成することが望めます。

(1) 4つの伸ばしたい資質や能力がバランスよく育まれるように題材を配列すること

「造形への関心・意欲・態度」「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」を育成することができるように、1年間で系統性をもたせ配列を考えることが大切です。また、それらの育成する資質や能力が次の学習においても生かされるよう題材間の関連を図ることも配慮する必要があります。図画工作科の特徴として、季節や学校行事と関連させた方が能力を発揮しやすいこともあります。さらに、他校との合同学習を計画する場合にも、ねらいを明確にし、ねらいが達成されるための時期や前後の題材を十分に考慮し、題材を配列することが望めます。

(2) 学年差・個人差を考え、個々の児童の特性を生かした活動ができるよう、学習活動や表現方法などに幅をもたせるような工夫をすること

学年のちがいや一人一人の児童の発達の段階に応じて、指導目標の捉え方、内容の取り扱い方、程度の押さえ方、設備や材料・用具の活用の仕方を十分に考慮し、両学年の児童が無理なく対応できるような幅のある題材を設定することが大切です。また、下学年が上学年から刺激を受けることで期待以上の活動をすることや、上学年が下学年の活動の良さをつかみとることにより、活動が一層豊かになることもあるでしょう。このように、2学年の児童が同じ教室で学習することで、相互に色々と影響し合うことを視野に入れた、題材配列や場の設定の工夫を行うことが望めます。

(3) 学習指導要領に示す各内容の指導に配当する授業時数に偏りがないように計画を立てること

「A表現（2）」について、絵や立体、工作に表す内容や指導、題材の選択に偏りがないようにし、特に、工作に表す活動の充実を図るために、工作に表すことの内容に配当する授業時数が、絵や立体に表すことの内容に配当する時数とおおよそ等しくなるように設定する必要があります。

「B鑑賞」については、「A表現」の指導に関連させて行うことを原則としていますが、指導の効果を高めるために鑑賞を独立して行うことも考えられます。いずれの場合も、形や色、作品などのよさや美しさを能動的に感じ取っていく資質や能力を育てる学習活動であることを意識し、適切に位置づけることが大切となります。

(4) 安全面での配慮を十分に行うこと

造形活動で使用する材料や用具、活動場所については事故防止に留意する必要があります。例えば下学年が木版画で彫刻刀を用いる、上学年が工作で糸のこぎりを使用するといった異程度で題材を設定する場合、事前の指導に加え活動時も事故防止に十分留意し、このような視点で題材を配列することも意識することが望まれます。

その他、第1学年の入学当初や第6学年の卒業期には学校行事などのかかわりで題材を取り入れる、学年を越えて見合ったり教え合ったりする活動場面をできるだけ保障するなどし、学校や児童の実態に応じて教科の目標が達成されるような指導計画を作成していくことが望まれます。特に、同程度の場合も異程度の場合も、低学年での複式指導においては、入学当初の児童と経験を積んだ2年生の児童とは発達の段階が大きく異なる場合も加味し、道具や材料の扱い方の学習目標など意識して計画することが大切です。さらに、1年間を通して徐々に資質や能力が高まることをふまえ、1学期に行ったことを2学期の題材に活かすような題材配列を考えることも大切です。

2 同題材同内容異程度の指導にあたって

同題材同内容異程度（1 本案・くりかえし案）の場合には、それぞれの学年の目標を立て指導と評価を一体化させ学力を保障することが求められます。この場合、同じ内容を取り扱うが、内容の発展、その系統性、児童の経験や能力の差などから考え、学年ごとにねらいを明確にしておく必要があります。また、両学年の題材を同じにしているため、上学年が下学年にアドバイスすることもできます。このことを踏まえ、授業展開も考えていくことが大切です。

※以下に、授業展開を例と示すので、留意点等参考にしてください。

～「色を重ねて～彫って見つける世界」高学年・A表現（2）～

第5学年…色の重なりから思いついたことを工夫して、一般多色木版に表す。

第6学年…板材を切ったり彫ったりして版をつくり、色の重なりや押し方を工夫して表す。

1 学習の課題把握

2 これまでの版表現の学習を振り返り、気付きや工夫について考える。

3 自分の版をつくる。

上学年が下学年にこれまでの知識から用具の扱い方などをアドバイスする場を設けることもできます。上学年は下学年とともに振り返ることで、版表現の工夫を意識しながら学習に入ることができます。

指導者は、電動糸のこぎりの扱いに注意を払っていると同時に、学級全体（下学年の動き）が見渡せるように、この位置に使用機器を配置しています。

ここの形の組み合わせがおもしろいね。

【黒板の指示】
「友人の作品を見て、面白いすてきな形を探して伝えよう」



指導者が上学年への指導を行っている時の下学年への指示を、黒板に明記しておくことで、児童だけで活動できます。

4 ローラーにインクを付け、工夫して刷る。



ローラーでインクを盛る場所を一か所にするだけで、上学年の色の工夫を下学年が学ぶ場が生まれます。また、上学年は下学年にアドバイスを行いながら新たな発見をすることも考えられます。児童同士が互いにかかわり合う中で、相乗効果を生み、互いに発展させることができます。

5 作品を鑑賞する

- ・友だちと話し合いながら、活動を振り返り作品カードに感想を書く。

版画という同じ内容で活動しているため、色の重ねや彫り方の工夫という共通の視点を通して両学年ともに鑑賞を行うことがで

3 同題材同内容同程度の指導にあたって

同題材同内容同程度（A・B年度方式・2本案）の場合には、2学年同じ目標を立て指導と評価を一体化させ学力を保障することが求められます。この場合、同じ内容を取り扱うため、内容の発展、その系統性、児童の経験や能力の差などを十分に考慮することが大切です。また、**発達の段階は異なるものの2学年同じ目標設定となるため、その評価規準の設定にあたっては十分に考慮する必要があります。**

※以下に、授業展開の例を示すので、留意点等参考にしてください。

～「おもものつるでかざっちゃおう」低学年・A表現（2）～

題材の目標…おもものつるの形や色、特徴から表したいことを見つけて、おもしろい形を考えながら教室に飾りをつくる。

1 学習の課題把握

2 学習活動

- ・つるを使ってできそうなことを発表し合う。
- ・つるに体全体で触れ、発表したことを試しながら飾りをつくる。



こうするとできるよ。ここをねじるとどうか



図画工作科のポイント！

考えながらつくる、つくりながら考える子どもの実態を踏まえ、材料に触れながら表したいことが表せる環境を設定しましょう。

3 鑑賞タイム

- ・活動を振り返り、自分の工夫したところを作品の前で発表する。
- ・友人の作品を見て工夫している点を見つけ、発表し合う。

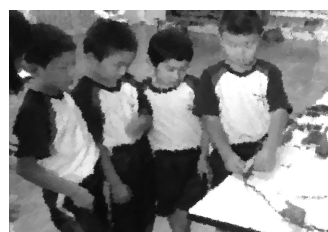
4 本時の振り返り

- ・作品カードに感想を書く。

2学年同じ目標を設定し、単式学級同様、本時のねらいを児童に示します。

2年生は前年度に別の素材を使って編んだりつないだりする活動を行っています。これまでの学習を想起し、できることを発表することで上学年の学びが下学年の学びを広げることとなります。

上学年が下学年にアドバイスしたり、互いの活動を自由に見合ったりできるような学習環境を整えることは大切なことです。その際、**両学年共に学習のねらいを達成するためにはどのような場の設定が適切か十分に留意することが求められます。**



同内容で行っているため、両学年ともに共通の視点で鑑賞を行うことができます。また、すべての子どもが発表し自分の思いを伝えることができるのも少人数の良さです。

ただやみくもに題材を配列するだけでは、図画工作科の資質や能力は育ちません。一つの学級集団ですが、学年によって発達の段階、既習事項は異なります。下学年で経験したことや身に付けた技術をもとに、上学年で学習するという流れを踏まえ、学習過程を構成するという視点やねらいをどこに設定するかを十分に考え授業を構成しましょう。



低学年図画工作科（同題材同内容異程度）年間指導計画（例）

活動場所や扱う材料を同じにし、学年ごとに異内容の題材に取り組むことができるように設定しています。



学期	第1学年（68時間）				第2学年（70時間）			
	時間	学習指導要領との関連	学習の内容	扱う材料など	時間	学習指導要領との関連	学習の内容	扱う材料など
1 学期 （1年22） （2年24）			前年に学んだことを生かして表現する題材取り入れて、学びを確認します。		2	A表現（2） 絵・工作	色画用紙、パス、はさみを使って、1年生に学校を紹介するためのカードをつくる	色画用紙、パス、はさみ
	1		オリエンテーション		1		オリエンテーション	
	2	A表現（2） 絵画	クレヨン・パスを使って好きなものを描く	クレヨン・パス	2	A表現（2） 絵画	クレヨン・パスを使って楽しかった活動を思い出して描く	クレヨン・パス
	2	A表現（1） 造形遊び	砂場で砂とのかかわりながら、造形的な表現を工夫する	木切れ、石	2	A表現（1） 造形遊び	砂場で砂とのかかわりながら、造形的な表現を工夫する	木切れ・石
	2	A表現（2） 工作	色紙の切り方を楽しんだり、色紙を重ねたりしながら、教室の飾りをつくる	色紙、ハサミ	2	A表現（2） 工作	カラーセント紙の切り方を工夫したり、重ねたりしながら、出来上がった形をつなげて新たな飾りをつくる	内容が異なっても、同様な材料を使うことで、互いに鑑賞し合う活動を取り入れることができます。
	2	A表現（2） 絵画	共用絵具を用いて、筆の扱いや塗り方を工夫しながら、思いついた形を描く	共用絵具・筆	2	A表現（2） 絵画	自身の絵の具を用いて、色と色を混ぜ合わせながら新たな色をつくりだし、思いついた形を描く	絵具
	2	A表現（2） 立体	粘土を丸めたり、ちぎったりしながら自分の好きなものをつくる	油粘土	2	A表現（2） 立体	粘土を丸めたり、ちぎったりしながら遠足の楽しかった様子を思い出し、粘土で表す	油粘土
	3	A表現（2） 工作	紙を折ったり立てたりしながら（紙を切り、立てて立体とさせる）カードをつくる	ハサミ、ペン	3	A表現（2） 工作	紙を折ったり、立てたり重ねたりしながら（紙を切り、立てて立体とさせる、立体を重ねる）カードをつくる	ハサミ、カッター
	2	A表現（2） 絵画	絵具やペンを用いて好きなことを描く	自分の絵具、ペン	2	A表現（2） 絵画	絵具やペンを用いて、体験したことを思い出して描く	自分の絵具、ペン
	4	A表現（2） 工作	ビニール袋やセロファンなど光を通す材料を使って、動物をつくる	ビニール袋、カラーセロファン	4	A表現（2） 工作	ビニール袋やセロファンなど光を通す材料を使って、水に浮かべて遊ぶものをつくる	ペットボトル、カラーセロファン、ビー玉
2 学期 （28）	2	A表現（1） 造形遊び	色水をつくりながら新たな色の作り方や並べ方を工夫する	色水・ペットボトル	2	A表現（1） 造形遊び	色水をつくりながら新たな色の作り方や並べ方を工夫する	色水・ペットボトル
			活動内容を同じに設定しても、子ども達の発達の段階は異なります。各学年でねらいを明確にしておくことが大切です。					
	6	A表現（2） 立体	箱と箱を組み合わせて工夫しながら動物をつくる	紙を主とする箱など	6	A表現（2） 立体	透明な容器などを使い、中に入れる材料や容器の形を考えながら動物をつくる	ペットボトル、ペン、綿など中に入れるもの
	2	A表現（1） 造形遊び	ローラーで遊びながら色をつくることを楽しむ	ローラー、共用絵具	4	A表現（2） 絵画	紙を思いついた形に切り、ローラーで色付ける方法を工夫し、型紙版画に表す	ローラー、カッターハサミ、共用絵具
	2	A表現（2） 絵画	ローラーを使って、長い布に模様を描きのれんをつくる	ローラー、共用絵具	児童の実態においては、扱う題材の時間が両学年で異なる場合があります。学年によってはしっかり時間を設定することが必要な場合もあります。その場合は他学年の題材を短時間の組み合わせにするなどの工夫が必要となります。			
	4	A表現（2） 工作	形の周りに貼ったり、描いたりして別の箱につくりかえる	色画用紙、モールなど	4	A表現（2） 工作	形の周りに貼ったり、切ったりして別の形の箱にする（動かすと別の形になるようにする）	色画用紙、モールなど

- ・前後の学年で扱う材料や用具について確認し、必要に応じて、当該学年より前の学年において初歩的な形で取り上げたり、その後の学年で繰り返し取り上げたりし、経験を重ねながら、児童がそれらの適切な扱いに慣れるように題材を配列しましょう。
- ・各学年のねらいを明確にし、上学年は前年に行ったことを踏まえて学習に入ることができるようにしたり、下学年の活動を見ながらさらにアイデアをふくらませたりすることができるような授業づくりを心がけましょう。
- ・第5学年では木版による一般多色版画を、第6学年では一般多色版画の応用として作成した版を何度も押しながら表現をしていくような題材を設定することもあるでしょう。両学年ともに版表現を行うことで、下学年は上学年の色の付け方や彫刻刀の扱い方を学び、上学年は下学年にアドバイスをを行うことで、材料や用具の取り扱い方の確認にもなります。

低学年図画工作科（同題材同内容同程度）年間指導計画（例）

1年間で、前半に基礎的な内容を、後半に発展的な内容を実施することで、下学年でも学びが徐々に深まるよう留意して設定しています。



A年度 第1学年（68時間）第2学年（70時間）					B年度 第1学年（68時間）第2学年（70時間）				
学期	時間	学習指導要領との関連	学習の内容	取り扱う材料など	時間	学習指導要領との関連	学習の内容	取り扱う材料など	
1学期 （1年22） （2年24）	(2)	A表現（2） 絵・工作	色画用紙、パス、はさみを使って、1年生に学校を紹介するためのカードをつくる	色画用紙 パス、はさみ	(2)	A表現（2） 絵・工作	色画用紙、パス、はさみを使って、1年生に学校を紹介するためのカードをつくる	低学年では2年生の実施する題材があります。この際、前年に学んだことを生かして現する題材を取り入れて、学びを確認します。	
	1	オリエンテーション			1	オリエンテーション			
	2	A表現（2） 絵画	クレヨン・パスを使って好きなものを描く	クレヨン・パス	2	A表現（2） 絵画	共用絵具を用いて、筆の扱いや塗り方を工夫しながら、ついた形を描く	共用絵具・筆	
	2	A表現（1） 造形遊び	砂場で砂とのかかわりながら、造形的な表現を工夫する	砂場	2	A表現（1） 造形遊び	様々な大きさの箱をならべ材料とのかかわりを通して、新たな造形的な表現を工夫する	空箱	
	2	A表現（2） 工作	色紙の切り方を楽しんだり、色紙を重ねたりしながら、教室の飾りをつくる	色紙 ハサミ	2	A表現（2） 工作	紙を折ったり立てたりしながら（紙を切り、立てて立体とさせる）カードをつくる	ハサミ、ペン	
	4	A表現（2） 絵画	共用絵具を用いて、筆の扱いや塗り方を工夫しながら好きなことを描く	共用絵の具、筆	3	A表現（2） 工作	紙粘土や紙を使って、おうちの人にメダルをつくる	紙粘土、紙、ひもなど	
	2	A表現（2） 絵画	クレヨン・パスを使って楽しかった活動を思い出して描く	クレヨン パス	2	A表現（2） 立体	粘土を用いていて、体験したことを思い出してつくる	粘土	
	2	A表現（1） 造形遊び	新聞紙を折る、ちぎる、丸めるなどしながら材料とのかかわりを通して、新たな造形的な表現を工夫する	新聞紙	2	A表現（1） 造形遊び	色水をつくりながら新たな色の作り方や並べ方を工夫する	色水・ペットボトル	
	3	A表現（2） 工作	好きな模様を並べ、色紙を貼るなどしながらカードをつくる	クレヨン、 パス、絵具	4	A表現（2） 絵画	楽しいこと、夢などを思い出して描く	クレヨン、 パス、絵具	
	4	A表現（2） 立体	粘土を使って遠足の楽しかった出来事を思い出して作る	粘土	4	A表現（2） 工作	好きな模様を並べ、色紙を貼るなどしながらカードを思いついて描く・カードの開き方を工夫する	クレヨン、 パス、絵具ハサミ	
2学期 （28）	4	A表現（1） 造形遊び	校内にあるものを並べ、材料とのかかわりを通して造形的な表現を工夫する	校内にある材料	下学年（年度の前半）で学習したことを基に上学年（年度の後半）で学習するという流れを踏まえ学習過程を構成することは、児童の学びを深めるという意味では大切となります。単に内容を配列するだけではなく、				
	4	A表現（2） 絵画	楽しいこと、夢などを思い出して、工夫して描く	水彩絵の具					

下学年（年度の前半）で学習したことを基に上学年（年度の後半）で学習するという流れを踏まえ学習過程を構成することは、児童の学びを深めるという意味では大切となります。単に内容を配列するだけでなく、経験が生かされるようにすることや2学年が互いに関わり合う中で、相乗効果を生みながら学習を発展させることができるよう、学習過程を考えましょう。



- 各年度において下学年がハードルの高い課題に直面することのないよう計画を作成しましょう。
- 同題材同内容同程度（A・B年度方式・2本案）で行う場合は、1つの題材に対する目標は2学年とも同じであるため指導内容・評価規準も同じになります。よって、2学年共に十分な学びが深まる題材配列となっているか、十分に考慮することが望まれます。
- 同題材同内容異程度同様、材料や用具については、他学年での取り扱いを確認し、必要に応じて、当該学年より前の学年において初歩的な形で取り上げたり、その後の学年で繰り返し取り上げたりし、経験を重ねながら、児童がそれらの適切な扱いに慣れるようにしましょう。（どの学年でどの材料や用具を扱うかは小学校学習指導要領解説図画工作編（p. 62～）を参考にすること。）

＜共通して大切にしたいこと＞

- カメラなどの機器とじっくり向き合うなど、様々な材料や用具とのかかわる機会を多くもつことができるのが少人数で構成される複式学級の良さです。この点も考慮し題材を設定しましょう。
- B鑑賞については、鑑賞する対象のよさや美しさなどを自ら感じ取り味わうようにすることが大切です。同じ作品を鑑賞する題材を設定することで、下学年は上学年の発見に刺激を受けたり、上学年は前年の気づきを思い出しながら新たな発見をしたりすることができます。
- 子ども同士が互いに関わり合う中で、相乗効果を生みながら学習を発展させるところが複式の良さです。特に、同内容の学習を組みやすい図画工作においては、その利点を生かした題材構成、授業構成が求められます。

11 家庭科

(折衷案：同題材異内容・同題材同内容異程度・同題材同内容同程度)

(折衷案：同題材同内容同程度・同題材同内容異程度)

※本文で使用する「内容」とは、学習指導要領における「内容」のことを指します。

1 年間指導計画作成の際の留意点

- 学習指導要領では、家庭科の学年の目標及び内容は2学年まとめて示されています。内容は、内容AからDで示されていますが、指導の順序や4つの内容別に指導することを示しているものではありません。各内容項目の指導の順序及び各事項の重点の置き方に工夫を加え、効果的な学習指導ができるように題材を構成し、2学年にわたって適切に配列します。
- 題材の構成に当たっては、目標を明確にし、その達成が図れるように内容や方法を吟味します。関連する内容を続けて学習する題材、関連する内容を組み合わせた題材、児童の実態を考慮した独自の題材などを構成し、学校独自の指導計画を作成することにより、学習の効果が高まるようにします。
- 内容A（1）「自分の成長と家族」ア（成長の自覚、家庭生活と家族の大切さ）については、2学年間の学習の見通しをもたせるため第5学年の最初に配列します。併せて、内容Aから内容Dの各内容と関連を図って学期や学年の区切りなどの適切な時期に配列します。
- 内容B（3）「調理の基礎」及び内容C（3）「生活に役立つ物の製作」については、2学年にわたって取り扱い、平易なものから段階的に学習できるよう計画します。
- 同題材同内容同程度では、2学年合計の授業時数が115時間を下回らないようにします。
- 内容確認表（表1）などを用いて、

(表1)

各内容項目の関連を図ってバランスよく題材が配列されているか、指導すべき内容に漏れがないか等を確認します。内容項目の系統性や発展性を確認するうえでも有効です。

月	内容項目事項	時数	A家庭生活と家族			B日常の食事と調理の基礎									
			(1)	(2)	(3)	(1)		(2)		(3)		(4)		(5)	
			ア 家族の大切さ、家庭生活と	イ 家庭生活の工夫	エ 家族との関わり合いや団らん	ア 食生活の大切さ	イ 食生活の大切さ	ウ 食生活の大切さ	エ 食生活の大切さ	オ 食生活の大切さ	カ 食生活の大切さ	ク 食生活の大切さ	ケ 食生活の大切さ	コ 食生活の大切さ	サ 食生活の大切さ
4	家庭科の学習をはじめよう	1	○												
	1 わたしと家族の生活	1	○												
	2 はじめてみようクッキング	2													
	(1) クッキングはじめの一歩	2													
5	(2) ゆでてみよう	3													
	(3) 野菜をゆでておいしく食べよう	2													

(1)折衷案（同題材異内容、同題材同内容異程度、同題材同内容同程度）年間指導計画の作成にあたって
この折衷案は、同題材異内容、つまり学年別指導を中心に、同題材同内容異程度、同題材同内容同程度を取り入れた年間指導計画です。

- 内容A（1）アを各学年の最初に計画した場合、第5学年は第4学年までの学習を踏まえて2年間の学習の見通しがもてるようにし、第6学年は第5学年の学習を踏まえて成長した自分を自覚したうえで1年間の学習の見通しがもてるようにするなど、学年に応じたねらいや学習活動を設定します。その際、第6学年が第5学年に学習した内容や成長した自分について発表する活動などを設定すると、第5学年は第6学年の姿に憧れや目標を抱き、第6学年は自分の成長や上級学年としての自覚が芽生え、両学年に学習意欲を喚起することが期待できます。
- 内容C（3）「生活に役立つ物の製作」については、製作する物は具体的に指定されていません。児童の実態に応じて楽しく学習でき、基礎的・基本的な技能などを繰り返し学習できるよう題材を配列し、平易なものから段階的に題材を発展させながら定着を図ることが大切です。2学年間を見通した題材配列・技能確認表（表2）を作成すると、いつ、何を製作し、どのような技能を身に付けさせるかなどを明確にすることができ、計画的かつ重点的に指導するのに役立ちます。

(表2)

◎は重点を置くもの

題材名 技能	はじめてみようソーイング		わくわくミシン		楽しくソーイング	
	フェルトの小物	布の小物				
	時間	時間	時間	時間	時間	時間
	第5学年	第6学年	第5学年	第6学年	第5学年	第6学年
裁断		◎				
しるし付け		◎				
まち針の取扱い		○				
玉結び・玉止め	◎	○				
なみ縫い	◎	○				
返し縫い	◎	◎				
かがり縫い	◎					
ボタン付け	◎	◎				
ミシンの直線縫い						
針・はさみの取扱い	◎	○				
ミシンの取扱い						
アイロンの取扱い		◎				

(2) 折衷案（同題材同内容同程度、同題材同内容異程度）年間指導計画の作成にあたって

この折衷案は、同題材同内容同程度（A・B年度方式、2 本案）を中心に、系統性の強い内容を同題材同内容異程度とした年間指導計画です。

○内容B「日常の食事と調理の基礎」については、1 食分の献立を考えるために必要な栄養や食品に関する内容をいつ、どのように指導するか検討が求められます。具体的には、A年度B年度ともに内容B（2）ウ（1 食分の献立）を指導する前に、内容B（2）ア（体に必要な栄養素の種類と働き）及びイ（食品の栄養的な特徴と組合せ）を指導できるよう計画します。特別活動等で行われる食育と関連を図ることも考えられます。

○内容B（3）「調理の基礎」については、初めて調理をする児童がいることも考えられるので、A年度B年度ともに、調理実習の前に調理室やこんろの使い方等について指導できるよう計画します。なお、第6 学年は2 度目の学習であるため、第5 学年に調理室を案内したりお茶を入れたりする学習活動を設定するなどして、既習内容の定着を図るための学習活動を付与することなどが考えられます。

○内容B（3）「調理の基礎」で取り上げる、ゆでたりいためたりする加熱操作については、繰り返し学習できるよう題材を配列し、材料を変えたり調理法を組み合わせたりして定着を図ることが大切です。題材配列・内容確認表（表3）を作成すると、計画的かつ重点的に指導するのに役に立ちます。

(表3)

◎は重点を置くもの

学年		A年度		B年度	
題材名		はじめてみようクッキング	食べて元気に	いためてつくろう朝食のおかず	くふうしようおいしい食事
時間		時間	時間	時間	時間
調理する物		ゆで野菜	米飯 みそ汁	野菜いため	ゆでたりいためたりするおかず
(3) 調理の基礎	ア	調理計画	○	○	◎
		計量	◎	◎	○
	イ	洗い方	◎	○	○
		切り方	○	◎	◎
		味の付け方		○	◎
		盛り付け・配膳	○	◎	◎
	ウ	後片付け	◎	○	○
		ゆで方	◎		◎
		いため方		◎	◎
	エ	米飯		◎	
		みそ汁		◎	
	オ	用具や食器の取扱い	○	◎	○
		こんろの安全な取扱い	◎	○	○

2 指導にあたって

(1) 授業の前に

○学習のねらいの明確化

家庭科は複数の内容項目を組み合わせることで題材を構成することが多く、複式学級では2学年が同内容を同程度又は異程度で学習する場合もあることから、各学年の学習のねらいを明確にすることがより一層大切です。

○児童の実態把握

複式学級では、児童間の学年差への対応が求められることから、内容に関する児童の興味・関心、身に付けている知識・技能などを把握して、児童一人一人が主体的に学べるよう題材を構成します。

○教材・教具の工夫

教材・教具を整えることは実践的・体験的な活動の充実や学習効果に大きな影響を及ぼします。児童がより一層主体的に学習を進められるようにするため、次のようなものが考えられます。

- ・調理手順カード（目的：調理の見通しをもつ、安全や衛生への注意を喚起する）
- ・切り方見本カード（目的：切り方を確認する、自己評価・相互評価の判断基準にする）（図1）
- ・製作物の段階標本（目的：製作の見通しをもつ、自己評価・相互評価の判断基準にする）
- ・ICT機器（目的：実習の手順や児童がつまづきやすい技能などを必要な時に確認する）



（図1）



（図2）



（図3）

（資料提供：さいたま市立泰平小学校）

○教育環境の整備と事故の防止

製作や調理などの実習を安全で円滑に行うために事故の防止に留意します。例えば、用具の保管場所が一目でわかるもの、熱源や包丁の取扱いを示したもの（図2、3）等を設置したり掲示したりします。また、実習中の児童の動線を考慮して、必要な用具等を配置します。

(2) 授業の中で

○上下学年の交流を図った学習活動

学習のねらいに応じて、上下学年の交流を図って学習を展開することで、内容に関する知識が増えたり、意見交換をする中で事象を多面的に考えられたりするなどの学習効果が期待できます。

○地域ボランティアの活用

製作や調理などの実習をする場合、器具の操作や安全への注意等を個別に支援するため地域ボランティアの活用が考えられます。事前に授業のねらいや役割分担を共通理解しておくことが求められます。

(3) 授業の後で

同題材同内容異程度で指導する場合、各学年の学習のねらいの程度が異なることから、評価規準も異程度で設定します。児童一人一人をきめ細かく多面的に評価して、その結果を次の指導に生かすことが大切です。

高学年家庭科(折衷案:同題材異内容・同題材同内容異程度・同題材同内容同程度)年間指導計画(例)[A年度]

第5学年				第6学年			
月	題材名	時数	主に関連する学習指導要領	月	題材名	時数	主に関連する学習指導要領
4	さあ始めよう、家庭科の学習	1	A(1)ア	4	さあ始めよう、家庭科の学習	1	A(1)ア
	1 我が家にズームイン		4		1 朝食から健康な1日の生活を		11
	(1)家庭生活と家族を見つめよう	1	A(2)ア		(1)毎日の朝食をふり返ろう	1	B(1)ア
	(2)だんらんのための仕事から始めよう	2	B(3)エ	5			
5	(3)家庭生活を工夫しよう	1	A(3)ア	6	(2)いためて朝食のおかずを作ろう	9	B(2)イ B(3)アウ
	2 おいしい楽しい調理の力		7		(3)朝食から健康な生活を始めよう	1	A(2)イB(1)ア B(2)イ
	(1)料理の作り方を考えよう	1	B(3)ア		2 めざそう買い物名人		7
	(2)ゆでる調理をしよう	5	B(3)アイウ		(1)お金の使い方を見つめよう	1	D(1)ア
6	(3)工夫しておいしい料理にしよう	1	B(3)ウ		(2)買い物名人になろう	4	D(1)イ
	3 めざそう買い物名人		7		(3)買い物名人として生活しよう	2	D(1)アイ
	(1)お金の使い方を見つめよう	1	D(1)ア	7			
	(2)買い物名人になろう	4	D(1)イ		3 思いを形に生活に役立つ布製品		10
	(3)買い物名人として生活しよう	2	D(1)アイ		(1)目的に合った形や大きさとぬい方を考えよう	1	C(3)ア
9	4 ひと針に心をこめて		9	9			
	(1)糸と針を使ってできることを探そう	1	C(3)ウ		(2)工夫して作ろう	8	C(3)アイウ
10	(2)手ぬいこトライ!	7	C(3)イウ	10			
	(3)手ぬいのよさを生かそう	1	C(3)ウ		(3)衣生活を豊かにしていこう	1	C(3)イ
	5 私の仕事と生活時間		3		4 まかせてね 今日の食事		11
	(1)家庭の仕事をしていますか	1	C(3)ア		(1)1食分の献立を工夫しよう	1	B(2)ウ
	(2)時間の使い方を工夫しよう	1	C(3)イウ		(2)家族が喜ぶ食事を作ろう	9	B(2)ウB(3)イ D(1)イ
	(3)工夫して家庭の仕事を続けよう	1	C(3)イ		(3)楽しく食事をするために工夫しよう	1	B(1)イ
11	6 食べて元気!ご飯とみそ汁		11	11	冬休みにチャレンジ〜これまでの学習を生かして〜	1	A(1)ア
	(1)毎日の食事を見つめよう	1	B(1)ア				
12	(2)なぜ食べるのか考えよう	9	B(2)アB(3)エ	12			
	(3)毎日の食生活に生かそう	1	B(3)エ		5 物を生かして住みやすく		7
	冬休みにチャレンジ〜これまでの学習を生かして〜	1	A(1)ア		(1)身の回りの物や生活の場を見つめよう	1	C(2)ア
1	7 物を生かして住みやすく		7	1	(2)身の回りをきれいにしよう	5	C(2)アD(2)ア
	(1)身の回りの物や生活の場を見つめよう	1	C(2)ア		(3)物を生かして快適に生活しよう	1	C(2)ア
2	(2)身の回りをきれいにしよう	5	C(2)アD(2)ア	2	6 あなたは家庭や地域の宝物		6
	(3)物を生かして快適に生活しよう	1	C(2)ア		(1)家族の一員として家庭や地域でできること	2	A(3)イ
	8 ミシンにトライ! 手作りで楽しい生活		9		(2)心のつながりを深めよう	4	A(3)イ C(3)イウ
	(1)布で作られた物のよさを見つけよう	1	C(3)ア		成長したわたし	1	A(1)ア
	(2)ミシンにトライ!	7	C(3)イウ				
	(3)作品を楽しく使おう	1	C(3)イ		総授業時数	55	
3	成長したわたし	1	A(1)ア				
	総授業時数	60					

- できるだけ上下学年の交流を図って学習できるように 部分は、同題材同内容同程度で指導し、 部分は同題材同内容異程度で指導します。
- 内容B(3)及び内容C(3)で構成される題材は、段階的に学習できるようにします。
- 複式学級から単式学級になった場合は、当該学年の年間指導計画に沿って指導します。単式学級から複式学級になった場合は、 部分や 部分を同題材同内容同程度・異程度で指導し、学級の実態に応じて弾力的に運用します。
- 内容B(3)及び内容C(3)の実習で扱うものは、児童の実態や既習内容の関連等に留意して選定します。
- 季節、学校行事、地域等との関連に考慮して題材を配列します。

高学年家庭科(折衷案:題材異内容・同題材同内容異程度・同題材同内容同程度)年間指導計画(例)「B年度」

第5学年			第6学年		
題材名	時数	主に関連する学習指導要領	月	題材名	時数 主に関連する学習指導要領
さあ始めよう、家庭科の学習	1	A(1)ア	4	さあ始めよう、家庭科の学習	1 A(1)ア
1 我が家にズームイン		4	5	1 朝食から健康な1日	第6学年が第5学年で学習した内容を紹介する活動を取り入れ、2学年が交流して学ぶ機会にすることもできます。
(1)家庭生活と家族を見つめよう	1	A(2)ア	6	(1) 毎日の朝食をふり返る	
(2)だんらんのための仕事から始めよう	2	B(3)エ	7	(2) いためて朝食のおかずを作ろう	
(3)家庭生活を工夫しよう	1	A(3)ア	8	(3) 朝食から健康な生活を始めよう	1 A(2)イB(1)ア B(2)イ
2 おいしい楽しい調理の力		7	9	2 夏をすずしくさわやかに	7
(1)料理の作り方を考えよう	1	B(3)ア	10	(1) 夏の生活を見つめよう	1 C(2)イ
(2)ゆでる調理をしよう	5	B(3)アイウ	11	(2) 快適な住まい方や着方をしよう	5 C(1)アイ C(2)イ
(3)工夫しておいしい料理にしよう	1	B(3)ウ	12	(3) 夏の生活を工夫しよう	1 C(2)イ D(2)ア
3 夏をすずしくさわやかに		7	1	3 思いを形に生活に役立つ布製品	10
(1)夏の生活を見つめよう	1	C(2)イ	2	(1) 目的に合った形や大きさやぬい方を考えよう	1 C(3)ア
(2)快適な住まい方や着方をしよう	5	C(1)アイ C(2)イ	3	(2) 工夫して作ろう	8 C(3)アイウ
(3)夏の生活を工夫しよう	1	C(2)イ D(2)ア	4	(3) 衣生活を豊かにしていこう	1 C(3)イ
4 ひと針に心をこめて		9	5	4 まかせてね 今日の食事	11
(1)糸と針を使ってできることを探そう	1	C(3)ウ	6	(1) 1食分の献立を工夫しよう	1 B(2)ウ
(2)手ぬいこトライ!	7	C(3)イウ	7	(2) 家族が喜ぶ食事を作ろう	9 B(2)ウB(3)イ D(1)イ
(3)手ぬいのよさを生かそう	1	C(3)ウ	8	(3) 楽しく食事をするために工夫しよう	1 B(1)イ
5 私の仕事と生活時間		3	9	冬休みにチャレンジ～これまでの学習を生かして～	1 A(1)ア
(1)家庭の仕事をしていますか	1	C(3)ア	10	5 冬を明るく暖かく	7
(2)時間の使い方を工夫しよう	1	C(3)イウ	11	(1) 冬の生活を見つめよう	1 C(2)イ
(3)工夫して家庭の仕事を続けよう	1	C(3)イ	12	(2) 快適な住まい方や着方をしよう	5 C(2)イ
6 食べて元気!ご飯とみそ汁		11	1	(3) 冬の生活を工夫しよう	1 C(2)イ D(2)ア
(1)毎日の食事を見つめよう	1	B(1)ア	2	6 あなたは家庭や地域の宝物	6
(2)なぜ食べるのか考えよう	9	B(2)アB(3)エ	3	(1) 家族の一員として家庭や地域でできること	2 A(3)イ
(3)毎日の食生活に生かそう	1	B(3)エ	4	(2) 心のつながりを深めよう	4 A(3)イ C(3)イウ
冬休みにチャレンジ～これまでの学習を生かして～	1	A(1)ア	5	成長したわたし	1 A(1)ア
7 冬を明るく暖かく		7	6	総授業時数	55
(1)冬の生活を見つめよう	1	C(2)イ	7		
(2)快適な住まい方や着方をしよう	5	C(2)イ	8		
(3)冬の生活を工夫しよう	1	C(2)イ D(2)ア	9		
8 ミシンにトライ! 手作りで楽しい生活		9	10		
(1)布で作られた物のよさを見つけよう	1	C(3)ア	11		
(2)ミシンにトライ!	7	C(3)イウ	12		
(3)作品を楽しく使おう	1	C(3)イ			
成長したわたし	1	A(1)ア			
総授業時数					

1年間の学習を通して成長した自分に気づき、第6学年の学習や家庭で実践する意欲を高めます。

ペア学習により、第6学年が第5学年にミシンの操作方法をアドバイスする活動を取り入れることも考えられます。

2年間の学習を通して成長した自分に気付かせ、
中学校技術・家庭科の内容と結びつけて、円滑
な接続が図れるように配慮します。

高学年家庭科(折衷案:同題材同内容同程度・同題材同内容異程度)年間指導計画(例)

A 年度					B 年度				
月	題材名	時数		主に関連する学習指導要領	月	題材名	時数		主に関連する学習指導要領
		5年	6年				5年	6年	
4	家庭科の学習をはじめよう ■	1	1	A(1)ア	4	家庭科の学習をはじめよう ■	1	1	A(1)ア
	1 わたしと家族の生活	1	1	A(1)ア		1 わたしの生活時間			
	2 はじめてみようクッキング					(1)生活時間を見直そう	1	1	A(2)イ
	(1)クッキングははじめの一步 ●■	2	1	B(3)アオ		(2)生活時間をくふうしよう	1	1	A(2)イ
5	(2)ゆでてみよう	3	3	B(3)イウ		2 いためてつくろう朝食のおかず			
	(3)野菜をゆでておいしく食べよう	2	2	B(3)イウ		(1)朝食を考えよう	1	1	A(1)アA(3)ア
	3 かたづけよう身の回りの物					(2)五大栄養素の働き	1	1	B(2)ア
6	(1)身の回りに目を向けよう	1	1	C(2)ア	5	(3)3つの食品グループとその働き ●■	2	1	B(2)イ
	(2)整理・整とんをしよう	1	1	C(2)ア		(4)クッキングははじめの一步 ●■	2	1	B(3)アオ
	(3)物を生かす工夫をしよう	1	1	D(2)ア	6	(5)いためてみよう	5	5	A(3)イウオ
	4 暑い季節を快適に					3 クリーン大作戦			
	(1)すずしい住まい方をくふうしよう	3	3	C(2)イ	7	(1)そうじのしかたを見直そう	2	2	C(2)ア
7	(2)すずしい着方をくふうしよう	1	1	C(1)ア		(2)そうじのしかたをくふうしよう	3	3	C(2)ア
	(3)洗濯してみよう	4	4	C(1)イD(2)ア	9	夏休みチャレンジ報告会	1	1	A(1)ア
9	夏休みチャレンジ報告会	1	1	A(1)ア		5 はじめてみようソーイング			
	5 はじめてみようソーイング					(1)針と糸にチャレンジ ●■	3	1	C(3)イウ
	(1)針と糸にチャレンジ ●■	3	1	C(3)イウ	10	(2)手ぬいで楽しい小物づくり	4	4	C(1)イC(3)イ
10	(2)手ぬいで楽しい小物づくり	4	4	C(1)イC(3)イ		5 じゃずに使おうお金と物			
	6 食べて元気に					(1)私たちの生活とお金	1	1	D(1)ア
	(1)なぜ食べるのか考えよう	1	1	B(1)ア		(2)お金や物の使い方を考えよう	2	2	D(2)ア
	(2)五大栄養素の働き	1	1	B(2)ア		(3)買い物のしかたを考えよう	2	2	D(1)イ
	(3)3つの食品グループとその働き ●■	2	1	B(2)イ	11	6 くふうしようおいしい食事			
11	(4)ご飯とみそ汁とつくろう	7	7	B(3)アイエオ		(1)バランスのよいこんだてを考えよう	4	4	B(2)ウ
	7 寒い季節を快適に				12	(2)身近な食品でおかずをつくろう	6	6	B(3)アイウオ
12	(1)あたたかい着方をくふうしよう	2	2	C(1)ア		(3)楽しく、おいしい食事をくふうしよう	1	1	B(1)イ
	(2)明るくあたたかく住まうふう	4	4	C(2)イ		7 やってみよう家庭の仕事			
1	8 わくわくミシン					(1)できることを増やそう	1	1	A(2)ア
	(1)ミシン縫いにチャレンジ ●■	3	2	C(3)イウ		(2)家族に協力して仕事をしよう	1	1	A(2)ア
2	(2)計画を立てて、つくってみよう	5	5	C(1)アイ	1	8 楽しくソーイング			
	9 共に生きる生活					(1)ミシン縫いにチャレンジ ●■	3	2	C(3)イウ
3	(1)わたしたちの生活と地域	3	3	A(3)イ	2	(2)つくりたい物を考えよう	2	2	C(3)ア
	(2)わたしの気持ちを伝えよう	3	3	A(3)イ		(3)計画を立ててつくろう	6	6	C(3)アイ
	(3)考えようこれからの生活	1	1	A(3)イ	3	(4)楽しく使おう	1	1	C(3)イ
	総授業時数	60	55			9 家族とほっとタイム			
						(1)楽しく団らん	1	1	A(3)ア
						(2)つながりを深めよう	1	1	A(3)ア
						成長したわたしたち	1	1	A(1)ア
						総授業時数	60	55	

<年間指導計画作成上で配慮したこと>

- 部分は、同題材同内容異程度で指導する。製作については、第5学年と第6学年の内容に程度の違い(例:製作する物、製作に用いる技能、材料の扱い等)を設け、基礎的なものから応用的なものへ、簡単なものから難しいものへ、要素的なものから複合的なものへと次第に発展するようにしました。学年差を考慮して、製作する物に違いを設けたり、児童の個人差を考慮して興味・関心等に応じた学習コース(課題別、進度別、習熟度別等)を児童自らが選択して学習できるようにするなどの工夫が考えられます。
- 部分は、第5学年と第6学年の年間授業時数の差(5単位時間)を利用して、栄養と食品に関する内容を学習した上で献立の学習ができたり、手縫いやミシン縫いの基礎的な知識・技能を学習した上で製作ができたりするようにしました。また、栄養と食品に関する学習を毎年同じ時期に配列して定例化することも考えられます。
- 部分では、第6学年が第5学年に説明したり模範を示したりするような学習活動を取り入れるなどして、複式学級のよさを生かした学習活動が展開できるようにしました。第5学年は成長した自分を具体的に描くことができ、第6学年は第5学年に見本を示したり、教えたりすることで、既習の知識・技能等の一層の定着を図るとともに、その理解度や精度を向上させたり、応用・発展的な学習内容を取り扱うことなどが考えられます。

12 体育科

(折衷案：同単元同内容異程度・異単元)

1 年間指導計画作成の際の留意点

(1) 同単元同内容異程度(完全一本案、くりかえし案)の作成における留意点

- 1年間で全ての学習を行うことから、1つの単元に割ける時間数が少なくなってしまう。
2つの単元を組み合わせる授業を行う組合せ単元で学習を進めることが有効です。4時間で計画していれば、組み合わせることで2倍の8時間連続で学習することができます。1つの運動に親しむ時間が長くなり身に付けさせたい学力を保障することができます。
- 季節や環境、学習の流れに配慮して組合せ単元を構成します。例：鉄棒と短距離走（環境面から）なわとびとマット運動（冬季に運動量の多いなわとびを先に行う）

(2) 保健の学習を異単元で作成する

- 保健の学習内容は、発達段階を考慮し、学習指導要領では学年ごとに目標と内容が示されており、学年別の学習を行うことが効果的です。学校の実態により、わたりや他の教員が学習時間に入る等工夫をして学習を進めます。

(3) 体育科で合同学習を行う際の留意点

- 複式学級を有する学校や極少人数学級においては、合同学習として、合同体育（例：3～6学年合同）や全校体育を年間指導計画に位置づけることも可能となります。
- 年間指導計画を作成するときは、ゲーム領域など多人数で学習展開ができるものを考慮しながら合同学習の計画を作成します。実施の際は、同内容であっても各学年により発達段階が異なるのでそれぞれの目標を明確にする必要があります。

2 指導にあたっての留意点

<授業の前に>

- 単元毎に各学年の目標が達成できるよう、指導内容を吟味し学年ごとの評価規準を作成します。
- 単式学級よりもさらに体格差が大きくなりがちなことから、例えば、適切なボールの大きさや材質、空気圧、マットや跳び箱の長さや高さを予め複数用意するなどしておきます。

<授業の中で>

- 異学年による合同体育では、上学年の技能、下学年の思考力・判断力が十分伸びない場合があります。
上学年については学習カードやICT機器などを活用するなどして、技能の伸びを保障していきます。
下学年については、下学年だけで話し合うなどグルーピングの工夫や思考場面（書く活動）や下学年の発言場面を設定するなど学習の進め方を工夫して思考力・判断力を育成するよう配慮します。
- 少人数で学習を行うことが多いことから、1つの運動に繰り返し長い時間にわたり取り組むことがあります。その結果、その運動に飽きてしまうこともあります。組合せ単元を組んだり同一の単元であっても運動のさせ方にバリエーション（同じ運動でも、2人組、3人組で行うなど）をつけたりゲーム化したりするなどして、運動に飽きることなく学習意欲が高まるよう工夫していきます。

低・中・高学年体育科(折衷案:同単元同内容同程度、異単元)年間指導計画(例1)

学 年	時 間	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月															
低 学 年	1	105	器械・器具を使つての運動遊び [7] 固定遊具遊び 鉄棒	ゲーム [4] 鬼遊び	ゲーム [6] 〈ベール型〉 ボール型)の当てる(攻守交代)投げ蹴る	水遊び [10] 水に慣れる遊び 浮く・もぐる遊び	表現 リズム遊 び [3] からだほ ぐし等	ゲーム [4] 鬼遊び	体つくり運動 [4] 移動・力試し	器械・器具を使つての運動遊び [9] マット・跳び箱 使った運動遊び	ゲーム [9] 〈ゴール型〉 ボール蹴り ゲーム	体つくり運動 [5] 用具操作	器械・器具を使つての運動遊び [8] マット・跳び箱 使った運動遊び	ゲーム [7] シュート ゲーム 〈ゴール型〉													
	2														走・跳の運動遊び [6] 走の運動遊び 障害走他	走・跳の運動遊び [8] 跳の運動遊び	走・跳の運動遊び [9] マット・跳び箱 使った運動遊び	ゲーム [9] 〈ゴール型〉 ボール蹴り ゲーム	表現リズム遊び [8] 表現遊び								
	3														リレー遊び												
中 学 年	1	105	器械運動 [8] 鉄棒運動	ゲーム [4] 鬼遊び	ゲーム [6] 浮く・泳ぐ運動 [11] 初歩的な泳ぎ	走・跳の運動の学習内容を未履修がないよう2年間を見越して配置する。	体つくり運動 [4] 移動・力試し・バランス	器械運動 [8] 跳び箱運動 基本的な技・発展技	走・跳の運動 [9]	保健 [4]	ゲーム [9]	体つくり運動 [5] 用具操作等	器械運動 [10] マット運動 基本的な技・発展技・組合せ技	ゲーム [9]													
	2																										
	3														走・跳の運動 [8]												
高 学 年	1	90	器械運動 [8] 鉄棒運動	ゲーム [4] 鬼遊び	ゲーム [6] 浮く・泳ぐ運動 [11] 初歩的な泳ぎ	走・跳の運動の学習内容を未履修がないよう2年間を見越して配置する。	体つくり運動 [4] 移動・力試し・バランス	器械運動 [8] 跳び箱運動 基本的な技・発展技	走・跳の運動 [9]	保健 [4]	ゲーム [9]	体つくり運動 [5] 用具操作等	器械運動 [10] マット運動 基本的な技・発展技・組合せ技	ゲーム [9]													
	2																										
	3														走・跳の運動 [8]												

ゲーム領域は、各校の実態において〇〇型ゲームを2年間を見越し適切に配置します。

走・跳の運動の学習内容を未履修がないよう2年間を見越して配置する。

陸上運動の学習内容を未履修がないよう2年間を見越して配置します。

保健学習は、各学年の成長等に合った内容を学習するため、各学年で示された内容を学習します。

ボール運動領域は、3つの型を2年間を通して全て学習します。

低・中・高学年体育科(折衷案:同単元同内容異程度、異単元)年間指導計画(例2)

学 年	時 間	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	
低 学 年	1	器械・器具を使つての運動遊び 固定遊具遊び 鉄棒	ゲーム[4] 鬼遊び	ゲーム[6] 〈ベースボール型〉 的当て (攻守交代)	水遊び[10] 水に慣れる遊び 浮く・もぐる遊び	表現リズム遊び	ゲーム[4] 鬼遊び	体づくり運動[4] 移動・力試し	ゲーム[9] 〈ゴール型〉 ボール蹴り ゲーム	体づくり運動[5] 用具操作	器械・器具を使つての運動遊び[8] マット・跳び箱を使った運動遊び	ゲーム[7] シュート ゲーム 〈ゴール型〉	
	走・跳の運動遊び[6] 走の運動遊び 障害走他 リレー遊び					走・跳の運動遊び[8] 跳の運動遊び							
	走・跳の運動遊び[6] 走の運動遊び 障害走他 リレー遊び					走・跳の運動遊び[8] 跳の運動遊び							
中 学 年	1	器械運動 鉄棒運動	走・跳の運動[6] 短距離走・障害走・リレー	ゲーム[6] ハンドベ ースボール	浮く・泳ぐ運動 [10] 初歩的な泳ぎ	体づくり運動[4] 移動・力試し・バランス	ゲーム[6] 〈ネット型〉 フレイルボール	表現運動 [6]	走・跳の運動[6] 走り高跳び	ゲーム[8] ラインボ ートボール	体づくり運動 [3] 組み合わせ	体づくり運動[5] 用具操作等	ゲーム[9] 〈ゴール型〉 ラインサッカー
	器械運動[8] 跳び箱運動 基本的な技・発展技					走・跳の運動[6] 走り高跳び							
	器械運動[8] 跳び箱運動 基本的な技・発展技					走・跳の運動[6] 走り高跳び							
高 学 年	1	器械運動 鉄棒運動	走・跳の運動[6] 短距離走・リレー	ゲーム[6] ハンドベ ースボール	水泳[10] クロール 平泳ぎ 水中からのスタート	ボール運動 [5] 〈ネット型〉 ソフトバ レーボール	陸上運動[5] 走幅跳び	体づくり運動[4] 体力を高める運動	保健[4]	体づくり運動[5] 体力を高める運動 縄跳び他	器械運動 [5] 跳び箱運動	器械運動 [5] マット運動	ボール運動[5] 〈ゴール型〉 バスケット ボール
	表現運動 [5]					陸上運動[4] 走り高跳び							
	表現運動 [5]					陸上運動[4] 走り高跳び							

13 体育科

(同単元同内容同程度)

学習指導要領における体育科の目標では、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」とされています。また体育科では、低・中・高の2学年まとめて目標及び内容が示されており、内容の取扱いに偏りが無い限り、弾力的な扱いが可能です。指導にあたっては個に応じた学習指導の工夫等の配慮が必要です。

1 年間指導計画作成の際の留意点

(1) 同単元同内容同程度（A・B年度方式、2本案）の作成における留意点

- 2年間のまとまりを意識し、2年間で全ての学習ができるように配慮します。例えば、第3学年及び第4学年のゲーム領域、第5学年及び第6学年のボール運動では3つの型(ゴール型・ネット型・ベースボール型)を2年間で全て学習します。また、各領域全般において未履修が起こることがないように年間指導計画に沿った指導を学校全体で進めていきます。
- 各領域の運動を弾力的に取り上げ大単元を組むことが可能になります。ゲームやボール運動領域等では、大単元を組むことでその運動に慣れ、時間をかけることで身に付けさせたい学力を保障することができるようになります。
- A・B年度方式で行う場合は、目標も評価規準も同じとなります。運動教材の特性により、同内容だが目標を学年別に設定する場合は体育（折衷案：同単元同内容異程度、異単元）を参考にしてください。

(2) 保健の学習について

- 保健の学習（第3学年～第6学年）については、小学校学習指導要領解説体育編の「内容の取扱い」において、各学年ごとに指導する内容が示されています。一方で、学習指導要領総則「内容等の取扱いに関する共通的事項の5」において、複式学級において特に必要がある場合には、「目標の達成に支障のない範囲内で学年別の順序によらないことができる」と特例として認められています。したがって、A・B年度方式における保健学習の取扱いにおいては、児童の発達・系統性を配慮しつつ、学校の判断により弾力的に配置することが可能となります。

2 同単元同内容同程度の指導にあたって

＜授業の前に＞

- 児童が2学年に渡っているので、運動経験や発達段階、能力など、児童の実態を考慮して、2学年共通の目標と評価規準を設定します。特に入門期の第1学年については、体育科の学習が未経験であるという実態から、目標は同じであっても、個に応じた支援を検討したり場の設定を工夫したりする等の配慮が必要です。
- 単式学級よりさらに体格差が大きくなりがちなことから、例えば、適切なボールの大きさや材質、空

気圧、マットや跳び箱の長さや高さを予め複数用意するなど、学習環境を整えます。

＜授業の中で＞

- 学年により体力や運動能力の差があるので、それらを考慮した指導（用具や練習の場の工夫、学年差や個人差に配慮したルールやグルーピングの工夫など）を行い、どの児童にも運動の特性に触れる楽しさや喜びが味わえるようにしていきます。また、体格差や体力差の実態に合わせ、段階的に指導するなど、安全面に配慮した指導を行います。
- 少人数で学習を行うことが多いことから、1つの運動に繰り返し長時間にわたり取り組むことがあります。その結果、その運動に飽きてしまうこともあります。組合せ単元を組んだり、同一の単元であっても運動の仕方にバリエーション（2人組、3人組で行うなど）をつけたり、ゲーム化したりするなどして、運動に飽きることなく学習意欲が高まるように工夫します。
- 上学年が下学年を教え、手本になったり、下学年が上学年の学び方を見て見通しをもって活動したりするなど、上学年と下学年がかかわる複式学級のよさを生かした学習活動を充実させます。

低・中・高学年体育科（同単元同内容同程度）年間指導計画（例）

週	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
2	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
3	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	
4	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47
5	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59
6	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71
7	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83
8	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95
9	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107
10	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119
11	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131
12	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143
13	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155
14	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167
15	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179
16	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191
17	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203
18	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215
19	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227
20	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239
21	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251
22	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263
23	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275
24	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287
25	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299
26	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311
27	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323
28	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335
29	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347
30	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359
31	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371
32	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383
33	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395
34	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407
35	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419
36	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431
37	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443
38	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455
39	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467
40	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479
41	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491
42	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503
43	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515
44	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527
45	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539
46	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551
47	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563
48	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575
49	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587
50	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599
51	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611
52	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623
53	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635
54	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647
55	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659
56	660	661	662	663	664	665	666	667	668	669	670	671
57	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683
58	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695
59	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707
60	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719
61	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731
62	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743
63	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755
64	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767
65	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779
66	780	781	782	783	784	785	786	787	788	789	790	791
67	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803
68	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815
69	816	817	818	819	820	821	822	823	824	825	826	827
70	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839
71	840	841	842	843	844	845	846	847	848	849	850	851
72	852	853	854	855	856	857	858	859	860	861	862	863
73	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875
74	876	877	878	879	880	881	882	883	884	885	886	887
75	888	889	890	891	892	893	894	895	896	897	898	899
76	900	901	902	903	904	905	906	907	908	909	910	911
77	912	913	914	915	916	917	918	919	920	921	922	923
78	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934	935
79	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947
80	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959
81	960	961	962	963	964	965	966	967	968	969	970	971
82	972	973	974	975	976	977	978	979	980	981	982	983
83	984	985	986	987	988	989	990	991	992	993	994	995
84	996	997	998	999	1000	1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007
85	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019
86	1020	1021	1022	1023	1024	1025	1026	1027	1028	1029	1030	1031
87	1032	1033	1034	1035	1036	1037	1038	1039	1040	1041	1042	1043
88	1044	1045	1046	1047	1048	1049	1050	1051	1052	1053	1054	1055
89	1056	1057	1058	1059	1060	1061	1062	1063	1064	1065	1066	1067
90	1068	1069	1070	1071	1072	1073	1074	1075	1076	1077	1078	1079
91	1080	1081	1082	1083	1084	1085	1086	1087	1088	1089	1090	1091
92	1092	1093	1094	1095	1096	1097	1098	1099	1100	1101	1102	1103
93	1104	1105	1106	1107	1108	1109	1110	1111	1112	1113	1114	1115
94	1116	1117	1118	1119	1120	1121	1122	1123	1124	1125	1126	1127
95	1128	1129	1130	1131	1132	1133	1134	1135	1136	1137	1138	1139
96	1140	1141	1142	1143	1144	1145	1146	1147	1148	1149	1150	1151
97	1152	1153	1154	1155	1156	1157	1158	1159	1160	1161	1162	1163
98	1164	1165	1166	1167	1168	1169	1170	1171	1172	1173	1174	1175
99	1176	1177	1178	1179	1180	1181	1182	1183	1184	1185	1186	1187
100	1188	1189	1190	1191	1192	1193	1194	1195	1196	1197	1198	1199
101	1200	1201	1202	1203	1204	1205	1206	1207	1208	1209	1210	1211
102	1212	1213	1214	1215	1216	1217	1218	1219	1220	1221	1222	1223
103	1224	1225	1226	1227	1228	1229	1230	1231	1232	1233	1234	1235
104	1236	1237	1238	1239	1240	1241	1242	1243	1244	1245	1246	1247
105	1248	1249	1250	1251	1252	1253	1254	1255	1256	1257	1258	1259
106	1260	1261	1262	1263	1264	1265	1266	1267	1268	1269	1270	1271
107	1272	1273	1274	1275	1276	1277	1278	1279	1280	1281	1282	1283
108	1284	1285	1286	1287	1288	1289	1290	1291	1292	1293	1294	1295
109	1296	1297	1298	1299	1300	1301	1302	1303	1304	1305	1306	1307
110	1308	1309	1310	1311	1312	1313	1314	1315	1316	1317	1318	1319

(同主題同内容同程度)

道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものです。各教科、外国語活動、総合的な学習の時間、及び特別活動それぞれの特質に応じて適切な指導をし、学校教育全体で道徳教育を充実させるためには、全体計画の役割が大切になります。複式学級を有する学校という特色を生かし、以下の点に配慮した全体計画を作成します。

学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育は、総則に示されている目標を目指して行いますが、各学校の具体的な道徳教育の重点を設定することが必要です。設定する際に参考にすべき事項として、教育関係法規の規定、時代や社会の要請や課題、教育行政の重点施策などが挙げられます。また、複式学級を有する小学校では、へき地に位置することが多く、小規模であるという特性をもつことから、特に学校や地域の実態と課題、教職員や保護者の願い、児童の実態と課題を十分に把握する必要があります。それらを十分考慮して、目指す児童像を明確にし、重点目標を設定することが大切です。

校長の方針を下に、道徳教育推進教師を中心として全教師が全体計画の作成に主体的に参画できる体制を整える必要があります。複式学級を有する学校は、小規模で教職員数が少なく、連携も図りやすいというよさがあります。小規模であるよさを生かし、全教職員で道徳教育及び道徳の時間の重要性や特質について理解を深め、児童の実態を共有し、それらをもとに全体計画を作成します。



2 同主題同内容同程度（Ａ・Ｂ年度方式）による年間指導計画作成の際の留意点

道徳の時間の内容は、道徳教育の目標を達成するために、指導すべき内容項目を４つの視点からとらえ、低・中・高学年に分けて示されています。このことから第１・２学年、第３・４学年、第５・６学年と２つの学年が同時に学習する複式学級にあつては、同主題同内容同程度（Ａ・Ｂ年度方式）で年間指導計画作成することができます。複式学級では単式学級以上に個人差の大きな異年齢集団であることに留意した上で指導する必要がありますが、実際の授業では、１学年より２学年という人数の多い集団で学習を進めた方が、多様な道徳的価値に触れられるというよさがあります。

(1) ２学年ごとに６年間を見通し、学年差に配慮しながら内容項目や主題（ねらいと資料）を配列する

道徳の時間では、学校の教育活動全体で行う道徳教育との関連を明確にし、児童の発達段階に即しながら、基本的な道徳的価値全体にわたって計画的、発展的に指導することが大切です。そのためには、道徳の内容項目のすべてについて、確実に指導することができる見通しのある計画を作成し、年間指導計画に基づく指導をします。

道徳の内容については、下の表のように４つの視点から分類構成されています。

道徳の内容項目の数

	１・２年	３・４年	５・６年
主として自分自身に関すること	４	５	６
主として他の人とのかかわりに関すること	４	４	５
主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	３	３	３
主として集団や社会とのかかわりに関すること	５	６	８
計	１６	１８	２２

１年間で標準時数 35 時間（第 1 学年は 34 時間）の道徳の時間においては、単式、複式に限らず各学年の重点目標に沿って 2 学年間を見通した指導を工夫し、内容項目全体の効果的な指導が必要です。

道徳副読本を使用している学校も多いと思われますが、ほとんどの副読本は学年ごとに編集されています。上学年の資料は文章量が多いなど、下学年の児童にとっては理解の難しいことがあるので、2 学年分の資料を A 年度と B 年度の 2 年間に配列する際には以下の点に留意します。

- ・ １年間で、すべての内容項目を取り上げ、残りの時間を自校の道徳教育の重点項目にあてる。
- ・ ２学年で計画的に学習ができるようできるだけ同じ時期に同じ内容項目を設定する。
- ・ ４月は特に下学年に配慮し、理解しやすい資料を取り扱う。
- ・ 児童の発達段階や特性等を考慮し、情報モラルに関する指導を適切に設定する。

(2) 各教科等、体験活動等（地域の伝統行事や集団宿泊活動、自然体験活動）との関連を図る

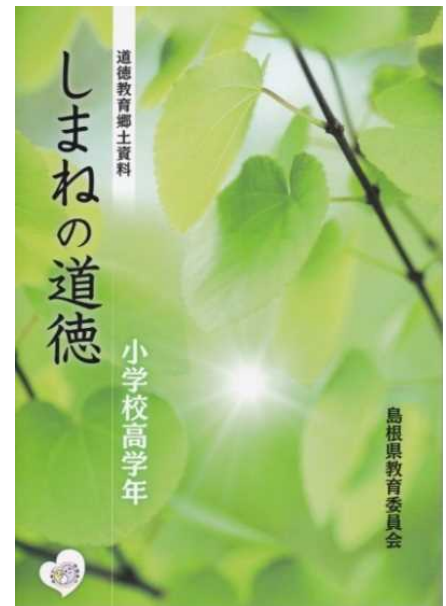
各教科、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動の特質に応じて行う道徳教育を明確にします。複式学級を有する小学校では、各教科等において学年の目標、内容、順番によらない年間指導計画が立てられていることが多くあります。そこで、各教科等において道徳教育にかかわる指導が適切に行われるよう、全体計画別葉が重要です。別葉を活用することで、道徳の時間の指導と、各教科等における道徳にかかわる指導の時期を重ねるなどの工夫ができ、より効果的な指導が可能になります。

また、複式学級を有する学校は、へき地に位置することが多く、豊かな自然環境や古くから伝わる伝統行事等に恵まれています。こうした環境を生かし、体験活動で学んだことを道徳の時間で補充・深化・統合することで、道徳的価値の自覚を一層深めることができます。

(3) 道徳副読本と「道徳読み物資料集」「しまねの道徳」「私たちの道徳」を効果的に使用する

「道徳読み物資料集」「私たちの道徳」「しまねの道徳」、道徳副読本を2年間にわたって計画的に活用します。平成26年度から配付されている「私たちの道徳」は、教育活動全体を通じて、また家庭や地域においても活用できます。道徳の時間では中心的な資料として、また補助的な資料としても活用できます。文部科学省の「道徳読み物資料集」は、平成23年3月に作成された資料で、第1・2学年8話、第3・4学年9話、第5・6学年12話が掲載されており、学習指導要領の趣旨を生かした資料とその活用例が示されています。また、平成26年度配付された「しまねの道徳（小学校高学年）」、平成27年度配付される「しまねの道徳（小学校中学年）」は児童が郷土を愛する心を育みながら道徳の学習ができる特色ある資料です。

道徳副読本には大体35時間分の資料が掲載されていますが、例えば「しまねの道徳」の資料の方が郷土愛についてより実感を伴った学習が期待できるなどの場合もあるので、資料の選択には十分に考慮します。児童、学校、地域の実態に応じて計画的に活用します。



(4) 隣接校との集合学習の検討

極小規模の学校の場合、2学年合わせても2、3名の複式学級もあります。また、欠学年が生じ、1学級1名の単式学級となる学級もあります。

そこで、こういった極小規模の学級において、集団の規模を大きくし多様な道徳的価値に触れられるようにするために、隣接校との集合学習が考えられます。ただし、道徳の時間の指導は、温かい人間関係があってこそ効果を発揮しますから、安心して自分の考えを発言できる人間関係づくりをした上で授業をする必要があります。また、道徳の時間の指導は、主として学級担任が計画的に進めるものです。そこで、それぞれの学級担任がチームティーチングにより協力的な指導を行うようにします。

集合学習は思いつきではなく、年間指導計画に位置付け、計画的に取り組む必要があります。各校の道徳教育全体計画を踏まえ、事前に十分に協議した上で授業に臨むことが大切です。

3 実際の指導にあたっての工夫

- 下学年児童が上学年児童の前でも自分の考えが自由に発言できるような環境づくりを心がけます。
上下学年の区別なく、話し合える学級経営が大切です。
- 2つの学年の生活経験の違いを生かし、多様な価値観を引き出すことが大切です。
- 資料を提示するときには、下学年に対して漢字の読みや言葉の意味などについて配慮する必要があります。視覚や聴覚に訴える変化のある資料は理解を促すのに有効です。
- 少人数であるために、多様な考えを引き出すことが難しいこともあります。指導者は、児童一人一人の実態をつかみ、意図的な指名も入れながら授業を進めます。
- 極小の学級においては、多様な道徳的価値に触れることが難しい時もあります。そのような場合には、例えばキャラクターの発言として児童に触れさせたい道徳的価値を提示するなどの工夫をします。
- 「私たちの道徳」の2つの学年にわたって記入ができる「書き込み部分」があります。書き込む際には、上学年の児童が自らの成長をさらに実感したり下学年の児童が上学年の実践から学んだりできるよう、上学年と下学年の児童が互いに書き込んだ内容について交流する時間をとります。

■ 1・2年

きそく 正しく 気持ちの よい 毎日を

1年

ランドセル

教科書

みもの 目印の

月 日 (たしかめた日)

2年

ランドセル

教科書

みもの 目印の

月 日 (たしかめた日)

家のなか

13

■ 3・4年

だれに対しても真心をもって

3年

ランドセル

教科書

みもの 目印の

月 日 (たしかめた日)

4年

ランドセル

教科書

みもの 目印の

月 日 (たしかめた日)

礼

あいつ、言葉づかい、ふるまいなど、礼は毎日の生活の中にあります。

心がけてみようと思えば、できたかどうかをたしかめてみましょう。

○よくできた ○だいたいできた

59

低学年道徳の時間（同主題同内容同程度）年間指導計画（配当表）（案）

【A年度】

【B年度】

月	主題名・内容項目	資料名 読…読み物資料集 わ…私たちの道徳 1年・2年…副読本で取り扱 われている学年	月	主題名・内容項目	資料名 読…読み物資料集 わ…私たちの道徳 1年・2年…副読本で取り扱 われている学年
4	学校大好き 4－（4）	たのしい学校 1年	4	学校大好き 4－（4）	学校大好き 2年
1年生の導入期は、特に資料を理解しやすく提示する配慮が必要です。					
	気持ちのよいあいさつ 2－（1）	まほうのあいさつ 2年		明るいあいさつ 2－（1）	たびに でて 読
	ともだちとなかよく 2－（3）	およげないりすさん わ		ともだちっていいな 2－（3）	きれいな羽（1年） 1年
同じ時期に同じ内容項目を位置付けます。					
5	みんなでまもる 4－（1）	ごちそうさまのあと で 読	5	やくそくや きまり をまもって 4－（1）	黄色い ベンチ わ
	車に気をつけて 1－（1）	どっきりしたこと 2年		わがままな気持ち 1	ぼんたと かんと 読
	いのちを 大切に 3－（1）	ハムスターの赤ちゃ ん わ		ふ	2年
6	大好きなわたしの町 4－（5）	みんなのぶんかさい 1年	6	自分の力で 1－（2）	シロクマのクウ 読
	自分でやることは しっかりと 1－（2）	小さな力のかみか さね ～二宮金次郎～ わ		生きものにやさしく 3－（2）	虫が 大すき わ
	いきものへの やさ しさ 3－（2）	たすけて 1年		はたらく たのしさ	野さいパーティー 2年
	はたらくことの た のしさ 4－（2）	みんなの ニュース がかり ※情報モラル 読		合同ボランティア清掃活動等、 近隣の学校との合同行事に合 わせ、それに関連した内容項目 を年間指導計画に位置付けた 場合、集合学習を行うこともで きます。	
7	正しいことは勇気を 持って 1－（3）	水の公園 2年	7		わ
	かぞく、大すき 4－（3）	わたしたちの大切な 日曜日 1年			2年
9	じぶんのためにがん ばろう 1－（2）	はたらけせつせ 1年	9	1－（2）	と 2年
	すがすがしいところ 3－（3）	むくどりの ゆめ 2年		うつくしいところ 3－（3）	みつとたびびと 1年
	すなおに のびのび と 1－（4）	お月さまと コロ わ		本当のこと 1－（4）	おいもほり 2年

高学年道徳の時間（同主題同内容同程度）年間指導計画（配当表）（案）

【A年度】				【B年度】			
月	主題名・内容項目	資料名 読…読み物資料集 わ…私たちの道徳 し…しまねの道徳 5年・6年…副読本で取り扱 われている学年		月	主題名・内容項目	資料名 読…読み物資料集 わ…私たちの道徳 し…しまねの道徳 5年・6年…副読本で取り扱 われている学年	
4	気持ちのよいあい さつ 2－（1）	よいあいさつが、よい出 会をつくる	5年	4	あいさつする心 2－（1）	エレベーター	6年
	自分の中のま 1－（6）				そう 1－（6）		5年
	たがいに信頼し、 学び合って 2－（3）	幸せコアラ ※情報モラル	読		たがいに信頼し、 学び合って 2－（3）	知らない間の出来事 ※情報モラル	読
年度始めは下学年にとって上学年の資料の理解が難しいことがあります。資料の提示には配慮が必要です。 情報モラルに関しては、学校や児童の実態に応じて計画的に進めます。							
5	法やきまりを守っ て 4－（1）	きまりは何のために	わ	5	社会のきまりを守 って 4－（1）	苦しいときだからこそ	読
	よく考えて行動す る 1－（1）	ホームステイ	読		望ましい生活習慣 を築ける人に 1－（1）	「早起きは三文の徳」の 意味は？	5年
	自他の生命を尊重 して 3－（1）	その思いを受けつい	わ		自他の生命を尊重	世界の人びとを守る	し
6	家族のぬくもり 4－（5）	わが家の思い出	5年	6			6年
	くじけない心 1－（2）	将棋の道を歩く	し		1－（2）		わ
	郷土や国を愛する 心を 4－（7）	人間をつくる道	わ		郷土を愛する心 4－（7）	馬入れをなくすな	し
	進んで新しいもの を求めて1－（5）	天からの手紙	わ		考えたことを試す こと 1－（5）	君の声が聞きたい	5年
7	自分の役割を自覚 して 4－（3）	小川笙船	わ	7	責任を果たす 4－（3）	采の願いを	し
	相手の立場も考え て 2－（4）	すれちがい	5年		広い心で相手のこ とを考えて 2－（4）	ブランコ乗りとピエロ	わ
9	自律的で責任ある 行動を 1－（3）	うばわれた自由	わ	9	見えない規律 1－（3）	移動教室の夜	6年

15 外国語活動

(折衷案：同単元同内容異程度・同単元同内容同程度)

1 年間指導計画を作成するにあたっての留意点

外国語活動の目標は、弾力的に指導ができるよう、学年ごとではなく2学年間を通した目標となっています。この目標を踏まえ、内容も2学年を通じて指導するものとして示され、児童の実態に応じて指導内容を設定し、必要な内容を繰り返し指導するなど、柔軟に指導することが適当であるとされています。また、コミュニケーション能力の素地を養うことが目標であることから、英語で発表したり友達とやりとりしたりする言語活動が、その中心的な内容になります。そこで、異学年がそれぞれ違う活動をする学年別指導ではなく、より人数の多い集団で活動できる同単元同内容で年間指導計画を作成することによって、外国語活動の目標を達成しやすくなると考えられます。

年間指導計画の作成にあたっては、基本的には、学年による経験差に応じた同単元同内容異程度（完全1本案・くりかえし案）と、2学年とも同じ評価規準で活動する同単元同内容同程度（A・B年度方式）の折衷案の作成が考えられます。

指導にあたっては、複式学級においても、学級担任が中心に授業を進めることが大切です。児童の実態を把握し、個々の良さや個性、学級の間関係等を考慮しながら指導することが、外国語活動の学習成果を高める上で最も重要なことの一つです。

なお、この手引きでは、文部科学省が作成・配付した「Hi, friends! 1・2」を用いた年間指導計画を作成する際の留意点等をお伝えします。

(1) 第5学年の学習意欲に十分配慮する

- ・第5学年の1学期は、初めて英語と出会う大切な時期であることから、英語への関心・意欲を高めるよう、丁寧な指導が求められます。
- ・A年度は「Hi, friends! 1」、B年度は「Hi, friends! 2」という形で教材を使用すると、B年度では、第5学年が「Hi, friends! 2」を使って英語学習を始めることになります。しかし、「Hi, friends! 2」は「Hi, friends! 1」を学習したことを前提として単元が配列されているため、5年生が「Hi, friends! 2」から始めると、表面上は活動について行くことは可能であっても、「英語は難しい」という苦手意識をもたせる恐れがあり、英語に対する学習意欲を低下させることにつながりかねません。
- ・従って、外国語活動については毎年度1学期は「Hi, friends! 1」で始め、その後「Hi, friends! 1・2」の単元を組み替えて配列する方法が望ましいと考えられます。

(2) 「Hi, friends! 1・2」の2冊を持たせる

- ・上述のことから、複式学級では児童に「Hi, friends! 1・2」の両方を持たせて指導します。
- ・「Hi, friends! 1・2」は教科書ではないため、次年度から複式学級になる単式学級の第5学年に対しても、1と2の両方を配付することが可能です。
- ・また単複を繰り返す学校においては、合同学習として単式の第5学年と単式の第6学年が一緒に活動することも可能です。

(3) 同単元同内容異程度による指導

- ・単元配列にあたっては、「Hi, friends! 1」と「Hi, friends! 2」の単元を組み替えて配置しますが、初めて英語に出会う第5学年の1学期については、「Hi, friends! 1」の単元を中心に、

毎年度同じ単元を設定します。

- ・2年間で繰り返し学習する単元（以下「共通単元」）では毎年度同じ表現を取り上げますが、例えば道案内の単元では、第6学年は一人で道案内し、第5学年は上学年の支援を得て案内するなど、目標を上学年と下学年で違うものにして、繰り返しの中でより自信を持って表現できるようにします。

(4) 同単元同内容同程度による指導

- ・2学期以降は「Hi, friends! 1・2」の単元の系統性に配慮しながら再配列します。例えば「I like ～.」の単元と「What do you like?」の単元は、連続的に取り扱うと児童にとって気づきや慣れ親しみの活動が行いやすいので、同一年度に取り入れる方が効果的であると考えられます。また、「What do you like?」と「What would you like?」は、それぞれの表現が似ている点や、意味・使用場面が違うことについて気づかせたい単元であり、年度を変えるなど単元間の時間をあけると、前に学習したことを再度想起し、表現が記憶に残りやすいと考えられます。
- ・3学期は、第6学年の中学校への接続等を配慮し、2年間のまとめとして設定された2つの単元（U7：We are good friends. とU8：What do you want to be?）をA・B年度に振り分けて配列することで、それぞれの学年の特性を考慮した年間指導計画の作成が可能です。

2 実際の指導にあたっての留意点

複式学級で外国語活動を行うにあたって、次のような長所と短所が考えられます。

- <長所>
- ・児童一人あたりの英語発話量が多い。
 - ・担任やALTが、個別に指導したり評価したりできる時間が長い。
 - ・児童一人一人の興味関心や発達段階に応じた言語活動の設定が可能である。
 - ・上学年を学習モデルとして生かすことができる。
- <短所>
- ・お互いのことをよく知っていることから、言語活動の必然性を持たせるのが難しい。
 - ・言語活動の相手に限りがあり、様々なコミュニケーションを行うことが難しい。
 - ・第6学年が中心に活動し、第5学年にとって難しい内容になることがある。

複式学級における外国語活動の指導にあたっては、これらの長所や短所を踏まえ、次のような点に配慮しながら学習活動を行うことで、複式学級の良さを生かした指導が可能になります。

(1) 初めての英語との出会いを大切にする

- ・1学期は第5学年を中心に指導内容を構成し、過度な負担がかからないよう配慮します。初めて学習する児童がいることを十分意識して、話したり指示したりするとともに、第5学年の取組状況をしっかり把握し、困っている児童がいないか確認しながら進めます。
- ・初めてティームティーチングを行うALTには、複式学級についてきちんと説明し、それぞれの学年に応じた関わり方をしてもらうよう打ち合わせを行います。
- ・振り返りカードをもとに、学習意欲の状況について十分把握します。

(2) 言語活動における第5学年と第6学年の役割分担やねらいの違いを明確にする

- ・共通単元では、第5学年と第6学年の言語活動への関わり方に差を持たせ、第6学年には少し高度なねらいを設定します。

- ・共通単位では、言語活動における第5学年と第6学年の役割分担を明確にすることで、第5学年が第6学年へのあこがれや敬意の念をもち、第6学年は第5学年への思いやりの気持ちをもって接することができるよう配慮します。
- ・単元末の言語活動を確認し、ゴールとなる児童の姿を学年別に明確にします。
- ・1単位時間のねらいに沿って、各学年の指導のポイントを確認します。
- ・たとえ第5学年が英語に慣れてきたとしても、第6学年とひとくくりにして捉えることなく、第5学年の既習内容や発達段階を十分に考慮することが大切です。

(3) 質の高い言語活動を目指す

- ・児童同士が家族のようにお互いのことを知っている少人数の学級においては、分かりきった答えを尋ねあうような言語活動にならないよう、必然性のある言語活動を設定することが重要です。
- ・友達同士やALTだけでなく、担任以外の教職員や保護者、地域の方に言語活動に参加してもらうことで、様々なコミュニケーションに触れることが可能です。
- ・少人数のメリットを生かし、端末機器等のICTを活用することで、海外の情報に直接触れたり外国の人々とコミュニケーションを図る機会を設定したりすることも可能です。

<1学期>（同単元同内容異程度）

共通単元（スタートプログラム）						
学期	Hf	時数	単元名	表現・語彙	単元目標	配慮事項
1	1-1	3	Hello!	Hello. What's your name? My name is ~. Nice to meet you. Nice to meet you too. Thank you. Good by.	- 積極的に挨拶をしようとする。 - 英語での挨拶や、自分の名前の言い方に慣れ親しむ。 - 世界には様々な言語があることを知る。 - 表情やジェスチャーをつけて相手に感情や様子を積極的に伝えようとする。	- 第5学年を中心に指導 - 第6学年はモデル、デモンストレーション - 第6学年は様々な感情表現に挑戦させる
	1-2		I'm happy.	I'm happy. How are you? I'm fine/ happy/ hungry/ sleepy	- 感情や様子を表わしたり尋ねたりする表現に慣れ親しむ。 - 表情やジェスチャーなどの言葉によらないコミュニケーションの大切さや、世界には様々なジェスチャーがあることに気付く。	

1	1-3	3	How many?	How many pencils/dogs/cats? one ~ twenty	- 積極的に数を数えたり、尋ねたりしようとする。 1～20の数の言い方や数の尋ね方に慣れ親しむ。 - 言語には、それぞれの特色があることを知る。	- 第5学年を中心に指導 - 第6学年はモデル、デモンストレーション
---	-----	---	-----------	---	--	---

1	2-1	3	Do you have [a]?	Do you have [a]? Yes, I do./No, I don't.	- 積極的にある物を持っているかどうかを尋ねたり答えたりしようとする。 31～100の数の言い方やアルファベットの小文字、ある物を持っているかどうかを尋ねる表現に慣れ親しむ。 - 世界には様々な文字があることを知る。	- 第5学年を中心に指導 - 第6学年はモデル、デモンストレーション - 第6学年は質問者側の役割分担
	1-6	3	What do you want?	What do you want? ~, please. Here you are. Thank you. You're welcome.	- 積極的にアルファベットの大文字を読んだり、欲しいものを尋ねたり答えたりしようとする。 - アルファベットの文字とその読み方とを一致させ、欲しいものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 - 身の回りにアルファベットの大文字で表現されているものがあることに気付く。	

1学期は、初めて英語に触れる第5学年の児童に対して特に配慮します。挨拶や数字、簡単な表現から始め、英語学習に対する不安感や苦手意識が生じないように留意します。

第6学年にとっては1年前と同じ内容になりますが、すでに慣れ親しんでいることを踏まえ、デモンストレーション役や第5学年をリードする役割を与え、自信や自尊感情を高めるよう配慮します。

<2学期> (同単元同内容同程度)

A年度						B年度					
学期	Hf	時数	単元名	表現・語彙	単元目標	学期	Hf	時数	単元名	表現・語彙	単元目標
2	1-4	3	I like apples.	Do you like ~ ? Yes, I do. No, I don't. I like ~ . I don't like ~ .	・好きなものや嫌いなものについて、積極的に伝えようとする。 ・好きなものや嫌いなものを表わしたり尋ねたりする表現に慣れ親しむ。 ・日本語と英語の音の違いに気付く。	2	2-2	4	When is your birthday?	When is your birthday? My birthday is ~ . first ~ thirty-first 月の名前	・積極的に誕生日を尋ねたり、誕生日を答えたりしようとする。 ・英語での月の言い方や、誕生日を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 ・世界と日本の祭りや行事に興味をもち、時期や季節の違いに気付く。
2	1-5	4	What do you like ?	What do you like ? I like ~ . I don't like blue. Do you have blue shoes? Here you are. What ~do you like ?	・好きなものについて、積極的に尋ねたり答えたりしようとする。 ・色や形、好きなものは何かを尋ねる表現に慣れ親しむ。 ・日本語と英語の音の違いに気付く。	2	2-3	3	I can swim.	I can ~ . Can you ~ ? Yes, I can./ No, I can't play, make, sing, ride, swim	・積極的に友達に「できること」を尋ねたり、自分の「できること」や「できないこと」を答えたりしようとする。 ・「できる」「できない」という表現に慣れ親しむ。 ・言語や人、それぞれに違いがあることを知る。
2	2-5	4	Let's go to Italy.	Where do you want to go? I want to go to Italy./ I want to eat pizza. Let's go.	・自分の思いがはっきり伝わるように、おすめの国について発表したり、友達の発表を積極的に聞いたりしようとする。 ・行きたい国について尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。 ・世界には様々な人たちが様々な生活をしていることに気付く。	2	1-8	3	I study Japanese.	I study Japanese. I teach Japanese. I study Japanese on Monday. What subject is this? What do you study? first ~ sixth 教科の名前 曜日	・時間割について積極的に尋ねたり答えたりしようとする。 ・時間割についての表現や尋ね方に慣れ親しむ。 ・世界の小学校の学校生活に興味をもつ。
2	2-6	3	What time do you get up?	What time is it? It's 8:00(eight). one ~ sixty What time do you get up? I get up at 6:00(six). eat, go, take	・積極的に自分の一日を紹介したり、友達の一日を聞き取ったりしようとする。 ・生活を表す表現や、一日の生活についての時刻を尋ねる表現に慣れ親しむ。 ・世界には時差があることに気付く、世界の様子に興味をもつ。	2	1-9	4	What would you like?	What would you like? I'd like juice. Here you are. Thank you. You're welcome.	・欲しいものについて丁寧に積極的に尋ねたり答えたりしようとする。 ・欲しいものについての丁寧な表現の仕方や尋ね方に慣れ親しむ。 ・世界の料理に興味をもち、欲しいものを尋ねたり言ったりする際、丁寧な表現があることに気付く。

A年度とB年度の単元の配列組み替えは、その単元で扱う言語材料の難易度等の系統性に配慮して設定しますが、学校行事や他の教科との関連などにも配慮することも大切です。

基本的には第5学年も第6学年も同じ目標、同じ評価規準で指導しますが、役割分担に配慮したり、英語学習に慣れた第6学年にデモンストレーションさせたりするなど、複式学級ならではの縦の人間関係を大切に指導します。

<3学期> (同単元同内容異程度)

3学期／学年／単元／共通単元

共通単元						
学期	Hf	時数	単元名	表現・語彙	単元目標	配慮事項
3	2-4	2	Turn right.	Where is ~ ? Go straight./Turn right/left. Stop. 建物の名前など	・積極的に道を尋ねたり、道案内したりしようとする。 ・目的地への行き方を尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。 ・英語と日本語とでは、建物の表し方が違うことに気付く。	・第6学年は自分一人でALTに案内する
	1-7	2	What's this?	What's this? It's a ~ .	・ある物について積極的にそれが何かと尋ねたり、答えたりしようとする。 ・ある物が何かと尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。 ・日本語と英語の共通点や相違点から、言葉の面白さに気付く。	・第6学年は前年の内容を踏まえて、より複雑な問題に挑戦する

大切にしたい単元、学校行事や他教科との関連で毎年行いたい単元については、年度途中に共通単元として組み込むことも可能です。

年度末は、第6学年のまとめの時期であることから、主として第6学年の指導を中心に、中学校への意欲を高めるよう単元計画を組み立てます。第5学年の児童は、活動する第6学年の姿を見てあこがれを抱き、次年度の学習への意欲につながります。

第6学年については、中学校への接続を意識し、文字の認識や少し複雑な課題にチャレンジさせることも可能です。

A年度							B年度						
学期	Hf	時数	単元名	表現・語彙	単元目標	配慮事項	学期	Hf	時数	単元名	表現・語彙	単元目標	配慮事項
3	2-8	5	What do you want to be?	What do you want to be? I want to be ~. I like ~. I want to ~. 職業の名前	・積極的に自分の将来の夢について交流しようとする。 ・どのような職業に就きたいかを尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。 ・世界には様々な夢をもつ同年代の子供がいることを知り、英語と日本語での職業を表わす語の成り立ちを通して、言葉の面白さに気付く。	・第6学年を中心に指導 ・第5学年は発表はしない	3	2-7	5	We are good friends.	We are good friends. We are strong and brave. [ももたろう]	・積極的に英語で物語の内容を伝えようとする。 ・まとまった英語の話を聞いて、内容がわかり、場面に合ったセリフを言う。 ・世界の物語に興味をもつ。	・第6学年を中心に指導 ・第5学年は発表はしない

16 総合的な学習の時間

(折衷案：同単元異内容同程度・同単元同内容同程度)

1 全体計画作成の際の留意点

総合的な学習の時間の目標は第3学年から第6学年まで共通で示され、その目標を踏まえて、各学校において目標と内容を定めます。つまり、複式学級であるなしに関わらず第3学年と第4学年、第5学年と第6学年が同じ目標、同じ内容で学習することもできますし、複式学級の2つの学年が、それぞれ異内容で学習することもできます。どのような内容をどの学年のまとまりで学習するのかが、全て学校に任されています。

全体計画は「各学校の目標」「育てようとする資質や能力及び態度」「各学校において定める内容」を備えるべき必須の3要件とし、基本的な内容や方針等を概括的に示すものとして「学習活動」「指導方法」「学習の評価」「指導体制」を考えて作成します。

全体計画を作成する際、以下の点について配慮が必要です。

- 目標は、小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編第2章第2節に示されている「第1の目標」を構成する五つの要素を含むよう配慮し、児童・地域・学校の実態や児童の成長に寄せる保護者・地域・教職員の願いについて考慮します。
- 第1の目標を構成する五つの要素
- ①横断的・総合的な学習や探究的な学習を通すこと
 - ②自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成すること
 - ③学び方やものの考え方を身に付けること
 - ④問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てること
 - ⑤自己の生き方を考えることができるようにすること
- 育てようとする資質や能力及び態度には、各学校の目標が実現された際に現れる望ましい児童の成長の姿が示されます。望ましい姿には学年段階によって違いが出てきますから、育てようとする資質や能力及び態度の設定に際しては、学年段階ごとに考えることが必要となってきます。この学年段階は、第3・4学年、第5・6学年をそれぞれ1つの段階とした2つの学年段階による設定が実践事例としても多く、また現実的な示し方です。

複式学級においては、第3・4学年、第5・6学年と2学年をひとまとまりとした学習の実践事例が多く見られます。その場合も、目標や内容は各学校が、同単元異内容指導、同単元同内容同程度指導、同単元同内容異程度指導など、児童・地域・学校の実態に合わせて独自に決めていくことができます。ただし、その際にも、上記の2点を踏まえていることが大切です。

2 年間指導計画作成の際の留意点

複式学級であるなしに関わらず、年間指導計画において単元を配列する際には、次に示す5つのパターンがあります。それぞれの特徴を生かしながら作成することが望まれます。

- (1) 分散型…総合的な学習の時間の単元を学期ごとなどいくつかの期間に分けて取り組むもの
- (2) 年間継続型…1年間を通じて同じテーマで継続的に取り組むもの
- (3) 集中型…季節や地域の行事などを中核にしてある期間に集中的に取り組むもの
- (4) 並列型…同じ時期に複数の単元に平行して取り組むもの
- (5) 複合型…学年単位の活動と学級単位の活動など、異なる学習形態や学習集団などを組み合わせて取り組むもの

また、「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」に示されている次のような年間指導計画作成上の留意点(1)～(7)に配慮する必要があります。

(1) 児童の学習経験に配慮すること

- ・児童のこれまでの学習経験やその経験から得られた成果について事前に把握し、それらを生かしながらか計画を立てます。特に導入学年となる第3学年には、生活科等における学習活動とその成果を把握しておくことが大切です。その上で題材等を検討し、場合によっては学年による発達段階等を考慮し異内容にすることが考えられます。

(2) 十分な見通しをもった周到な計画にすること

- ・前年度の適当な時期に次年度の計画を検討し、実践の事実に応じて成果や課題などに応じて修正を加えることが求められます。学年間のつながりにも目を向けながら、内容、資質や能力及び態度などを中心に見直し、見通しをもって4月を迎えることが大切です。

(3) 季節や行事等を考慮し、適切な活動時期を設定すること

- ・1年間の季節や行事の流れを生かすことが大切です。地域や校内の行事等について、時期と内容の両面から、その関連付けを検討しましょう。地域の伝統行事、季節の変化、栽培・飼育活動等、学習活動を特定の時期に集中させることでその効果が一層高まるものもあります。

(4) 各教科等との関連に配慮すること

- ・総合的な学習の時間では、各教科等で別々に身につけた知識や技能をつながりのあるものとして組織化し直し、改めて現実の生活にかかわる学習において活用することが求められています。このことから、総合的な学習の時間と各教科等との関連を意識した計画を作成することが重要となります。

(5) 学年間の関連を見通すこと

- ・第3学年から第6学年までの内容や学習活動の関連を意識して指導できるよう、全ての学年の年間指導計画を1枚の表に書き込み、総合的な学習の時間の取組を俯瞰することも重要です。

(6) 弾力的な運用に耐えうる柔軟性をもつこと

- ・児童の興味・関心や問題意識の方向性が当初計画した通りに展開されず「ずれ」が生じた場合や、方向性が同じでも想定していた児童の姿との間に「隔たり」がある場合には、単元の展開途中であっても変更や改善を加えることが望まれます。

(7) 外部の教育資源の活用及び異校種との連携や交流を意識すること

- ・保護者や地域の人、専門家などの多様な人々の協力、公民館や図書館といった施設・設備の活用など、様々な教育資源を生かすことが大切です。異校種との連携や交流活動を行う際には、児童にとって交流を行う必要感や必然性があるかどうか等を考慮する必要があります。

複式学級においては、これら7つの留意点に加えて次の点について配慮することが大切です。

- ・同単元異内容指導において、2年続けて同じテーマの単元を行う場合、同じ活動の繰り返しとならないように配慮します。1年目に取り組んだ活動から新たな課題を見出し、次の探究活動につなげる等の工夫が必要です。
- ・年度によっては児童数が大きく変動する可能性があります。児童の実態を考慮した計画となるよう、毎年見直していく必要があります。
- ・教科等を同単元同内容同程度（A・B年度方式）で行う場合は、年度ごとに総合的な学習の時間と教科等との関連を確認する必要があります。

3 指導にあたって

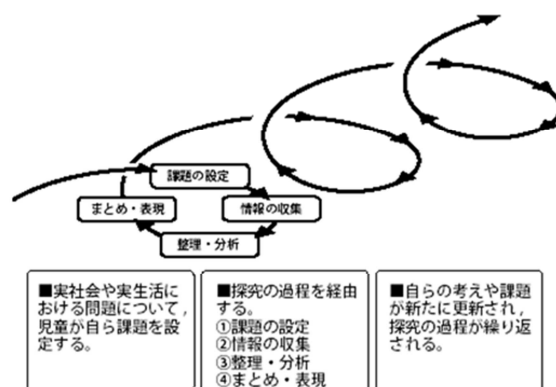
総合的な学習の時間における学習指導のポイントは、「探究的な学習にすること」と「協同的な学習にすること」です。複式学級においても、そのポイントは同じです。

(1) 探究的な学習について

総合的な学習の時間では、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通すことを目標にしています。

そして、探究的な学習とするためには、「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現」の探究の過程を経由することが大切です。また、この探究の過程は、図のように何度も繰り返され、スパイラルに高まっていく必要があります。

その際、以下の点について配慮が必要です。



①課題の設定

・児童の発達や興味・関心を適切に把握し、体験活動などを通して課題意識をもたせることが大切です。その際、教師が意図的な働きかけをすることが重要です。

②情報の収集

・児童が目的を明確にして自覚的に情報を収集する図書やインターネットの利用、保護者・地域住民へのアンケートやインタビュー、あるいは児童が無自覚のうちに情報を収集する体験活動などを通して、より多くの情報を収集することが大切です。

③整理・分析

・収集した情報を、比較、分類、関連づけなどして整理・分析し、思考する活動へと高めるようにすることが大切です。そのためにはマップやベン図といった思考ツールを活用することも考えられます。

④まとめ・表現

・情報を再構築し、それを他者に伝えたり、自分自身の考えとしてまとめたりする学習を行うことで、新たな課題が生まれ新たな探究活動に発展します。相手意識や目的意識を明確にすることが大切です。

少人数である複式学級の場合、「課題の設定」において、教師は児童一人一人の考えや課題を十分に把握することが比較的容易であると考えられます。その一方で、「まとめ・表現」においては、少人数であるため活動が制限されてしまう場合があります。学級内での発表だけでなく、他学級や全校、保育園等の地域に向けての発表を取り入れるなどの工夫が望まれます。

(2) 協同的な学習について

多様な考えをもつ他者と適切にかかわり合ったり、社会に参画したり貢献したりする資質や能力及び態度の育成につながることから、総合的な学習の時間では、他者と協同して課題を解決しようとする学習活動を重視します。

その際、以下の点について配慮が必要です。

①多様な情報を活用して協同的に学ぶ

情報交換しながら学級全体で考えたり話し合ったりすることで、探究的な学習へと高めることが可能となります。

②異なる視点から考え協同的に学ぶ

児童の見方とは異なる資料を用意したり、専門家へのインタビューを取り入れたりする等の工夫が考えられます。

③力を合わせたり交流したりして協同的に学ぶ

集団で実現できる課題を設定したり、専門家からの助言や地域の大人から激励を受ける場面を設定したりする等の工夫が必要です。

少人数である複式学級においては、他者との関わりに限りがあります。多様な情報が活用できるよう、学級の枠を越えた他学年や学校全体による学習活動・学習形態の工夫が必要です。場合によっては、近隣の学校との集合学習も考えられます。その際には、教員同士が各校の総合的な学習の時間の目標、内容等を十分に理解し、事前に計画したうえで学習に臨むことが大切です。

また、他の教科等における間接指導によって培われている自力解決の態度や能力、学び合う力を、総合的な学習の時間における探究の過程に生かして取り組むことを意識し、主体的・協同的に課題を解決していけるように計画することが大切です。

4 学習状況の評価についての考え方

総合的な学習の時間の評価では、「児童にどのような力が身についたのか」を適切に評価します。その際、各学校が定めた目標及び内容、育てようとする資質や能力及び態度を踏まえることが必要です。また、総合的な学習の時間の評価は、各学校で適切に評価の観点を定め、これに基づいて児童の学習活動をよりよく改善するものであることに十分配慮しなければなりません。

評価の観点をもとに単元の評価規準を設定します。単元の評価規準では、児童が取り組む学習活動との関連において、その場面で児童に期待される学習の姿を想定し、具体的に示す必要があります。評価にあたっては、学習活動をとおして育てようとする資質や能力及び態度が適切にはぐくまれ、内容が学ばれているのかを、児童の学習状況からいねいに見取ることが大切です。

複式学級においては、各指導類型に沿った評価規準を設定します。設定にあたっては、学年段階と個々の児童の実態を踏まえる必要があります。同単元同内容指導においては、2学年とも同じテーマ、活動内容及び評価規準を設定し、同程度指導として活動を展開することができますが、異学年児童の学びの違いを発達特性と捉え、発達段階を考慮して評価規準を設定する異程度指導として展開することも可能です。

複式学級であるなにかかわらず、児童の学習状況の評価を適切に実施するには、多様な評価（方法、場面、評価者等）となっているか、過程の評価（事前の実態把握、途中・終末の学習状況把握、継続的な把握等）が適切に行われているかが大切です。評価の信頼性を高めるために、児童がどのような資質や能力及び態度がはぐくまれているのか、何を学び取っているのかを、多様な評価と過程の評価を意識して行い、それを指導に役立てる必要があります。

中学年総合的な学習の時間(折衷案:同単元異内容同程度、同単元同内容同程度) 年間指導計画(例)

		4月	5月	6月	7月	8・9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
単元名 (予定時数)	単元名 (予定時数)	〇〇川探検隊(35時間)										
		伝えよう〇〇町の今(35時間)										
単元名 (予定時数)	目標	〇〇町についての情報を集め、その分析を行い、テレビ番組を製作することを通して、自分たちの町のよさや課題を再認識し、地域に誇りと愛情を持つとともによりよい地域にしようとする。										
	主な学習活動	・社会科「身近な地域や市」と関連させながら、〇〇町について知っていることを付箋に書き出す。 ・付箋を出し合いながら、〇〇町のよさや課題について話合う。 ・〇〇町のよさや課題は何か、町探検やインタビュー、アンケートによる調査を行い、さらに情報を集める。 ・集めた情報の序列化(ランキング)を通して、〇〇町のよさや課題について考える。 ・テレビ番組作りをする。 ・テレビ番組「〇〇町の今」の発表会をする。 ・学習を振り返り、レポートにまとめる。										
単元名 (予定時数)	目標	国語:「話すこと・聞くこと」「書くこと」 社会:「身近な地域や市」「地域の人の生活や販売」「地域の人の生活と生活に必要な飲料水、電気、ガス、ガスの確保や廃棄物の処理」「災害及び事故の防止」「地域の人の生活」「県の様子」 算数:「表やグラフ」「資料の分類整理」 理科:「身近な自然の観察」「月と星」 道徳:1(1)、1(2)、2(1)、2(3)、3(3)										
	主な学習活動	※足りない情報はさらに調査したり、新たな課題を提示したりするなど、探究のスパイラルを大切にしたい指導を工夫します。										
単元名 (予定時数)	目標	私たちの知らない昔の〇〇町(35時間)										
	主な学習活動	高齢者の方々から、地域での昔の生活や苦労についての話を聞くことで、地域に愛着を持つとともに自分たちの生活のあり方を見直すことができる。 ・社会科「地域の人の生活」と関連させ、昔の〇〇町の写真を提示することで、学習への関心を高める。 ・地域のお年寄りから昔の話を聞き、さらに調べたいことを考える。 ・〇〇町の昔について郷土資料館で調べたり、地域の方にインタビューをしたりする。 ・調べたことを物、設備、自然等の項目に分けた表にまとめ、紹介したいことを考える。 ・生活の知恵や生き方についてパンフレットにまとめ、学習したことを全校に伝える。 ・学習を振り返り、感想発表会を行う。										
単元名 (予定時数)	目標	国語:「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」 社会:「身近な地域や市」「地域の人の生活や販売」「地域の人の生活と生活に必要な飲料水、電気、ガス、ガスの確保や廃棄物の処理」「災害及び事故の防止」「地域の人の生活」「県の様子」 道徳:1(1)、1(2)、2(1)、2(3)、4(5)、4(6)										
	主な学習活動	国語:「話すこと・聞くこと」「書くこと」 社会:「身近な地域や市」「地域の人の生活や販売」「地域の人の生活と生活に必要な飲料水、電気、ガス、ガスの確保や廃棄物の処理」「地域の人の生活」「県の様子」 算数:「長さ」「重さ」「体積」「表やグラフ」 理科:「身近な自然の観察」「季節と生物」 道徳:1(1)、1(2)、2(1)、2(3)、3(1)、3(2)										

※児童が様々な課題に取り組めるように、A・B年度で内容を変えて設定することが考えられます。
※教科等との関連については、年度によって確認する必要があります。

※他教科等で習得した知識・技能等を活用することを意識して計画することが重要です。
※3年生には初めての総合的な学習の時間の学習となるため、学習の進め方を丁寧にすることが大切です。

17 特別活動

(同内容同程度)

1 複式学級の特性を生かす

特別活動では、第1学年から第6学年まで共通の目標になっています。また、内容は低学年、中学年、高学年に分けて示されています。

特別活動の計画・実施にあたっては、学校独自の創意・工夫が大切です。複式学級ならではの児童同士の密接な人間関係、異年齢の児童が共に生活する学級、全校児童を対象とした行事等の企画のしやすさなどの特性を生かしながら、特色ある活動を計画します。特に、以下の活動については、複式学級の特性を生かしつつ、重点的に取り組む必要があります。

- (1) 集団として意見をまとめるなどの話し合い活動
- (2) 自分たちできまりをつくって守る活動
- (3) 人間関係を形成する力を養う活動
- (4) 振り返り活動

2 特別活動の各内容の指導における留意点

(1) 学級活動

複式学級では、特に「望ましい集団活動を通して」という特別活動の特質を意識しながら実践していくことが大切です。

○低学年や中学年における学級活動は、学級を単位とした議題や題材を取り上げます。しかし、複式学級は少人数であり、学級の児童数が少ないため、学級生活における課題が限られる場合があります。高学年と同様に、取り上げる議題や題材は学校生活全体や幼保小連携活動等、広がりをもたせるよう工夫することが大切です。

○複式学級にあっては学級活動「(1)学級や学校の生活づくり」、「(2)日常の生活や学習への適応及び健康安全」の内容の特質に応じて、学級の実態に合った議題や題材を工夫する必要があります。

(2) 児童会活動

○異年齢集団による自治的、自発的な活動の場や機会を多く設定し、高学年のリーダーシップを育て、学校集団としての活力を高め、楽しく豊かな学校生活をつくるよう努めます。

○児童の自治的、自発的な活動において、児童数が少ないことにより教師に依存してしまうことのないよう、活動に関しては可能な限り児童に任せるという態度が大切です。

○児童会の運営は、主として高学年の児童が行うこととなっていますが、児童の発達の段階などを考慮しながら、中学年の児童が運営に参加できるように配慮したり、低学年の意見が児童会に反映されるよう工夫したりすることも考えられます。

(3) クラブ活動

○児童の自治的、自発的な活動としてクラブ活動を展開できるようにするためには、教師が作成した年間指導計画に基づき、上学年の児童が中心となって年間の活動計画を立てて活動することが大切です。

○小規模校においては、第3学年や低学年からクラブ活動に参加できるようにしたり、その人数に見合っ

たクラブの数を組織したりすることが考えられます。その場合、特に児童の発達の段階などを考慮し、学級や学年が異なる仲間と協力して活動を進めることができた喜びなどが実感できるよう指導します。

○必要に応じて社会教育施設をはじめとする学校外に活動の場を求めたり、地域の人々をはじめとする専門的な外部講師の協力を得たりするなど、様々な人との出会いを大切に活動工夫することが考えられます。

(4) 学校行事

- 郷土に愛着を深める観点から、地域の伝統や文化に触れる機会を積極的に設定します。
- 学校行事の指導計画作成に関して、地域社会との連携を図るうえで、次のことに考慮します。
- ・学校行事の年間指導計画の立案にあたっては、地域の実態に即した特色ある行事の創造を意識し、地域社会との連携を生かすことが大切です。連携を進めるために、例えば地域社会の人々が参観しやすい期日に授業公開日を設定したり、地域の伝統文化に触れる活動や地域の行事との関連を図ったりすることが考えられます。
 - ・勤労生産・奉仕的行事などを実施する際には、積極的に保護者や地域の関係団体と連携をとります。例えば幼稚園や保育所、介護施設などと交流し、多様な人々と人間関係を築こうとする態度の育成を図ります。
 - ・学校行事としてのねらいを地域の方に示しながら、学校行事としてふさわしい活動にします。

3 複式学級における学級活動の年間指導計画作成の留意点

学校や学級、児童の実態に即し、学校行事との効果的な連携を図りながら計画を立てます。また、学級会の「話し合い活動」の指導は、低学年、中学年、高学年の系統性をもって取り組みます。

低学年学級活動（同内容同程度）年間指導計画（例）

月	議 題 ・ 題 材	内 容	学 校 行 事
4	・ 1（2）年生になって ・ 安全な学校の行き帰り ・ 身のまわりの整理整頓 ・ 学級の係や当番を決めよう ・ 一学期のめあてを決めよう	2年生には1年生を温かく迎え、一緒に学校生活を送るよう指導し、1年生が集団で活動する楽しさを味わい、安心して学校に通えるようにします。 1－イ 1－ア	・ 遠足
5	・ 学級目標をつくろう ・ 給食を食べよう（食の学習ノート） ・ 正しい避難の仕方	1－ウ	・ 避難訓練
6	・ なかよくしよう ・ 学級の問題について話し合おう① ・ 雨の日の過ごし方	1－ア 2－イ	・ 運動会
7	・ 学級レクをしよう ・ 夏休みの計画を立てよう ・ 一学期を振り返ろう	1－ウ 2－イ 1－ウ	・ プール開き ・ 個人懇談・大掃除 ・ 終業式
9	・ 二学期のめあてを決めよう ・ 係と当番を見直して工夫しよう ・ 丈夫な歯をつくろう	1－ア 2－エ 2－カ	・ 始業式
10	・ 目を大切にしよう ・ そうじをしっかりとろう ・ 本に親しもう ・ 学級の問題について話し合おう②	2－カ 2－エ 2－オ 1－ア	・ 校内持久走 ・ 避難訓練
11	・ 感謝して食べよう ・ 学習発表会を成功させよう ・ お世話になった〇〇さんへ、感謝の気持ちを伝えよう①	2－キ 1－イ 2－ウ	・ 連合音楽会 ・ 学習発表会
12	・ お世話になった〇〇さんへ、感謝の気持ちを伝えよう② ・ 二学期を振り返ろう	2－ウ 1－ウ	・ 個人面談 ・ 大掃除・終業式
1	・ 係の仕事を考えよう ・ 新年の決意を持とう ・ 私たちの体の成長と変化	1－イ 2－ア 2－カ	・ 始業式 ・ 書き初め会 ・ 避難訓練
2	・ かぜの予防 ・ 6年生に感謝の気持ちを伝えよう ・ 学級の問題について話し合おう③	2－カ 1－ウ 1－ア	・ 一日入学
3	・ 一年間を振り返ろう ・ さよなら会をしよう ・ もうすぐ2（3）年生	1－ウ 1－ウ 2－ア	・ 6年生を送る会 ・ 修了式

中学年学級活動（同内容同程度）年間指導計画（例）

月	議 題 ・ 題 材	内 容	学 校 行 事
4	・ 3（4）年生になって ・ 学級の係や当番を決めよう ・ 一学期のめあてを決めよう ・ 正しい自転車の乗り方	2－ア 1－イ 1－ア 2－カ	・ 入学式、始業式 ・ 交通安全教室 ・ 身体測定・内科検診 ・ 遠足
5	・ 学級目標をつくろう ・ 正しい避難の仕方 ・ 男女なかよくしよう	1－ウ	・ 避難訓練
2－カ 下学年の児童の発言も尊重し、全員参加の話し合いとするようにします。			
6	・ 雨の日の過ごし方 ・ 学級の問題について話し合おう① ・ 学級レクを計画しよう	1－ア 1－ウ	歯科検診・耳鼻科検診 ・ 運動会
7	・ 学級レク ・ 夏休みの計画を立てよう ・ 一学期を振り返ろう	1－ウ 2－イ 1－ウ	・ プール開き ・ 個人懇談・大掃除 ・ 終業式
9	・ 二学期のめあてを決めよう ・ 係と当番を見直して工夫しよう ・ 丈夫な歯をつくろう	1－ア 2－エ 2－カ	・ 始業式
10	・ 目を大切にしよう ・ そうじをしっかりとろう ・ 本に親しもう ・ 学級の問題について話し合おう②	2－カ 2－エ 2－オ 1－ア	・ 校内持久走 ・ 避難訓練
11	・ 感謝して食べよう ・ 学習発表会を成功させよう ・ お世話になった〇〇さんへ、感謝の気持ちを伝えよう①	2－キ 1－イ 2－ウ	・ 連合音楽会 ・ 学習発表会
12	・ お世話になった〇〇さんへ、感謝の気持ちを伝えよう② ・ 二学期を振り返ろう	1－ウ	保護者や地域との関わりの中から、議題を設定することもあります。 ・ 大掃除・終業式
1	・ 係の仕事を考えよう ・ 新年の決意を持とう ・ 私たちの体の成長と変化	1－イ 2－ア 2－カ	・ 始業式 ・ 書き初め会 ・ 避難訓練
2	・ かぜの予防 ・ 6年生に感謝の気持ちを伝えよう ・ 学級の問題について話し合おう③	2－カ 1－ウ 1－ア	・ 一日入学
3	・ 一年間を振り返ろう ・ さよなら会を計画しよう ・ もうすぐ4（5）年生	1－ウ 1－ウ 2－ア	・ 6年生を送る会 ・ 修了式

高学年学級活動（同内容同程度）年間指導計画（例）

月	議 題 ・ 題 材	内 容	学 校 行 事
4	・ 5（6）年生になって ・ 学級の係や当番を決めよう ・ 一学期のめあてを決めよう ・ 委員会活動を充実させよう	6年生は最上級生として学校全体をリードしていく自覚、5年生は高学年として6年生と協力していく心構えについて、目標を自己決定できるようにします。	
5	・ 学級目標をつくろう ・ 互いのよさを見つけよう ・ 正しい避難の仕方 ・ 家庭学習を見直そう	1－ウ 2－カ 2－イ	・ 避難訓練 ・ 家庭訪問
6	・ 上手に歯磨きをしよう ・ 学級の問題について話し合おう① ・ 安全な水泳	議題は、学校生活全体や幼保小連携活動等、対象に広がりをもたせるよう工夫することが大切です。	
7	・ 心身の発育と変化 ・ 夏休みの計画を立てよう ・ 一学期を振り返ろう	2－カ 2－イ 1－ウ	・ 運動会 ・ プール開き ・ 個人懇談・大掃除 ・ 終業式
9	・ 二学期のめあてを決めよう ・ 係と当番を見直して工夫しよう ・ バランスのよい食事	1－ア 2－エ 2－カ	・ 始業式
10	・ 目を大切にしよう ・ そうじをしっかりとろう ・ 図書館を有効に活用しよう ・ 学級の問題について話し合おう②	2－カ 2－エ 2－オ 1－ア	・ 校内持久走 ・ 修学旅行 ・ 避難訓練
11	・ 感謝して食べよう ・ 学習発表会を成功させよう ・ お世話になった〇〇さんへ、感謝の気持ちを表そう①	2－キ 1－イ 2－ウ	・ 連合音楽会 ・ 学習発表会
12	・ お世話になった〇〇さんへ、感謝の気持ちを表そう② ・ 差別や偏見をなくそう ・ 二学期を振り返ろう	2－ウ 1－ア 1－ウ	・ 個人面談 ・ 大掃除・終業式
1	・ 係の仕事を考えよう ・ 新年の決意を持とう ・ 良いまとめをしよう	1－イ 2－ア 2－ア	・ 始業式 ・ 書き初め会 ・ 避難訓練
2	・ かぜの予防 ・ 自分も人も大切にしよう ・ エイズについて ・ 送る会に向けて ・ 卒業式に向けて	2－カ 2－カ	・ 一日入学
3	・ さよなら会を計画しよう ・ もうすぐ6年生（5年） ・ もうすぐ中学生（6年）	1－ウ 2－ア 2－ア	・ 6年生を送る会 ・ 修了式

◇参考文献・引用文献等

- 小学校学習指導要領（文部科学省，平成 20 年 3 月告示）
- 小学校学習指導要領解説総則編（文部科学省，平成 20 年 8 月）
- 小学校学習指導要領解説各教科編（文部科学省，平成 20 年 8 月）
- 小学校複式学級指導資料理科編（文部省，平成 6 年）
- 小学校複式学級指導資料生活編（文部省，平成 6 年 12 月）
- 小学校複式学級指導資料音楽編（文部省，平成 7 年 10 月）
- 小学校複式学級指導資料家庭編（文部省，平成 7 年 10 月）
- へき地教育資料第 52 号（文部省，平成 7 年 3 月）
- へき地教育資料第 51 号（文部省，平成 5 年 3 月）
- 文部科学省学校基本調査
- 教育の未来を拓く学習指導要領の変遷
（別冊初等教育資料，文部科学省教育課程課／幼児教育課，東洋館出版社，平成 25 年 5 月 22 日）
- 改訂複式学級の指導（島根県教育委員会，昭和 61 年度再版）
- 平成 27 年度各教科の指導の重点（島根県教育委員会，平成 27 年 3 月）
- 学習評価を生かした授業改善、授業づくりのためのハンドブック[小学校]（島根県教育委員会，平成 23 年 3 月）
- 小学校・中学校教育課程の編成・実施の手引－Q&A－（島根県教育委員会，平成 22 年 3 月）
- 複式学級指導事例集第 20 集（島根県教育委員会，平成 9 年 4 月）
- 国と島根の教育（島根県教育委員会，昭和 40 年、昭和 45 年）
- 島根の教育（島根県教育委員会，昭和 50 年、昭和 55 年、昭和 60 年、平成元年、平成 5 年、平成 10 年、平成 15 年、平成 20 年、平成 25 年、平成 27 年）
- 複式学級における学習指導の在り方【改訂版】（北海道立教育研究所・北海道教育大学，平成 24 年 3 月）
- 複式学級を有する学校のために－複式学級指導資料－（宮崎県教育委員会，平成 23 年 3 月）
- 複式学級指導の手引（天草郡市教育委員会連絡協議会，平成 22 年 3 月）
- へき地・複式教育ハンドブック（一般編）（青森県教育委員会，平成 19 年 3 月）
- 入門 複式授業－始めよう複式学習の指導－
（岩手大学教育学部 岩手県小規模・複式学校教育研究連盟，平成 17 年 3 月）
- 岩手の小規模・複式指導ハンドブック－生活・音楽・図工・家庭・体育－（岩手県教育委員会，平成 16 年 1 月 9 日）
- 平成 26 年版（平成 25 年度実践事例集）「明日を拓く」－へき地・複式・小規模校からの発信－ふるさとでの学びを生かし、新しい時代を築く心豊かな子どもの育成－（全国へき地教育研究連盟，平成 26 年 3 月 31 日）
- ふるさと発『生きる力』を育む教育の創造－へき地・複式・小規模学校の課題解明へのアプローチ－
（全国へき地教育研究連盟，平成 13 年 8 月 1 日）
- へき地・複式・小規模学校 Q&A－新学習指導要領に添う新しい研究推進のために－
（全国へき地教育研究連盟，平成 12 年 9 月 25 日）
- これだけは知っておきたいへき地教育ガイドブック（全国へき地教育研究連盟，平成 7 年 8 月 20 日）
- へき地・小規模・複式学校の特性を生かした学習指導（指導方法）（全国へき地教育研究連盟，平成元年 3 月 31 日）
- へき地・複式教育ハンドブック（全国へき地教育研究連盟，昭和 60 年 1 月 25 日）
- 学習指導方法の工夫・改善（全国へき地教育研究連盟，平成 10 年 10 月 10 日）
- 複式教育ハンドブック－異学年が同時に学び合うよさを生かした学習指導－
（広島大学附属東雲小学校，平成 22 年 6 月 25 日）
- 複式学級指導法－単式学級内の学力差に対応した現場の工夫にも役立つ指導法－
（長崎・鹿児島・琉球 3 大学連携研究「複式学級指導法」編集委員会編，東京教学社，平成 21 年 3 月 31 日）
- 小学校家庭科の授業づくりと評価（筒井恭子，明治図書，平成 24 年 2 月）
- 平成 20 年改訂小学校教育課程講座家庭（長澤由喜子・鈴木明子，ぎょうせい，平成 20 年 11 月 15 日）
- へき地・複式教育の基礎的研究－社会科を中心に－（有馬毅一郎，平成 14 年 3 月 2 日）
- 小は大をかねる（玉木国寿，平成 13 年 12 月 17 日）
- 複式指導における年間指導計画案について－作成の方針・使用上の留意点－（光村図書出版）